

## あ い さ つ

中央区教育委員会教育長 高橋 春雄

日本橋中学校は、平成20・21・22年度の3年間、文部科学省学力向上実践研究推進校として、「基礎学力の確かな定着と向上を目指した指導法の改善－読解力・思考力・判断力・表現力の育成と評価の工夫、学業指導の充実を通して－」を研究主題に設定し、全教科を通して研究に取り組んでこられました。この度、3年間の研究成果をまとめられ、広く発表できる運びとなりましたことを喜びとするところであります。

新学習指導要領では、確かな学力の育成を図るためには、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得とともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成することが重要であると示しております。平成23年度に小学校で、平成24年度には中学校で新学習指導要領が全面実施されることになっており、現在、全国の学校で、新学習指導要領の実施に向けた指導体制の整備も含めて、様々な課題への取り組みが行われているところです。

本研究は、学力向上に向けた各教科の指導方法の工夫改善にかかわる実践的研究であるとともに、基礎学力の定着・向上、読解力・思考力・判断力・表現力の育成なども研究主題に掲げております。まさに、新学習指導要領に示された確かな学力の育成という視点にたった、機を捉えた価値ある研究であります。

また、学力向上に関しては、子どもたちの学習意欲や家庭における学習習慣・生活習慣のあり方にも課題があると指摘されております。これらの課題に対しても本校は、学習区分ごとにきめ細やかな学習評価を生徒・保護者へ通知し、学習相談・面談を行うことで学習意欲の向上につなげたり、生徒・教師が毎日記入する「生活と学習のサプリノート」を通して家庭での学習習慣を図ったりするなど、学力向上を総合的な観点から捉えて真摯に研究に取り組んでこられました。

これらの3年間の取り組みにより、本校の生徒一人ひとりが確かな学力を着実に身に付けつつあることはもとより、学力向上を目指した学校と保護者との一体となった取り組みが充実してきていると伺っております。

今後、本校でのさらなる研究実践を期待しますとともに、本研究の成果が区内外の学校で広く活用されますことを切に願っております。

結びに、本校の研究に熱心なご指導を賜りました帝京大学教授 浦野 東洋一先生、東京農業大学教授 緑川 哲夫先生、相模女子大学教授 佐藤 道幸先生、帝京大学准教授 石橋 昭先生をはじめ、本校の研究を支えてくださった皆様に、心から感謝申し上げます。また、たゆまぬ努力を通して本研究を積み上げてこられました、田部井 重雄校長をはじめとする教職員の皆様に御礼申し上げあいさついたします。

## はじめに

校長 田部井 重雄

新学習指導要領では、確かな学力を基盤とした生きる力の育成を求めています。当然のことながら、確かな学力は、豊かな心や健やかな身体に裏打ちされたものであり、三位一体的な育ちの中で生きる力を育成することを大きなねらいとしています。そして、学力向上では、基礎的・基本的な知識・技能の習得、知識・技能を活用し課題解決を図るための思考力・判断力・表現力などの読解力の育成、学習意欲の向上や学習習慣の確立などが強く求められています。

本校では、これまで、基礎学力の定着と向上、学力の二極化、三極化傾向などへの対応は、学習指導でつねに大きな課題となってきました。加えて、家庭学習の習慣化や忘れ物や宿題忘れなど授業への準備習慣の低下、基本的な生活習慣や家庭学習習慣が十分身に付いていない生徒の増加など、学習意欲や基礎学力向上の土台となる生活習慣づくりも本校が抱える大きな課題でもあります。個に応じた確かな学びを保障し、学習意欲を高める工夫を通して、基礎学力の定着と向上を図るとともに、家庭での学習習慣など学業指導を充実させることは、新学習指導要領のねらいと合致するものであり、本校が学校選択制度のもとで、選ばれる学校としての学校体制を維持していくために、解決が急がれる喫緊の大きな課題と言えます。これらの諸課題解決のため、本校では、中央区教育委員会の研究奨励校（20・21年度）、文部科学省学力向上実践推進校（20～22年度）の研究指定を受け、「**基礎基本の確かな定着と向上を目指した指導方法の改善**」を研究主題に掲げ、主として読解力・思考力・判断力・表現力の育成と評価の工夫、学業指導の充実について研究と実践を進めてきました。昨年度、中央区研究奨励校としての2年間の研究実践のまとめを本発表し、3年間の文部科学省学力向上推進校の研究実践を中間発表という形で発表させていただきました。

中間発表では、3つの分科会の研究実践を発表しました。第1分科会では、個に応じた指導方法の改善と工夫について、第2分科会では、学習意欲の向上と評価について、第3分科会では「生活と学習のサプノート」の活用について発表し、多くの皆様から過分な評価をいただきましたが、各教科における読解力・思考力・判断力・表現力の視点、取り組みがいま一つ不鮮明であるという指摘もありました。中間発表以後、各教科では、指摘されたことについて再検討し、読解力・思考力・判断力・表現力育成への取り組みを、より鮮明に、より見える形にすることを目標に実践研究を重ねてきました。ここに、中間発表以後の研究実践を、研究紀要追録としてまとめ、ご報告いたします。3年間の研究で、成果が見られた研究実践もありましたが、各教科の読解力等の育成の課題、学習意欲を高めるための評価の課題、生活習慣づくりの課題などがより浮き彫りとなり、研究発表にあたり、多くの課題を残しています。今後さらに、新教育課程の完全実施に向けて、課題解決に取り組んでまいります。

終わりにになりましたが、ご講演をいただきました、文部科学省国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部 部長 葉養 正明先生、3年間、本研究の講師として、的確なご指導をいただきました東京大学名誉教授（元教育学部長）・帝京大学教授（教育学科長）浦野 東洋一先生、東京農業大学教授 緑川 哲夫先生、相模女子大学教授 佐藤 道幸先生、帝京大学教職大学院准教授 石橋 昭先生には、心より感謝し御礼申し上げます。とりわけ、本研究を支え、特段のご支援、ご協力をいただいた中央区教育委員会 高橋 春雄教育長様を始め指導室長和田 利次様、担当統括指導主事佐藤 太様をはじめ各指導主事の皆様、そして、保護者、地域の皆様に厚く御礼を申し上げます。

## 目 次

あいさつ	中央区教育委員会教育長	高橋 春雄
はじめに	中央区立日本橋中学校長	田部井重雄
I 研究の推進について		
1	学校の概要	1
2	研究課題	1
3	平成22年度の重点課題	1
4	研究の具体的内容	2
5	研究等の把握と検証の手立て	3
6	本区（中央区）教育振興基本計画との関連	4
7	研究の経過	5
II 研究の内容		
第1分科会 （個に応じた授業改善と評価の充実）		
	・第1分科会報告	8
	・実践報告	
	・国語科	11
	・数学科	20
	・英語科	24
	・社会科	33
	・理科	38
	・音楽科	44
	・美術科	48
	・保健体育科	53
	・技術・家庭科	64
第2分科会 （学習意欲を引き出す評価の工夫）		
	・第2分科会報告	69
第3分科会 （学業指導の充実）		
	・第3分科会報告	71
III 研究のまとめ		
1	研究の成果	92
2	今後の取り組み	93
研究に携わった教職員		95
ご指導いただいた講師の先生、おわりに		96

# I 研究の推進について



# I 研究の推進について

## 1 学校の概要

(平成22年5月1日現在)

学年	1年	2年	3年	特別支援学級	計	教員数
学級数	4	3	3	0	10	21
生徒数	148	110	109	0	367	
ホームページ	<a href="http://www.chuo-tky.ed.jp/~nihonbasi-jh/">http://www.chuo-tky.ed.jp/~nihonbasi-jh/</a>					

## 2 研究課題

平成19～21年度にかけて、学力向上を目指し、基礎基本の徹底を図るための指導方法の改善と指導計画の見直し、より客観的な到達度評価のあり方について研修を深め、基礎及び標準・発展コースの2つの指導計画を作成し、実践を深めてきた。

これまでの研究実践の成果を生かし、基礎基本の確かな定着と向上を目指した指導方法について継続して研究を進める。また、学習意欲を高めるための評価の工夫や学業指導の充実を図るために、次のように研究主題を設定し、実践的研究を行う。

研究主題

**基礎基本の確かな定着と向上を目指した指導方法の改善**

－読解力・思考力・判断力・表現力の育成と評価の工夫、学業指導の充実を通して－

## 3 平成22年度の重点課題

### (1) 年間指導計画の工夫・改善

全教科で形式を統一して作成している年間指導計画について、平成21年度までの研究実績を踏まえ、年間指導計画の完成を目指してさらなる工夫・改善を図る。

### (2) 検証授業、研究授業の継続実践、データの分析

読解力、思考力、判断力、表現力の育成を図るため、これらの力を意図的に学習指導案に反映し、検証授業、研究授業を継続して実践する。また、研究全体を通して進めている学力向上の取り組みを検証するために、区の学習力サポートテストの経年比較や学校評価の結果などの分析を行う。

### (3) 評価方法の工夫

スパンごとに行っている評価の内容や通知方法について、一層の工夫・改善を図る。

### (4) 教育相談の改善・充実

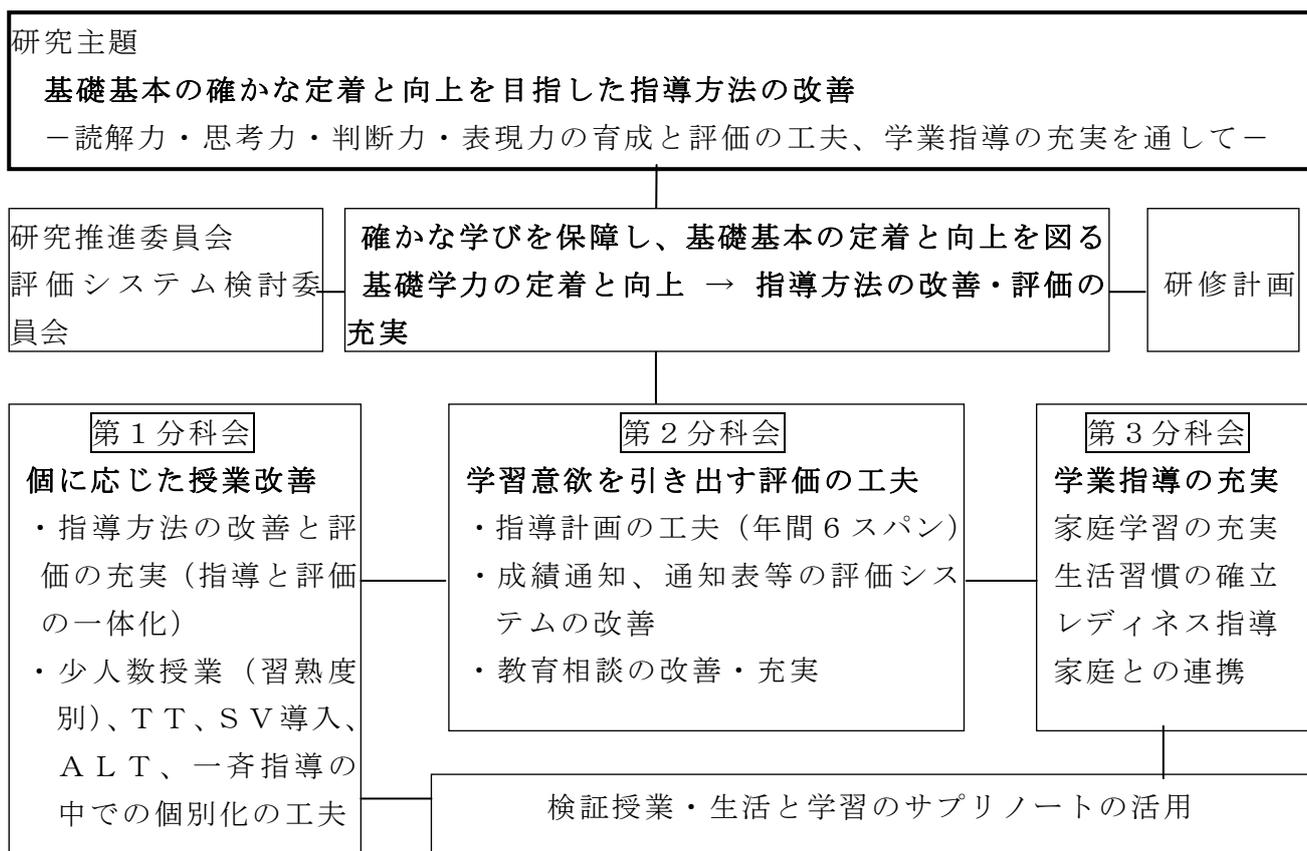
生徒の学力向上、学習意欲の向上を目指すための教育相談について、時期や方法、内容について一層の改善・充実を図る。

### (5) 「生活と学習のサプリノート」の改善・充実

「生活と学習のサプリノート」のさらなる利活用、効果の増大を期して、内容や形状の一層の改善・充実を図る。

## 4 研究の具体的内容

### (1) 研究組織



### (2) 各分科会の取組内容

#### ①第1分科会

- ア 個に応じた授業改善→少人数授業・習熟度別授業の研究実践（国・社・数・英）
- イ 一斉指導の中での、個に応じた指導方法の研究実践（加配措置のない教科）
- ウ P D C Aサイクルを踏まえた、年間6スパンの指導計画の作成（基礎コース、標準・発展コース）→指導計画の完成を目指す
- エ T T、A L T、S V（スクールボランティア）導入での指導方法の研究実践（英・導入教科）
- オ 教材、教具の工夫→情報機器（電子黒板等）の活用やワークシート、テスト問題の工夫など
- カ 指導技術・授業力の向上

#### ②第2分科会

- ア 年間6スパンの指導計画の検討と計画表の提示
- イ 市販ソフトを活用した成績処理、成績通知、通知表等の評価システムの工夫と改善

- ウ ポートフォリオ形式による通知表の改善と活用
- エ インフォームドコンセントの考え方に基づく評価情報提供の工夫（学年・学級担任）
- オ 学習相談の充実、「学習相談カルテ」の活用及びその有効性についての分析・検証

③第3分科会

- ア 「生活と学習のサブノート」の改善・充実
- イ 生徒・保護者の変容とメリット、デメリットの分析

《分科会ごとの研究の年度ごとの指標》

	第1分科会	第2分科会	第3分科会
	上村・各教科主任	田中・評価システム検討委員会	平沢・学年主任・担任
20年度	指導計画の作成 検証授業 生徒の変容の分析 メリット、デメリットの分析	指導計画の見直し 成績通知、通知表等の見直しとメリット、デメリットの検証 ポートフォリオの検証 コンピュータ利用の分析	課題克服のためのサブノートの活用実践 生徒、保護者の変容 家庭学習時間、授業の準備、生徒理解、生活習慣など道徳・各教科との関連付け
21年度	指導計画の完成・見直し 検証授業 生徒の変容とメリット、デメリットの分析 研究のまとめと考察 今後の課題 研究発表	成績処理、成績通知、通知表等評価システムの開発 メリット、デメリットの分析 研究のまとめと考察 今後の課題 研究発表	サブノートの活用実践 生徒・保護者の変容とメリット、デメリットの分析 研究のまとめと考察 今後の課題 研究発表
22年度	指導計画の完成 検証授業 全国学力学習状況調査経年比較 区学習力サポートテスト経年比較	成績処理、成績通知、通知表等評価システムのメリット、デメリットの分析 研究のまとめと考察 全国学力学習状況調査経年比較 区学習力サポートテスト経年比較	サブノートの活用実践 生徒・保護者の変容とメリット、デメリットの分析 研究のまとめと考察 全国学力学習状況調査経年比較 区学習力サポートテスト経年比較

5 成果等の把握と検証の手だて

研究の成果や課題の把握及び検証の手だてを行うために、以下のデータを分析する。

- ・学力向上を図るための調査
- ・学習力サポートテスト
- ・学校評価（生徒・保護者アンケート、学校関係者評価）

## 6 本区（中央区）教育振興基本計画との関連

平成22年3月に策定された「中央区教育振興基本計画～子どもが輝く“教育のまち中央区”に向けて（中央区教育委員会）」と本校の研究との関連は下表のとおりである。

中央区教育振興基本計画	本校の実践との関連
<p>視点1 「生きる力」を中心とした質の高い教育の展開</p> <p>1 確かな学力の向上</p> <p>*学習力サポートテストの結果をもとに理解度に応じた段階的な区独自の自主学習支援テキストを作成し、基礎基本の学習内容と学習習慣の定着を図ります。</p>	<p>区学習力サポートテストの結果を経年比較し、学力向上の検証の材料としている。</p>
<p>*中学校における少人数指導において配置している非常勤講師を、国語・数学・英語のほか各校の実情に応じ社会・理科にも拡充します。</p>	<p>平成22年度から、社会科において区非常勤講師を採用し、少人数指導の充実を図っている。</p>
<p>*土曜日を活用した学校公開を推進し、子どもたちの学習状況を公開するとともに、新学習指導要領に対応した授業時間数の確保と学力の定着を図ります。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成22年度、年2回の土曜学校公開日を実施。</li> <li>・平成18年度から、週29時間の時間割を設定し、授業時数の確保に努めている。</li> </ul>
<p>*子どもたちの知的好奇心を喚起する授業を展開するため、フロンティアスクールでの研究成果に基づき、ICT環境の整備を行います。</p>	<p>電子黒板、大型テレビなど情報機器の活用を図り、教材や指導方法の工夫を図っている。</p>
<p>3 健康な体をつくる教育の充実</p> <p>*新学習指導要領に対応した「武道・ダンス」や運動種目ごとの専門技術等をもつ種目別サポーターを配置し、中学校の体育指導を充実します</p>	<p>平成21年度から東京都のスポーツ教育推進校の指定を受け、講師の加配、外部指導員の増員を図り、保健体育の授業、運動部活動の充実を図っている。</p>
<p>視点2 「学校力」の強化と教育環境の充実による魅力ある学校づくり</p> <p>1 教員の資質と能力の向上</p> <p>*優れた指導力をもつ教員を「メンターティーチャー」として育成・認定し、若手教員等に対して学校を超えて指導助言の役割を果たす本区独自の教員の指導力向上システムを構築します。</p>	<p>平成21年度から、校内のOJT体制を構築し、主幹教諭・主任教諭（メンター）に担当教諭（メンティー）を充て、自己申告における目標の設定、進捗状況、成果と課題の分析や授業観察において、指導・助言する機会を設けている。</p>
<p>2 子どもと保護者に期待される学校づくり</p> <p>*先輩である現役高校生の受験体験談や高校生活の楽しさなどを報告してもらい、受験不安の軽減や自らの進路目標に向かって努力する契機となる場を設けます。</p>	<p>毎年、3年生を対象に卒業生の現役高校生を招き、受験体験や高校生活の様子を報告させ、進路目標への意欲の喚起を図っている。</p>

## 7 研究の経過

平成20年度

月	日	研修会等	おもな内容
4	28	校内研修会(1)	学びの質の高める学習規律づくり
5	14	校内研究会(2)	校内研究グランドデザイン・分科会構築
6	16	校内研修会(3)	各教科年間指導計画作成について
	21	検証授業(道徳)	(道徳授業地区公開講座) 講師 中央区教育委員会指導主事 宮崎 宏明 先生
7	7	校内研修会(4)	分科会①(研究計画 研究紀要作成構想)
8	28	校内研修会(5)	研究の進め方・分科会報告
			講師 相模女子大学教授 佐藤 道幸 先生 中央区教育委員会指導主事 宮崎 宏明 先生
9	19	校内研修会(6)	全体会(分科会のもち方について)
			分科会②(第1分科会 検証授業について)
10	15	校内研修会(7)	検証授業(数学、社会)
			講師 東京農業大学教職課程教授 緑川 哲夫 先生 帝京大学教授 浦野 東洋一 先生
11	17	校内研修会(8)	分科会③(分科会の成果とまとめ)
12	17	校内研修会(9)	学力向上の取り組みと生活習慣・学習習慣について
			講師 帝京大学教授 浦野 東洋一 先生 昭和女子大学講師 石橋 昭 先生 (保護者も参加)
1	14	校内研修会(10)	成果と課題、まとめ
2	18	校内研修会(11)	家庭学習の充実やレディネス指導
			(生活と学習のサブノートを活用) 講師 東京農業大学教職課程教授 緑川 哲夫 先生
3	2	校内研修会(12)	次年度の構想・研究紀要完成
	9	先進校視察	岩手県矢巾町立矢巾北中学校

### 【平成20年度の研究の推進の概要】

2年間の区の研究指定を受けるとともに、本研究の内容が、学力向上に重点を置いていることもあり、3年間の文部科学省の学力向上実践推進事業研究推進校の指定も併せて受けることとなった。

平成20年度は、おもに研究内容全体及び分科会での研究内容について全教員が理解を深めていくことを目標に取り組んだ。研究を推進するに当たり、研究全体を見通した指導・助言、分科会ごとの内容にかかわる指導・助言をいただける講師をそれぞれ依頼した。講師の先生方には、研修会のたびに講話並びに指導・助言をいただき、全体及び各分科会の研究内容を深めていくことができた。また、校内研修会とは別に、年間指導計画の作成や各教科における読解力・思考力・判断力・表現力は何かなどをまとめ、研究を深めていった。

後期からは、習熟度別編制の数学と、単純2分割編制の社会の少人数指導の教科で検証授業を実施した。この実践は、他の教科における指導方法の研究にもつながっていった。

平成21年度

月	日	研修会等	おもな内容
4	9	校内研修会(1)	校内研究グランドデザイン確認
5	11	校内研究会(2)	教育計画の見直しと検討、検証授業日程と担当決定
6	17	校内研修会(3)	研究のまとめ方等 講師 帝京大学教授 浦野 東洋一 先生 帝京大学准教授 石橋 昭 先生
7	15	校内研修会(4)	全体会（教育計画確認） 分科会（研究紀要分担確認）
8	19	先進校視察	山梨県西八代郡市川三郷町立三珠中学校
	31	校内研修会(5)	学習力サポートテスト分析 講師 中央区教育委員会統括指導主事 佐藤 太 先生
9	15	校内研修会(6)	検証授業（理科） 講師 中央区教育委員会統括指導主事 佐藤 太 先生 中央区教育委員会指導主事 長町 正弘 先生
10	5	校内研修会(7)	検証授業（国語） 講師 目黒区立田道小学校副校長 熊谷 恵子 先生 中央区教育委員会統括指導主事 佐藤 太 先生
	20	校内研修会(8)	全体会（研究の経過、今後の予定） 講師 相模女子大学教授 佐藤 道幸 先生 中央区教育委員会統括指導主事 佐藤 太 先生
11	18	校内研修会(9)	検証授業（英語、保健体育） 講師 中央区教育委員会統括指導主事 佐藤 太 先生 教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課指導主事 山村 智治 先生
12	16	校内研修会(10)	分科会（原稿まとめ）
1	15	校内研修会(11)	研究発表会準備
2	5	研究発表会	公開授業・検証授業（全教科） 講師 帝京大学教授 浦野 東洋一 先生 相模女子大学教授 佐藤 道幸 先生 帝京大学准教授 石橋 昭 先生 中央区教育委員会指導室長 和田 利次 先生
	17	校内研修会(12)	今年度のまとめ、次年度の構想

【平成21年度の研究の推進の概要】

平成21年度は、全教職員が研究内容について共通理解を一層深め、授業実践することを目標とした。教職員の異動が多く、年度当初は研究内容の再確認を図るとともに、前年度における課題を踏まえた研究の推進に努めた。検証授業は、理科、国語、保健体育で実施した。また、第2分科会の評価方法の工夫における通知表の工夫・改善や、学習面談の充実、第3分科会のサブリノートの活用などについても研究を深め、分析を行った。

平成22年2月5日（金）、中央区研究奨励校最終報告、文部科学省学力向上実践研究推進事業中間報告としての研究発表会を開催したところ、全国各地から400名を超える教員等が来校し、公開授業を参観し、研究発表会に参加した。また、発表会当日以外にも、21年度には20校を超える学校訪問があり、研究内容の聞き取りを受けた。

参加した教員からは、「サブリノートの実践は本校でも取り組んでみたい」、「学習相談やスパンごとの学習計画等、帰校して参考にしたい」等の感想や講評を受けた。

平成22年度（10月15日まで）

月	日	研修会等	おもな内容
4	21	校内研修会(1)	校内研究基本構想の確認
5	11	校内研究会(2)	教育計画の見直しと検証授業日程等の決定
6	4	研究推進委員会	前年度の研究の成果と課題、今年度の研究の方向性について 講師 帝京大学教授 浦野 東洋一 先生 相模女子大学教授 佐藤 道幸 先生
	17	校内研修会(3)	検証授業（社会） 講師 中央区教育委員会指導室長 和田 利次 先生 中央区教育委員会統括指導主事 佐藤 太 先生 中央区教育委員会統括指導主事 山崎 隆 先生 中央区教育委員会指導主事 長町 正弘 先生 中央区教育委員会指導主事 滝上 俊恵 先生
7	14	校内研修会(4)	検証授業（国語） 講師 新宿区立四谷中学校長 吉田 和夫 先生 帝京大学教授 浦野 東洋一 先生 相模女子大学教授 佐藤 道幸 先生 帝京大学准教授 石橋 昭 先生
7	21	校内研修会(5)	区学習力サポートテストの結果の考証
8	31	校内研修会(6)	全体会（研究発表会に向けての確認事項）
9	15	校内研修会(7)	検証授業（国語・理科） 講師 帝京大学教授 浦野 東洋一 先生 帝京大学准教授 石橋 昭 先生 中央区教育委員会統括指導主事 佐藤 太 先生
10	15	研究発表会	研究授業（全教科） 講師 文部科学省国立教育政策研究所教育政策・評価研究部 部長 葉養 正明 先生 帝京大学教授 浦野 東洋一 先生

## Ⅱ 研究の内容



# 第1分科会報告

～個に応じた授業改善と評価の工夫～



## Ⅱ 研究の内容

### 第1分科会報告

#### 1 第1分科会の研究経過

研究の実質的なスタートは平成19年度からであった。同様の研究主題を掲げ、研究の趣旨や研究方法、研究の進め方について全教員の共通理解を図るための研修を行った。研究開始に向けての準備期間として年間6スパンの指導計画を各教科で検討し、1スパンではあるが指導計画試案を作成した。そしてそのスパン内で各自が検証授業を試みた。また多様な授業形態の中での個に応じた指導方法の工夫とはどのようなものなのかを、研修会や研究授業を通して研修した。

平成20年度から本格的に研究が始まり、PISA調査で明らかになった現在の子どもの問題点、課題について理解を深め、言語活動の重要性や読解力の解釈についても研修を重ねた。これらを受け、新学習指導要領の改訂点も見据え、各教科の研究主題を設定した上で検証授業を行ってきた。

平成21年度は2月5日に研究発表会を開催し、これまでの取り組みを発表する場として、全教科で研究授業を行い、全体会で研究の成果と課題について発表した。

今年度は研究3年目のまとめの年として継続して、各教科での授業改善に取り組んでいる。

第1分科会の取り組み内容は紀要の4(2)を担当するものである。分科会の構成は各教科主任であるが、研究方法の内容から実質的には、全教員がかかわってくるものである。年間指導計画は6スパンで区切り、基礎コースと標準・発展コースの2種類を作成した。さらに研究主題である、読解力、思考力、判断力、表現力の育成と各スパンでの指導単元との関連を明確に位置付けた。研究授業はもとより、普段の公開授業や授業観察などで略式指導案を作成する際も研究主題との関連を位置付けるなど、日常の授業の中で各自が絶えず研究主題を意識するようにした。

#### 2 第1分科会の取り組み内容

##### (1) 個に応じた授業改善→少人数授業・習熟度別授業の研究実践(国、数、英、社)

国語、社会、数学、英語では少人数授業を実施している。クラスの人数を単純に2分割し、国語では単元別(文法と物語文、書写と古典など)に、1, 2年の社会科では地理と歴史に分け授業を行った。英語科、数学科では習熟度別授業を行った。各スパンの区切りでクラス編制を組み替えたり、内容によっては一斉授業、TT授業も取り入れたりしながら実践した。

##### (2) 一斉授業の中での、個に応じた指導方法の研究実践(加配措置のない教科)

理科、音楽、美術、保健体育、技術家庭科では一斉授業の中でどのように基礎コースと標準発展コース向けの指導を展開するかということに取り組んだ。本校のークラスの生徒数は37人前後である。実技教科は本来、個に応じた指導が主であるが、基礎と標準・発展という大きな2つの分類で生徒をとらえ、それぞれのグループに見合った達成目標、評価基準を設定するなどして授業に臨んだ。

##### (3) PDCAサイクルを踏まえた、年間6スパンの指導計画の作成

年間を6スパンに区切ることで順調に指導計画が軌道に乗るようにした。

- ・P (PLAN計画) 年間指導計画を立てる。
- ・D (DO 実行) 指導計画をもとに指導を実行する。
- ・C (CHECK 状況の把握) スパンの区切りの中間・期末・学年末テスト等の結果から

状況を分析する。

・A (ACTION 調整・改善)生徒、保護者との教育相談や指導計画の修正を行う。

実技教科などでは必ずしもこのサイクル、6スパンに当てはまらない状況があるため、大きな目安としてとらえ、教材や単元の工夫を行った。

(4) ALT、SV、TT導入での指導方法の研究実践（英語科導入、社会科は20年度までTTを実践）

(5) 情報機器の活用や電子黒板の活用、ワークシートなどの教材教具の工夫、テスト問題の工夫など

中央区では各校に1台、電子黒板が配置されている。使い方に関する研修は全教員が区の情報研修などで受講している。理科では、積極的に電子黒板を活用した授業を行い、理科部会での研究授業も行った。また生徒各自がインターネットなどを利用し調べ学習を行い、パワーポイントで編集し発表するなどの授業実践も行った。国語科では言語活動の際に、視聴覚機器を利用し、記録を撮ることで効果的な指導に役立てている。他教科でも基礎基本の定着を図り、適正な評価を行うためにワークシートなどの教材、教具の工夫を行った。また、研究主題の通り、表現力・判断力・読解力・思考力の育成を目指した指導の結果が適正に評価に反映されるように、各教科の観点別評価項目との関連を明確にし、テスト問題の設問に生かされるように工夫した。

(6) 指導技術・授業力の向上

研究授業を通して他教科における研究主題への取り組みを互いに理解した。さまざまな形態や内容の授業をお互いに観察することで生徒の状況を多角的に観察し、自己の授業の参考とし指導の工夫、向上に役立てた。

### 3 第1分科会のまとめ

(1) 各教科より挙げられた取り組みのメリット

- ① 意欲を高める言語活動の授業を工夫することで生徒の基礎・基本となる学力は向上した。
- ② 教科の教員同志が互いに指導形態や指導方法、教材やワークシートなどに関して、意見交換を活発に行うようになった。
- ③ 生徒が意欲的に学習に取り組む工夫をしていくことで研究主題に近づくことができる。
- ④ 新たな教材開発や教育機器の活用を活発に行うようになった。
- ⑤ 指導者の適切な評価こそ生徒の判断力や表現力を高めるために重要であることが分かった。
- ⑥ 少人数授業の良さは生徒の言語活動の場が飛躍的に増えることが分かった。

(2) 各教科より挙げられた取り組みのデメリット

- ① 習熟度別少人数授業は、要因によっては、基礎クラスの生徒の学習意欲が上がらない。
- ② まだ言語活動の不十分さが感じられる。
- ③ 指導者の評価のバランスに慎重さが求められる。

(3) まとめ

3年間の研究期間が過ぎ、生徒の変容はどうであるかといった場合、著しく急激に学力の向上が見られたわけではない。毎年入学してくる生徒の状況も、それぞれの年度によりさまざまな特徴がある。昨年度良い成果をあげた指導計画、指導方法を次の学年で試みても同様の成果が得られなかった場合もある。しかし、教員自らが落ち着いた学習環境の創出や授業改善への地

道な努力を継続していくことは、意欲的に学習に取り組む姿として生徒や保護者、地域からの信頼を得ている。そのことが、各種の学力調査でも安定した結果を示しつつある。

各教科から出されているメリット、デメリットを総合してみても、この3年間研究主題を追究することで、それぞれの場面、場面においては生徒の表現力・思考力・判断力・読解力はよく育ち、発揮されたと感じている教員がほとんどである。また基礎、基本の定着についても授業形態の特徴を生かした指導方法、綿密な指導計画、適切な評価とその改善への手だてを、じっくりと時間をかけて実行すれば確実に学力は向上すると誰もが感じ取ることができた。また、どの教科からも教科内での教員相互の連携が密になったことや、各個人の指導法が上達したという声が挙がっている。新学習指導要領の改訂点に関してもよく研修し理解することができた。

今後とも、この3年間で行ってきたことを引き続き積み重ねていくことが最も大切な課題である。

### 1 国語科の研究主題 ～読解力・論理的思考力・判断力・表現力の育成を図る指導法の工夫～

国語科では昨年度に引き続き、論理的に思考し適切に表現する上で国語力は必要であると考え、「話す・聞く・読む・書く」力を関連させ、論理的思考力の向上を目指してきた。国語力の中でも「聞いて、論理的に考えて、話すこと」、「論理的な文章を、考えて書くこと」、「読んで考えること」を重要と考え、以上の3点を具現化できるように指導法の工夫を図っている。特に読解力ではPISA型読解力を重視し、文章だけでなく資料や、紙上ツイッターを読み取ったり、言語活動（表現）を通して読みを深めたりする。

### 2 研究の概要

平成24年度から完全実施される新学習指導要領では、国語以外の教科の中にも「言語活動」を取り入れることが示されているが、それは生徒がよりよい未来を指向し、生き方を考え、社会に進出していく上で、「論理的に話す・聞く」が重要視されているということである。国語科では、新学習指導要領との関連を明確にし、大単元末に表現活動を入れるなど、生徒の意欲を絶やさずに確かな国語力を身に付けさせ、社会で活躍できる人材を育成したいと考えている。また、今年度は国語と英語で教科横断的な授業を試み、さらに言語活動による学力向上を目指す。

### 3 昨年度の取り組みからの成果と課題

本校の生徒の学力に関する課題として、学力低下や学習習慣不足があげられる。しかし、昨年度に引き続き「少人数指導の徹底」と「学力検証と見直し・補習」など各学年で不足している項目に力を入れたところ、本区実施の学習力サポートテストでは、識字力・古典の読解力・説明的文章の読解力の向上がみられた。学習意欲の高い生徒も多く、教育熱心な家庭もあるので、家庭学習習慣を定着させることはもちろんのこと、しっかりとした学習計画を立て意欲を高める授業を工夫することで学力はさらに向上すると考える。

### 4 22年度の取り組み

- (1) 新学習指導要領との関連を明確にし、大単元末に表現活動を入れるなど、P.12のような国語基本学習計画を立案した。また、表現活動の指導の工夫として、生徒の意欲を絶やさずに確かな国語力を身につけさせるために、スキット・ディベート・ロールプレイ・インタビュー・パネルディスカッション・視聴覚機器を活用したプレゼンテーションなど多様なスキルを用いた。そのために2000字～2000字の課題作文を、論理的に考えて書く練習を1年次から計画的に行い、発表原稿として400字が1分程度と体得させておく。
- (2) 国語科の取り組みの中で、「放課後の補習」と、「朝学習の時間を活用した漢字コンテストの取り組み」がある。識字力や語い力を高めるために、学期に1回計画的に漢字コンテストを全学年で実施する予定を立てた。範囲の学習は朝学習や家庭学習を中心にし、基礎学力の定着を図った。優秀者・優秀クラスは表彰し意欲を高め、80点に達しない生徒は合格するまで追試や補習を行った。また、担任・学年の教員も一丸となってプリント提出や、予想問題作りを精励した。それによって、全学年の識字力は向上し、学力調査や漢字検定の得点力に直結した。
- (3) 授業は教科書遵守で学習計画通り実施するが、以下のようなシラバスを作成し、単元末に、スキット・スピーチ・インタビュー・ロールプレイ・プレゼンテーション・ディベートなどの言語活動を重視して行った。

## 国語学習計画基本プラン（自作）

～新学習指導要領及び勤務校での採択検定教科書にそって作成～

	学習内容・学習活動	項目	学習目標・指導上の留意点	観点
一学期	<p>○中学校国語の学習内容を理解し国語を尊重する。</p> <p>○200字課題作文を書く。(テーマ作文等)</p> <p>○美しく優れた作品(小説・短歌・俳句・詩などの文学作品)などの韻文や枕草子等の随筆を読み味わい論理的に考える国語にアプローチし、ワークシートに取り組む。</p> <p>○短歌・俳句・詩などの韻文やアンソロジーを創作し、発表会を行う。また、作品を文芸コンクールへ出品する。</p>	<p>導入</p> <p>課題作文</p>	<p>○国語を通して論理的思考力の育成を図り、ものの方や考えを広げ、表現力を高める。</p> <p>○200字課題作文を通して、伝えたい事実や事柄を、筋道立てて分かりやすく文章にする。原稿用紙の使い方・キーワード・三段論法・文の構成に留意する。</p> <p>○言葉の具体性・抽象性を的確に把握し、表現を工夫して書く。</p> <p>○短歌、俳句、詩などの韻文や枕草子などの随筆について、表現の仕方や文章の特徴に注意して読みを深める。またCD視聴や、暗唱、視写により作品を味わう。</p> <p>○言葉のもつイメージを自覚し、イメージが論理の形成にかかわることを理解する。</p> <p>○先人の優れた表現を学ぶとともに、創作短歌・俳句に取り組み、校内発表会で自分の表現に役立てる。</p>	<p>関心</p> <p>書く</p> <p>読む</p> <p>書く</p> <p>話す</p> <p>時数 12</p>
二学期	<p>○美しく優れた作品を読み味わうと同時に、広い範囲から題材を探し、資料を集めて、600字のスピーチ・ディベート原稿を書く。</p> <p>○ディベートの構成を学び、400～600字の原稿をもとにグループでディベートを行う。(テーマ別グループ活動)</p>	読解 論述	<p>○美しい文学作品を深く読み味わい、優れた評論文の論理の展開の仕方を的確にとらえ、内容の理解や自分の表現に役立てる。</p> <p>○語句の意味を把握して的確に内容をつかみ、文章の形態に応じて適切な構成を工夫する。</p> <p>○自分の立場及び伝えたい事実や事柄を明確にする。</p> <p>○相手の立場や考えを尊重し、話し合いが目的に沿って効果的に展開するように話したり聞き分けたりして、自分の考えを深める。</p> <p>○話の内容や意図に応じた適切な語句の選択、文の効果的な使い方等説得力のある表現の仕方に注意して、話したり聞き取ったりする。</p>	<p>読む</p> <p>書く</p> <p>言語</p> <p>書く</p> <p>話す</p> <p>聞く</p> <p>時数 14</p>
三学期	<p>○各自で文学作品や作家の中からテーマを設定し、有効な情報を広い範囲から収集して2000字論文を作成する。</p>	情報 論述	<p>○意見の中心をはっきりさせ、有効で適切な情報を新聞・雑誌・コンピュータや情報通信ネットワークなどの様々な情報手段を通して広い範囲から収集し、積極的に活用する。視聴覚機器を活用し、プレゼンテーション画面を作成する。</p>	<p>関心</p> <p>書く</p>

○作成した 2000 字論文をもとにスピーチ及びプレゼンテーションを行う。(テーマ別グループ活動)	発表	○自分の意見が相手に効果的に伝わるように、根拠を明らかにし、論理の展開を工夫して書く。 ○話の中心と付加的な部分、事実と意見との関係に注目し話の論理的な構成や展開を考えてスピーチ及びプレゼンテーションを行い、相互に評価する。	話す 聞く 時数 9
配 当 時 間 合 計 (35または70または105または140時間)			
【評価】ワークシート・作文・作品・発表・ディベート・スピーチ・プレゼンテーション他			

## 5 具体的な実践例 1

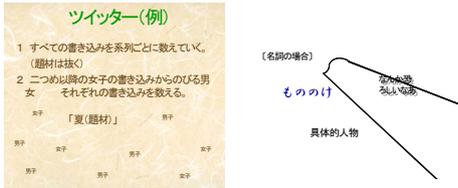
### (1) 新学習指導要領と関連した新しい学習指導案と言語活動例

#### 国語科学習指導案

日時 平成22年7月14日5校時  
 実施学級 中央区立日本橋中学校2年2組  
 授業者 主幹教諭 渡辺 雅美

教科等名	国語2 (光村図書出版)
単元名	4 古典に親しむ 『枕草子 (清少納言)』 (読む・言語事項) ～現代人のつぶやきと比較し、提案の仕方を工夫しよう～ (話す・聞く) <b>読解力・思考力・判断力・表現力を高める学業指導の充実 (本校の研究テーマ)</b>
単元設定の理由	<u>伝統的な言語文化である古典を味わい、国語の特質を考える</u> 上で、『枕草子』(清少納言)はふさわしい。平安時代の女性がとらえる季節や現象・心情を古典の韻律とともに味わい、現代人の季節感や心情と比較する。 比較の手段として、枕草子のテーマについて紙上ツイッターを行い、① <u>ツイッターの結果をもとにアンソロジー作成・発表 (本時)</u> 、② <u>仮説検証・プレゼンテーションを試みる</u> 。ツイッター内容流失などの弊害を避け、ネット上ではなく紙上で行う。 検証した仮説については、情報機器 (プレゼンテーション作製ソフト) を用いるなど、 <u>2種類の提案の仕方を工夫しながら発表したり、聞いたりすることで、生徒自身の考えを広げたい。</u>
単元の目標	1. 昔の人のものの見方や考え方に触れ、古典に親しむ態度を養う。(関心・意欲) 2. 紙上ツイッターを通して、現代人が感じる四季それぞれの趣と昔の人の感じ方を比較し・発表し (本時)、②仮説検証する。(資料を読む・構成して書く・・・思考・判断) 3. 論理的に検証し考察したことを、伝わりやすくプレゼンテーションし考え方を広げる。 ( (話す・聞く・・・表現)

○指導計画

	ねらい	学習活動	評価	その他の留意点
第1時	①②昔の人が考える四季の風情「春夏秋冬」と現代人のとらえ方を比較・考察する。	①『枕草子』を読み、春夏秋冬への感じ方・考え方を知る。 ②各テーマ別に紙面上でツイッターを行う。(画用紙に1テーマ3分で、紙上ツイッターを行う。必ず全てのテーマに対してツイッターを行う。)	①古典の三大随筆に関心を持ち、古人の考え方を探求する。 ②意欲的に紙上ツイッターに取り組み、春夏秋冬について古人と現代人との考え方を比較する。	①古人の視点がどこにあったか考えさせる。
				
第2時 本時	①前時の復習 ②紙上ツイッターを通して、現代人が感じる四季それぞれの趣と昔の人の感じ方を比較し発表する。	①前時までの復習をし、意識を高める。 ②紙上ツイッターを読み取り、現代人が感じる四季それぞれの趣と昔の人の感じ方を比較する。 ③100字のアンソロジーを書き、数名発表する。(本時)	①資料を参考に適切に引用する。 ②構成を工夫して発表原稿を作る。	①ネット上ではなく、紙面上で行う意義を説明する。
第3時	①仮説を立てる手順を学び、資料を読み解く。	①完成したツイッターから仮説を立て検証方法を明らかにし丹念に検証する。 ②検証結果と考察をまとめる参考文献を引用してもよい。	①資料を分析し適切に引用する。 ②構成を工夫し発表原稿を作る。	
第4時	①スライドを作成し、プレゼンテーションの準備を行う。  例 	①プレゼンテーション画面作りのモデリング(過去の生徒作品提示)。 ②作り方は1年次(指導済み) ③プレゼンテーション画面作りを行う。タイトル及びテーマを1番目とし、考察またはEND画面をラストとして4～6画面で作成する。アニメーションや背景を工夫する。	①モデリングを参考に作品作りをする。 ②テンプレートやアニメーションを工夫する。(意欲)	①パワーポイントを作成させる。 ②助け合いの指示をする。 ③ループリク評価を明示し、次時の発表に備える。
第5時	①スライドを作成し、視聴覚機器を用いて伝わりやすくプレゼンテーションする。	①画面を示しながら、工夫して発表を行う。フロアは評価カードで評価。	①工夫して意見を提案し、友人の発表を聞き自分の考えを広げる。	

## 単元の評価規準

1. 昔の人のものの見方や考え方に触れ、古典に親しむ。(関心・意欲)
2. 紙上ツイッターを読み取り、現代人が感じる四季それぞれの趣と昔の人の感じ方を比較し、100字のアンソロジーを書き発表できる。(本時) また、資料を読み解き、仮説検証に意欲的に取り組み、発表原稿を書く。(資料を読み解く・構成して書く・・・思考・判断)
3. 論理的に検証し、考察したことを伝わりやすくプレゼンテーションを行ったり聞いたりして自分の考えを広げる。(話す・聞く・・・表現)

## 研究協議会 (平成 22 年 7 月 14 日)

指導・助言講師 新宿区立四谷中学校長吉田和夫先生・帝京大学准教授石橋昭先生  
相模女子大学佐藤道幸先生・帝京大学浦野東洋一先生

- ・ストップウォッチを使用した活動時間の管理。(タイマーの使用同2)・評価シート。
- ・生徒からたくさん例、アイデアをすくい上げ共有し、作業を無理なくできる段取り。
- ・その場で書いて、その場で発表という緊張感。
- ・ツイッターの手法。ツイッターのように最近話題になっているものを取り入れる。  
友達の意見を知ることができる。比較できる。
- ・ツイッターというタイムリーな道具と、一言でいいということが生徒にとって負担が少なく効果的でいいと思った。興味を抱き入って行きやすい。(同様意見4)
- ・(古典などの時差を埋めて) 自分に置き換えて考えさせる。(考え方・思考の促進)
- ・清少納言の「春はあけぼの」をそのまま絵に置き換えればその絵から読み取ったことを同じように発表し合い、鑑賞の授業となる。文章から読み取ったことを絵で表現してみる。言葉→絵、絵→言葉。美術としての読解力につながる。
- ・生徒達と常にコミュニケーションとっていたこと。ユーモアを交えていたこと。
- ・生徒をほめ、やる気を引き起こしていたところが参考になった。生徒と気持ちのいい授業づくりをするには、どうしたらよいか教えて頂いた。授業前の意識付け。
- ・一人一人の感受性を認める→声に出してほめる。(同様意見3)
- ・生徒をほめその気にさせやる気を向上させている。
- ・ほめながらペースに引き込むところ。気持ちの盛り上げ方。
- ・言葉のキャッチボール。(笑いの変化球で50分間引きつけ考えさせる。)
- ・自然をテーマとした授業展開が生徒の心に入って行きやすかったと思う。
- ・きめ細かい生徒への声かけや発言に対する返し方。生徒に共感する。笑顔。言葉遣い。
- ・生徒の声をすぐとりあげ、すぐに効果的に全体に返していたこと。

## 5 具体的な実践例2

### 国語科・英語科合同学習指導案

日時：平成22年10月15日（金）第5校時（予定）

授業学級：中央区立日本橋中学校 2年3組

授業者：渡辺雅美（国語）・山根木奈津子（英語）

#### 1 学習目標（付けたい力）

【読解の能力】登場人物の心情や話の展開、筆者の意図などを正確に読み取ることができる確かな読みの力を身につける。（国語）

【表現の能力】豊かな表現を工夫し、感動を伝え合う。（国語・英語）  
反駁で使われる表現や反論する表現を使い英語で話す。（英語）

#### 2 学習教材

- ・生きる姿～作品をさまざまな視点からとらえ、人間について理解を深める～  
『走れメロス』 太宰治（国語2 光村図書）
- ・ディベートⅡ（反駁部分英語・教科横断的言語活動の試み）への発展（自作）
- ・英語劇（アニメ）“RUN MELOS RUN”

#### 3 学習目標・教材設定の理由

「信じられているからこそ、期待に報いなければならぬ。」と考えるメロスの姿が力強く描かれているこの作品は、実は作者の自殺未遂や文学的転向、パピナル中毒等の10年間におよぶ破滅的な生活の果てに描かれたものである。メロスは親友を人質として暴虐な王のもとに残し、妹に婚礼を挙げさせ急ぎもどる。彼に次々と苦難が襲いかかるが、死力を尽くして刑場に戻るメロスらの友情に王の人間不信も解ける。ここでは人物像と人間関係をとらえることによって、人物の心情や行動の意味を理解し、作品の主題に迫る。単なる道徳的な教訓の物語としてではなく、幅広い読みの可能性を追究したい。また、読み取った論拠と感動を発表時間に見合う論理的な文章として豊かな表現で発表させたい。

英語科でも論理的思考力（Critical Thinking）の育成は指導の柱となっている。1年次よりSpeech、Skitなどの表現活動を継続的に行い、また、ペアワークなどでもWhy/Because/agree withなどの表現は計画的に導入している。国語の授業でディベートの基礎を学び、少しずつ英語にスライドさせていく予定である。論理的思考が表現力を伸ばし、4技能（聞く・話す・読む・書く）の総合的伸長の基礎になると考える。

#### 4 学習指導計画と指導の工夫

##### (1) 国語学習指導計画（全10時間）

- 第1時 学習計画提示・導入・CD視聴（38分）・一次感想（一斉授業）
- 第2時 読解①国語ワークシートその1（少人数授業）
- 第3時 読解②国語ワークシートその2（少人数授業）
- 第4時 読解③国語ワークシートその3（少人数授業）
- 第5時 読解④国語ワークシートその4（少人数授業）
- 第6時 ディベートⅡについての説明・論題及び肯定側否定側の選択・役割分担・話し合い・発表原稿準備①（少人数授業）

第7時 発表原稿準備②（少人数授業）

第8時 シミュレーション・セッティング・ディベート評価カード記入法指導（少人数授業）

第9時 ディベート発表会 **本時**（一斉授業）

第10時 まとめと反省・相互評価（一斉授業）

## (2) 英語科学習計画（全3時間）

第1時 英語劇またはアニメの鑑賞、反駁の基本表現

第2時 グループで反駁表現の練習

第3時 ディベート発表会 **本時**（一斉授業）

## (3) 指導の工夫

1年次に『少年の日の思い出』を題材にディベートを行った。反駁1回のみでの略式ディベートであるが、生徒は大変意欲的に取り組み、話す力・聞く力が飛躍的に向上するなど成果が見られた。今回は英語ディベートにつなげる準備段階として、反駁（反対尋問）を英語で行い、パブリックスピーキングを意識した国語や英語でのコミュニケーション能力を養うとともに、学習意欲をさらに向上させた。

今回のディベートの形式は、

I 立論 肯定側3分否定側3分～作戦タイム1分～

II 反駁（英語・反対尋問） 否定側2分肯定側2分～作戦タイム1分～

III 最終弁論 否定側3分肯定側3分

IV 判定（フロアの視聴者）

ディベートの有効性であるが、社会問題のみをテーマにディベートを言語活動として扱うと、思想信条にかかわる部分や、教室で扱う教材としては不適當な部分も出てくる。しかし文学的作品ならば、作品を読み解き、論拠を探し、自由に想像力を働かせ作中人物や作者ひいては自分の立場に立って考えを述べるができる。また、論題については、作品の中から相反するテーマを設定する際、生徒が身近に感じられ、どちらの立場に立っても論じやすいものを生徒の感想や意見から論題を設定するのが有効である。

## 5 展開

	生徒の主な学習活動	指導上の留意点・支援	評価の観点
導入	○本時の目標と学習内容を確認する。 ○発表者・視聴者・タイムキーパーはそれぞれのフロアに移動、準備しておく。	○本時の目標と学習内容を理解させ 本時の言語活動の実践に向けて、 発表者は自信を持って臨むように、 視聴者は理解を深めるように 励ます。	○ディベートに 積極的に取り 組もうとする。
展開	①論題A「メロスは真の勇者である・ない」 について発表する。 ○視聴者は評価カードに得点を記入し、判定 する。特に心に残った生徒や意見は記入し ておく。 ②論題B「作者が自身を投影していたのは、 ディオニス王である・ない」 ③論題C「セリヌンティウスに選択の余地は	○視聴者への机間支援。 ○ビデオ撮影・記録。 ○ディベートがスムーズに進行する ように支援する。 ○判定のコールを行う。	○文章にした自 分の意見や思 いを、わかり やすく伝える。 ○友人の発言を きちんと聞き、 正しく受

	あった・なかった」同様に行う。		け止める。
ま と め	○本時のまとめと反省、指導者および視聴者の評価は次回行うことを予告する。		

## 6 評価

### 関心・意欲・態度

間違いを恐れず、ユーモアを交えて、自分の考えを日本語や英語で話す。(国語・英語)

### 表現の能力

- ① 論拠を押さえ、文章にした自分の感動や考えを、分かりやすく伝える。(国語)
- ② 反駁で使われる表現で話す。(英語)

### 理解の能力

友人の発表をしっかりと聞き、共感したり批評したりしながら、自分自身の読みを深める。(国語)

## 7 研究のまとめと来年度への課題

落ち着いた授業の雰囲気作りと、意欲を高める言語活動の授業を工夫することで、生徒の基礎・基本となる学力は飛躍的に向上したと考える。同時に、文学作品の読みを深め、互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団としての考えを発展させることで、思考力・判断力・読解力・表現力も高まったといえる。今後は議論を深め、より高次の解決策に至る経験を与えて、社会で活躍できる人材を育成することを目標とする。

## 英語ワークシート (例)

### 英語でディベートに挑戦!

CLASS \_\_\_\_\_ NO \_\_\_\_\_ NAME \_\_\_\_\_

英語で反駁（反対尋問）してみよう!!

～発表を工夫し（聞き手への配慮）難しい表現をうまく伝える～

論題A「メロスは真の勇者である。是か非か。」

Melos is true brave man or not.

② 論題B「作者が自身を投影していたのは、ディオニス王である。是か非か。」

It is king Dionis that an author reflected own or not.

③ 論題C「セリヌンティウスに選択の余地はあった。是か非か。」

Serinuntius could choose or could not choose.

反駁で言おうと思っている表現 (日本語)	(英語)

# 『走れメロス』 ティベート評価カード (例)

2年 組 番氏名

**論題** メロスは真の勇者である。是か非か。

## <肯定側>

論理的な内容で、説得力がある。

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

感動を伝えられる豊かな表現力がある。

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

論理的な内容で、説得力がある。

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

感動を伝えられる豊かな表現力がある。

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

論理的な内容で、説得力がある。

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

感動を伝えられる豊かな表現力がある。

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

## <否定側>

論理的な内容で、説得力がある。

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

感動を伝えられる豊かな表現力がある。

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

論理的な内容で、説得力がある。

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

感動を伝えられる豊かな表現力がある。

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

論理的な内容で、説得力がある。

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

感動を伝えられる豊かな表現力がある。

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

立  
論

反  
駁  
英  
語

最  
終  
弁  
論

合計

合計

### 特に印象に残った、優れた発表

( ) さんの

( ) さんの

## 数学科

### 1 数学科の研究主題

授業形態と指導の工夫

～基礎基本の定着と確かな読解力から表現力の向上を目指して～

### 2 昨年度の成果と本年度の課題

#### (1) 昨年度の成果と課題

昨年度は数学科の専任が3名、区講師が2名、都講師が1名と教員数も充実していたため、基礎クラス、標準・発展クラスと全学年少人数授業を展開することができた。さらに、基礎クラスにおいては2名の教員によるチームティーチングの授業を行うことができた。習熟度別少人数授業は、一斉授業に比べ生徒一人一人に目が届き、落ち着いた雰囲気の中で授業を展開することができた。また、基礎クラスでは15名前後の生徒を2名の教員で見守るため、生徒のつまづきにも丁寧に対応することができ、時間をかけ、基礎・基本の定着を図ることにつながった。一方、標準・発展クラスにおいては、基礎クラスとの進度に差が出るため、その時間を利用し、問題を多角的にとらえる練習や、応用発展的な問題に取り組む時間に充てることができた。これらの取り組みにより、数学を得意とする生徒がさらに伸びようとする授業を展開することができた。全体を通して、課題をよく読み、その中に書かれている解決への糸口を探し出し、その道筋を記述し、表現することなど、少しずつではあるが意識を高めることができた。

しかし、少人数授業ではクラスを編制するにあたり、生徒の希望を優先させ過ぎてしまうと、友人関係や担当教員によって、選択を変えるといったことも見られる。自分に適したクラス選択をするためにも、定期考査や単元テストといった評価をもとに担当教員が責任をもってクラス編制することが望ましいと考える。また、習熟度別少人数授業を展開するにあたり、1学年に3～5名の教員がかかわってきた。単元を通してどのような見通しで指導をしていくのか、毎回の授業の指導方法、進度を合わせるなどの打ち合わせの時間を十分に確保できなかったことが課題である。しかし、多くの教員が同一学年にかかわるからこそ、指導形態や指導方法、教材やワークシートの作成などに関して、意見交換を活発に行うようになったことが成果である。

#### (2) 本年度の課題

生徒たちの数学に対する興味や関心を高めることや、関数や図形領域における思考力・表現力の育成を図るためにも、視覚的教材は有効であると考えられる。単元の導入や、標準・発展クラスの応用発展的な課題において、コンピュータや電子黒板といった電子機器を活用していきたい。

また、本年度は区講師が2名から1名に減ったこともあり、昨年度の指導形態である、習熟度別少人数授業の基礎クラスをチームティーチングで指導することができなくなった。基礎クラスを1名で指導する中でも、昨年度と同様の成果を出せるかが課題となる。また、昨年度の課題であった教員間の打ち合わせの時間を確保することも大切である。

### 3 本年度の取り組み

本年度実践した学習指導案を以下に掲載する。

#### (1) 第1学年 【数と式】

授業の形態	習熟度別少人数制授業（基礎クラス）	
教科	数 学	科 指 導 者 小 川 和 博
教科の研究主題	授業形態と指導の工夫 ～基礎基本の定着と確かな読解力から表現力の向上を目指して～	
単元、主題名	3章「方程式」 ① 方程式 3 方程式の解き方	
本時のねらい	「移項」の原理を理解し、それを使って1次方程式が解ける。	
研究主題に関わる本時のポイント	方程式を解くということは、等式を変形することであるが、その変形には「等式の性質」のどれが使われているのかを読み取ることや、どれを使えばよいのかを判断することができるようにならなければならない。	
対象学年	1 年	
本時の指導過程		
	指導内容	研究主題に関わる指導上の留意点
導 入	「等式の性質」とそれを使った1次方程式の解法を確認する。	
展 開	<p>○「移項」の説明</p> <p>例① ① <math>3x + 4 = 10</math>                  ② <math>2x = 10 - 3x</math></p> <p>○類題で練習</p> <p>Q① ① <math>2x + 3 = 9</math>                      ② <math>3x = 8 - x</math>                 ③ <math>7 - 3x = -5</math>                      ④ <math>5x = 7x + 2</math></p> <p>○一般的な1次方程式の解法と「検算」</p> <p>例② <math>5x - 3 = 2x + 9</math></p> <p>○類題で練習</p> <p>Q② ① <math>6x - 5 = 2x + 3</math>                  ② <math>2x + 7 = 4x + 5</math></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>等式の性質を使うことによって、項が他辺に移ったように見えているという「移項」の原理を理解させる。<b>基礎基本</b></li> <li>どの項をどちらの辺に移項すればよいのかを考えさせ、より合理的な解き方を習得させる。<b>読解力・表現力</b></li> <li>求めたxの値が正しい解であるかを確認する手立てを考えさせ、実践させる。<b>基礎基本</b></li> </ul>
ま と め	一般的な1次方程式の解法手順をまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>符号の変化、文字の項と定数項の区別等を確認しながらまとめる。<b>基礎基本</b></li> </ul>
評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>「移項」の原理やそれを使った「方程式の解法」を理解できたか。</li> <li>基本的な1次方程式を「移項」を使って解くことができたか。</li> </ul>	
研究成果と課題	1次方程式の「解を求めること」や「解を確認すること」については、ほとんどの生徒ができるようになった。「等式の変形」という意識を高め、解が分数になるときや「文字について解くこと」への活用も視野に入れて、授業を展開することが課題である。	

(2) 第2学年 【関数】

授業の形態	習熟度別少人数制授業（基礎クラス）	
教科	数 学 科	指導者 今 田 麻里子
教科の研究主題	授業形態と指導の工夫 ～基礎基本の定着と確かな読解力から表現力の向上を目指して～	
単元、主題名	3章「1次関数」 ① 1次関数 5 1次関数を求めること	
本時のねらい	2組の $x$ , $y$ の値が与えられた場合の1次関数の式の求め方を理解する。	
研究主題に関わる本時のポイント	基礎クラスを指導するにあたり、既習内容を確認し、基礎基本の定着に努める。また、新しい内容についても容易な穴埋め形式のワークシートを利用し、2通りの解法を理解する。	
対象学年	2 年	
本時の指導過程		
	指導内容	研究主題に関わる指導上の留意点
導 入	本時の学習内容の提示	・ 2通りの解法それぞれを理解し、自身の解きやすい方を判断させる。
展 開	○ワークシートの配布 ○解法1（変化の割合を求める）の解説 ○解法2（連立方程式の利用）の解説 ○教科書の間（2題）の演習	・ 変化の割合は既習内容であるので、自身で値を出させ、後に解説する。 <b>基礎基本</b> ・ ワークシートの空欄をうめ、2つの式を立てさせる。 <b>読解力</b> ・ 全員で連立方程式の解き方を確認する。 <b>基礎基本</b> ・ 解き方は解法1, 2どちらかで解かせる。 <b>表現力</b> ・ 解説の際には1題目を解法1、2題目を解法2で解いた生徒に発表させ、全員で確認する。 <b>基礎基本</b>
ま と め	2つの $x$ , $y$ の値が与えられた時の1次関数の式の求め方を理解する。	・ 既習内容である変化の割合の求め方、連立方程式の解き方を再度確認させる。 <b>基礎基本</b>
評 価	・ 2通りの解き方が理解できたか。 ・ 解法1, 2の解き方を選択し、解くことができたか。	
研 究 成 果 と 課 題	本時は既習内容を利用し、課題を解決する内容であった。多くの生徒はできるようになったが、既習内容を忘れてしまっている生徒もいた。基礎基本の定着には、既習内容の確認も授業内で多く取り入れている。しかし、演習時間が少なくなってしまうので、そうならないように、教材の工夫をしていきたい。	

4 本年度の成果と課題

教員数の関係から昨年度までは、習熟度別少人数の基礎クラスを2名のチームティーチングで担当していたが、本年度は1名の教員で担当することとなった。30数名の生徒を標準・発展クラスで20名程度、基礎クラスで15名前後と意図的に基礎クラスの人数を絞り込むことによって、昨年度までには及ばないものの、生徒のつまずきに丁寧に対応することができるようになった。その結果、テストの結果等からも昨年度と同様の成果をあげられてい

る。また、1 学年にかかわる教員数が減ったため、打ち合わせに要する時間も短縮でき、スムーズに授業を展開することができた。

生徒の興味を引き出すためや、視覚に訴える授業をするために、電子黒板などの電子機器を活用することが望ましいと考える。しかしながら、教材研究に十分な時間を確保することが困難であることや、準備や後片付けにも多少なりとも時間を要すること、担当する授業時数が週に20時間以上ある現状、あるいは毎回教員が教室を移動しながら授業を行うという形態であることなどを考えると、現段階では電子機器の活用は難しい。活用するとなれば、準備や後片付けの時間を省くために、数学室といった固定の教室で授業を行うことが望ましいが、それもなかなか難しい。したがって今後、一単元に一時間でも電子機器を活用していこうという教員一人一人の積極的な姿勢と、活用した事例を相互に共有することが必要であり、このことは授業改善にもつながっていくことであると考えている。

## 英語科

### 1 英語科の研究主題

「基礎基本となる語彙力の定着、またその知識を活用した表現力、読解力の向上」

グローバル化する社会の中で活躍する人材を育成するために、平成21年度より移行期間に入る外国語の新学習指導要領では、実践的なコミュニケーションツールとしての英語力を育成することを重要視している。コミュニケーションにおいて「自身の考えを伝える」、「相手の考えを理解する」ためには、言語の土台となる語い力の習得が必須となる。そのために、新学習指導要領では必修の語い数が「900語程度」から「1200語程度」と大きく増えている。これを受けて、英語科では以上のような研究主題を設定し、語い力指導を徹底するとともに表現力、読解力の向上を目指す指導法の工夫を図った。

### 2 21年度の成果と本年度の課題

昨年度の成果として、英語科の研究主題として「基礎基本となる語い力の定着」ということを掲げたが、以下の二点については一定の成果を上げたと言える。第一にビンゴブックをきっかけに意欲的かつ継続的に語いの学習に取り組ませることができた。第二に各学年におけるスペリングコンテストの実施は、生徒の学習意欲を喚起し、語い力を向上するとともに、本校全体の課題である生徒の学習習慣の改善を促すことができた。少人数授業の授業形態も、生徒一人一人の様子が観察でき、生徒の実態や状況に合ったきめ細かな指導ができることから、語い力向上に効果的であった。

その反面、「語い力を活用した表現力・読解力」の向上は本年度の課題である。特に「表現力」については、区の学習力サポートテストの結果からも全学年を通した大きな課題だと読み取れる。また、少人数指導の編制方法についても本年度の課題として挙げられる。本校は3年間の研究において、習熟度別少人数授業を展開してきたが、生徒の学力状況や生徒の集団構成及び指導する内容により、必ずしも習熟度別クラス編制が学習意欲及び学力の向上に効果的であるとはいえなかった。しかし、単元や活動内容によっては習熟度別にクラスを編制することで生徒の学力差を考慮した指導をすることができるというメリットもあることから、生徒の学習意欲を最大限に引き出し、学力の向上を図る授業形態のあり方について今後も検討を続けていく。

### 3 22年度の取り組み

#### (1) 少人数授業の展開

昨年度に引き続き、少人数授業を行っている。クラス編成については、基本的に習熟度別としているが、学習単元や生徒の学力状況、集団構成により、単純二分割とすることもある。習熟度別で分割する際は、単元ごとのテストや定期テスト、スピーチやスキットでの発表での評価を基準としている。

#### (2) 語い力向上のためのさまざまな活動

##### ① スペリングコンテストの実施

1・2学年では、「朝学習の時間を活用したスペリングコンテスト」を実施している。このスペリングコンテストは、学期に1回長期休業後に計画的に行い、既習単語を中心に150単語を抽出し、その中から100題出題する。本校では朝読書を行っているが、スペリングコンテ

スト前の一定の期間は学習により集中力を高めようと、プリントを作成し朝学習を行っている。優秀者ならびに優秀クラスは表彰し意欲を高め、合格点に達しない生徒は合格するまで追試や補習を行う。長期休業前に範囲の学習を提示することによって家庭学習と学習計画の習慣化を図る、また朝学習を実施することによって集団としての学習意欲を喚起するというねらいをもって、基礎学力の定着を図った。平均点は70点程度であったが、回を重ねるごとに上昇の傾向が見られ、また低学力層の生徒の得点が上昇していたことから生徒の語力向上に直結したと考えられる。

また、このスペリングコンテストの取り組みは、国語科の「漢字コンテスト」と共通意識をもって行われており、教科間連携して学習を進めることによって生徒の学習への意識をより高められると感じた。

## ② 単語テストの定期的な実施

研究の3年間を通して、全学年でビンゴブックを取り入れている。ウォーミングアップとしてだけでなく語力育成を意識して、ビンゴブックの単語を取り入れた単語テストを定期的に行っている。単語テストの形式は学年によって、毎授業のはじめに3問ずつ出題する、単元ごとに出題する等異なるが、テストをすることによって緊張感が生まれ、学習の必要性を感じて取り組んだため、語力の向上が見られた。

## (3) 音声指導の徹底と、言語活動の充実

言語習得の基本は音声からのインプットである。「聞く」「話す」ことから理解を深めることは、生徒の、特に書くことに苦手意識をもつ生徒の学習への抵抗感を減らす。また「読む」「書く」よりも格段に短時間で繰り返すことができるため、音声での繰り返しにより、ねらいの文法事項を体得させようと指導している。また、音声での理解の手立てとして、ピクチャーカードを使用しており、視覚的に補助している。このような音声指導の徹底により、学習力サポートテストの結果では「聞く力」は70%以上の高い得点率を得ている。

この音声で習得した知識を活用する力を高めるために、スピーチやスキットといった様々な言語活動を授業に取り入れた。発表の機会を設定することで生徒は学びの必要性を実感でき、意欲的に取り組んでおり、表現力の育成につながったと感じた。このように言語活動を通して表現力を伸長し、そこから発表した内容を「書く」ことにつなげることで生徒の学力の向上につなげていく。

## (4) ALT（アシスタント・ランゲージ・ティーチャー）の積極的な活用

### ① 英語でのオーラルインタラクション

ALT（アシスタント・ランゲージ・ティーチャー 以下「ALT」と略す）がまとまった量の英文を話し、どのような内容について話していたか、推測させている。実体験としての英語に触れることで生徒の興味関心を高めるとともに、既習の単語や文法を活用する場となる。また未習の単語や文法についても状況や表情などから推測して読み解く力の向上を図っている。また、単語やフレーズを学ぶ際にALTが他の言い換えの表現を示し、活用力の育成を図っている。

### ② 個別の支援

ALTとのチームティーチングにより、個別の学習支援がしやすくなり、生徒の学

力の向上が図れている。JETが新出単語や教科書本文のコーラルリーディングをさせる際に、ALTが机間指導に回り、細かく発音やイントネーションの指導を徹底している。生徒もネイティブに個別に指導を受けることで、英語への学習意欲が高められている。

## (5) 具体的な実践例

### ① 第2学年

#### (1) 教科書：New Crown English Series 1（三省堂） Lesson 5 "My Friends in Okinawa"

#### (2) 本課の評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 表現の能力	ウ 理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
<p>①間違いを恐れずに、積極的に英語を話そうとしている。</p> <p>②分からないところがあっても、前後の文や状況から推測しながら英語を聞きとろうとしたり、読み続けようとしている。</p>	<p>①疑問詞 <b>who</b> を用いて質問したり、3人称の人称代名詞の主格(<b>he, she</b>)や目的格(<b>him, her</b>)を用いて、話したり書いたりすることができる。</p> <p>②本文の内容が相手に伝わるように、イントネーションに注意しながら音読することができる。</p>	<p>①3人称の人称代名詞の主格(<b>he, she</b>)と目的格(<b>him, her</b>)を含む英文を読んだり聞いたりして、その内容について理解することができる。</p> <p>②疑問詞 <b>who</b> を含む英文を読んだり聞いたりして、英語で答えることができる。</p>	<p>①3人称の人称代名詞の主格(<b>he, she</b>)と目的格(<b>him, her</b>)、疑問詞 <b>who</b> を含む英文の意味や構造を理解している。</p> <p>②英文を正しく書くルールを理解している。</p> <p>③地域による文化の違いについて理解し、沖縄文化についての知識がある。</p>

### (3) 本時の学習

#### 本時の指導目標

ア 大きな声で正しく英語の発音ができる。

イ 疑問詞 **who** を用いて、誰であるかを質問することができる。また、質問に対して正しく答えることができる。

ウ 沖縄の豊かな自然を通して、自然保護の大切さを学ぶ。(本文の理解)

指導項目	教師の指導	生徒の活動	評価
1. Greetings (1 min.)	あいさつの後、日付と天気の確認をする。	教師のあいさつや質問に答える。	

2. Warm-up (3 min.) ・ Bingo	単語を読み上げる。	音声と文字を一致させる。	
3. Review (5 min.) 4. Presentation of the new grammar items (10 min.) ① Oral introduction ② Practice	・ 2組のペアに、お互いを紹介させる。 ・ 本文の音読をさせる。 ① Picture cards を用いて、疑問詞 who を含む英文の導入をする。 ② 口頭練習をさせる。	・ ペア同士、お互いを紹介しあう。 ・ 本文の音読をする。 ① 教師の説明を聞いたり、質問に答えたりしながら疑問詞 who について学ぶ。 ② 口頭練習を行う。	ア① イ① 【観察】
5. Introduction of the text (7min.) ① Oral introduction ② Listening - 1 ③ Listening - 2	① Picture cards を用いて、教科書の導入を行う。 ② リスニングポイントを与え、CD を聞かせる。(本は閉じさせてく) → 答え合わせ ③ 本を開かせる。もう一度聞かせて、音声と文字を一致させる。	① 教師の説明を聞き、質問に答えながら、本文の概要を理解する。 ② リスニングポイントの答えを考えながらCDを聞く。 * 質問に答える。 ③ 本を開く。もう一度聞いて、音声と文字を一致させる。	
6. Explanation (3 min.)	・ 生徒に質問しながら本文内容や語句の説明をしたり、線を引かせたりする。	・ 教師の質問に答えながら、意味確認をしていく。	
7. Pronunciation of new words (3 min)	・ 単語カードを見せ、教師の後に続けて発音させる。 ・ 日本語→英語など、様々な練習をさせる。	・ 教師の後について発音する。 ・ 教師の指示に従って、様々な練習をする。	
8 Listening - 3 (1 min.)	・ CD を聞かせる。	・ 意味をとらえた上で、音声上の留意点にも気を付け、再度聞く。 ・ 容を確認する。	
8. Reading (5 min.) ① Chorus reading ② Buzz reading	① 2回、音読させる。 ② 自分のペースで読ませる。 ③ 教師と生徒で役割を交代しながら2度読む。	① 教師の後に続けて音読する。 ② 個々に自分のペースで読む。	イ② 【観察】

③ Chorus reading			
9. Pair work (8 min.)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やり方の指示を出す。</li> <li>・インフォメーション・ギャップのプリントを使い、絵の人物が誰あるかを質問しあわせる。</li> <li>・何組かに発表をさせる。(答えあわせを兼ねる)</li> <li>・活動の自己評価をさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・説明と簡単な練習の後、人物の絵の下の空欄に全部名前が埋まるまで、隣同士ペアで質問しあう。</li> <li>・指示をされたペアは発表する。</li> <li>・自分の活動の自己評価をする。</li> </ul>	ウ② <b>【観察】</b>
10. Consolidation (3 min.)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目標文を板書し、文法事項の確認をする。</li> <li>・ノートに書かせる。</li> <li>・宿題の指示を出す。 (教科書の音読5回)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師の説明を聞く。</li> <li>・板書を写す。</li> </ul>	
11. Closing (1 min.)	あいさつをする。	あいさつをする。	

#### (4) これまでの研究に関する取り組みについて

##### ア 基礎力を身に付けるために

1学期：①アルファベットボードを使った文字の練習

②毎時3問の英単語テスト

(その場で3問練習し、すぐにテストを行う。学習方法を身に付けさせるための取り組み)

③文法のまとめ練習プリント

2学期：①音読の宿題(本文を毎日5回ずつ読んでくる。)

②レッスンごとに重要単語や表現を文の形式で提示した一覧表を配布し、後日テストを行う。

##### イ 自己表現活動

1学期：一般動詞を使った自己紹介スピーチ

集中できるように授業規律について指導を徹底したり、学力差も大きいため、あきらめさせないように興味・関心を継続させるような教材教具の用意、音声での指導や反復学習に力を入れたりするなどの取り組みを行ってきたが、スローラーナーへの配慮や支援をこれからもどのように行っていくかを常に様子を見ながら工夫を重ねる必要がある。

## ② 学習指導案（2 学年 国語・英語合同学習指導案）

### 国語・英語科合同学習指導案

授業者 渡辺雅美（国語）・山根木奈津子（英語）

1 日時 平成22年10月15日（金）第5校時

2 授業学級 中央区立日本橋中学校 2年3組

#### 3 単元の目標

##### 理解の能力

・物語文で登場人物の心情や話の展開、筆者の意図などを正確に読み取ることができる。  
（国語）・英語で行われる反駁を聞いたり、視覚的補助資料を見たりして、内容を正しく理解することができる。（英語）

##### 表現の能力

- ・豊かな表現を工夫し、感動を伝え合うことができる。（国語・英語）
- ・反駁で使われる表現や反論する表現を使い、英語で話すことができる。（英語）

#### 4 学習教材

- (1) 『走れメロス』（小説～深める・広げる～） 太宰治 光村図書中学校2年
- (2) ディベートIからディベートII（反駁部分英語）への発展（渡辺雅美 自作）
- (3) アニメ『Run Melos Run』

#### 5 学習目標・教材設定の理由

この作品は、作者の自殺未遂や文学的転向、パピナル中毒等の10年間に及ぶ破滅的な生活の果てに描かれたものである。メロスは親友を人質として暴虐な王のもとに残し、妹に婚礼を挙げさせ急ぎ戻る。彼に次々と苦難が襲いかかるが、死力を尽くして刑場に戻るメロスらの友情に王の人間不信も解ける。ここでは人物像と人間関係をとらえることによって人物の心情や行動の意味を理解し、作品の主題に迫る。単なる道徳的な教訓の物語としてではなく、幅広い読みの可能性を追究する。

英語科でも論理的思考力（Critical Thinking）の育成は指導の柱となっている。1年次よりSpeech、Skitなどの表現活動を継続的に行い、また、ペアワークなどでもWhy/Because/agree withなどの表現は計画的に導入している。国語の授業でディベートの基礎を学び、少しずつ英語にスライドさせていく予定である。論理的思考が表現力を伸ばし、4技能（聞く・話す・読む・書く）の総合的伸長の基礎になると考える。

## 6 学習指導計画と指導の工夫

### (1) 国語学習指導計画（全10時間）

第1時	学習計画提示・導入・全文通読・一次感想
第2時～ 5時	読解①～④国語ワークシートその1～その4
第6時	ブックディベートについての説明・論題及び肯定側否定側の選択・役割分担・ 発表原稿準備①
第7時	発表原稿準備②
第8時	シュミレーション・セッティング・ディベート評価カード記入法指導
第9時 <b>本時</b>	ディベート発表会
第10時	まとめと反省・相互評価

### (2) 英語科学習指導計画（全4時間）

第1時	映画鑑賞 アニメ「走れメロス」、反駁の基本表現・原稿準備
第2時	グループで反駁表現の練習
第3時 <b>本時</b>	ディベート発表会
第4時	まとめと反省・相互評価

### (3) 指導の工夫

英語科としては、初のディベートであるが、生徒は1学年時に『少年の日の思い出』を題材に国語科でディベートを行っている。今回のディベートの形式は以下の通りである。

#### I 立論 肯定側3分否定側3分

～作戦タイム1分～

#### II 反駁（反対尋問）否定側2分肯定側2分・・・英語

～作戦タイム1分～

#### III 最終弁論 否定側3分肯定側3分

#### IV 判定（フロアの視聴者）

反駁1回のみでの略式ディベートであるが、生徒は大変意欲的に取り組み、話す力・聞く力が飛躍的に向上するなど成果が見られた。今回は英語ディベートにつなげる準備段階として、反駁（反対尋問）を英語で行い、パブリックスピーキングを意識した国語や英語でのコミュニケーション能力を養うとともに、学習意欲をさらに向上させる。

## 7 展開

	生徒の主な学習活動	指導上の留意点・支援	評価の観点
導入	○本時の目標と学習内容を確認する。 ○発表者・視聴者・タイムキーパーはそれぞれのフロアに移動、準備しておく。	○本時の目標と学習内容を理解させ本時の言語活動の実践に向けて、発表者は自信をもって臨むように、視聴者は理解を深めるように励ます。	○ディベートに積極的に取り組もうとする。

展 開	①論題A「メロスは真の勇者である・ない」について発表する。 ○視聴者は評価カードに得点を記入し、判定する。特に心に残った生徒や意見は記入しておく。 ②論題B「作者が自身を投影していたのは、ディオニス王である・ない」 ③論題C「セリヌンティウスに選択の余地はあった・なかった」を同様に行う。	○視聴者への机間支援。 ○ビデオ撮影・記録。 ○ディベートがスムーズに進行するように支援する。 ○判定のコールを行う。	○文章にした自分の意見や思いを、分かりやすく伝えたりする。 ○友人の発言を真しに聞き、正しく受け止める。
ま と め	○本時のまとめと反省、指導者および視聴者の評価は次回行うことを予告する。		

## 8 評価

### 関心・意欲・態度

間違いを恐れず、ユーモアを交えて、自分の考えを日本語や英語で話す。(国語・英語)

### 表現の能力

①論拠を押さえ、文章にした自分の感動や考えを、分かりやすく伝える。(国語)

②反駁で使われる表現で話す。(英語)

### 理解の能力

友人の発表をしっかりと聞き、共感したり批評したりしながら、自分自身の読みを深める。(国語)

英語で行われる反駁を聞いたり、視覚的補助資料を見たりして、内容を正しく理解する。(英語)

## 英語ワークシート (例)

# Let's debate in English!!

英語でディベートに挑戦!

Date: \_\_\_\_\_

Weather: \_\_\_\_\_

2 - \_\_\_\_ No. \_\_\_\_ Name: \_\_\_\_\_

反駁を英語で挑戦しよう。

①論題A 「メロスは真の勇者である／ない」

**Melos is a true hero or not.**

②論題B 「作者が自身を投影していたのはディオニス王である／ない」

**It is King Dionis that the author reflected himself or not.**

③論題C 「セリヌンティウスに選択の余地はあった／なかった」

**Melos had a choice or not.**

反駁で言おうと思っている表現（日本語）	（英語）

**発表の工夫（聞き手への配慮） → 難しい表現をわかりやすく伝えよう。**

- ・ジェスチャーの工夫
- ・パワーポイントの活用（絵・単語）

#### 4 本年度の成果と課題

本年度の成果として、「基礎基本となる語い力の定着」については昨年度に引き続き、効果的な取り組みを実践することができたと感じた。少人数授業の授業形態も、生徒一人一人の様子が観察でき、生徒の実態や状況に合ったきめ細かな指導ができることから、学力向上に効果的であった。

本年度の課題としては、より効果的に語い力を向上させる活動や指導方法を模索することが挙げられる。本来ビンゴブックは授業のウォーミングアップ及び楽しみながら英語を学ぶ土台を築くためのものである。生徒がビンゴブックで語い力を向上させる意欲のきっかけを作ることができたので、各学年で取り組んでいる活動や指導方法を改良していくことが今後の課題となる。また、昨年度からの課題である表現力・読解力の育成は本年度も課題として残った。基礎基本の語い力や文法事項を活用させるには、授業内で活用の機会を設定することが重要であり、昨年度からの課題として本年度取り組み、一定の成果は得られたと感じた。しかし、言語活動や書く練習など多く機会を設定しても、授業時間内の学習だけでは活用力の伸長は困難であり、家庭学習が知識の定着には不可欠である。本校は家庭学習の習慣が身に付いていない生徒が多くいるため、家庭学習の習慣付けを支援し、定着させる方法も模索していかなければならない。これは、英語科だけでなく、学級・学年・他教科とともに協力して推進していく。

また、研究に際して、英語科としてビンゴブックを三学年共通の学習意欲向上のためのツールとして用い、語い力・活用力の育成を図っていたが、ビンゴブック以外の活動や教材については各学年が学習集団に合わせて計画し、作成し、実践していた。今後、3年間で一貫した指導を図るため、またどの学習集団においても効果的な学習法を各取組の中から模索するために英語科で共通の指導法、教具の工夫を図っていく。

## 社会科

### 1 社会科の研究主題

- (1) 基礎・基本の確かな定着をめざす。
- (2) 資料を読み取る力を身に付けさせ、思考力の育成に力を入れる。

### 2 主題設定のねらい

- (1) 学力の向上を目指すためには基礎・基本の定着が欠かせない。
- (2) 社会科は、資料・史料の読解力を育てることにより、思考力を身に付けさせることが大切である。

### 3 21年度の取り組みからの考察、課題

- (1) 少人数授業では、クラスによっては静かすぎて反応が少ないところがあったので、どのクラスも反応良く、活発になるようにする。
- (2) 少人数だからこそ、よりきめ細かく指導できることがあるので、指導方法を開発していく。
- (3) 授業最後の感想を書かせる時間が、授業によっては十分取れないときがあったので、できる限り書かせるようにするとともに、小テストを行う。

### 4 22年度の取り組み

- (1) 全学年、学級を2分割にグループ分けし、少人数指導の利点を生かした授業を行う。
- (2) 一人でも多くの生徒に教科書、資料を読ませたり、分からない語句や文章を皆で考えたりするなど、読解力を身に付けさせる。
- (3) 特に少人数制では、ほとんどの生徒に発問等を行い、答えさせることで、授業への緊張感、集中力を培える。
- (4) 発言、読みなどに対して主体的に取り組むよう工夫し、授業を活発化させ、思考力を高める授業改善を図る。
- (5) 小テストを行い、単元ごとの課題等に気付かせ、課題を克服するとともに、普段の家庭学習の習慣化を目指す。

### 5 具体的な実践例（地理的分野）

- (1) 単元名 「日本の姿をとらえよう」
- (2) 対象学年 第1学年
- (3) 題材設定の理由

この単元は、これから学習する「日本の様々な地域」の基礎となる、いわば地理的認識の座標軸を形成する位置付けにある。また、景観写真やグラフ・統計資料・分布図等の資料の読み取り、地図の読図や作図など地理的技能を充実させることは、学習指導要領の今回の改訂で強く求められている思考力・判断力・表現力等の基盤となる言語力を育成するための言語活動の充実に相当するとして、地図の読図や作図など地理的技能を一層重視することが求められている。その点で、他の国々と国土面積で比較したり、領海や排他的経済水域を含めた面積で比較したり、沖ノ鳥島の景観写真や無人の島に300億円も投じられていることをもとに、我が国の

海洋国家としての特色や領域に関する問題をとらえさせることは有効であるとする。

**(4) 単元の目標**

- ① 地球儀や地図を活用し、我が国の国土の位置や領域の特色と変化、地域区分などを取り上げ、日本の地域構成を大観させる。
- ② 大まかに日本地図を描けるようにする。

**(5) 単元の評価規準**

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断	資料活用の技能・表現	社会的事象についての知識・理解
・地球上の日本の位置や日本の範囲など日本の地域構成の基本的な枠組みについて関心を高め、意欲的に追究することができる。	・日本の地域構成を、日本の位置と領域、都道府県の構成と地域区分を基に、多面的・多角的に考察することができる。	・緯度・経度を用いて、地球上における日本の位置を表現することができる。	・47都道府県の名称や位置、地方区分の名称や位置など日本の地域構成に関する基礎的な知識を身に付けている。

**(6) 指導計画**

- ① 世界の中で日本はどこにある？
- ② 日本の範囲はどこまで？・・・・・・・・・・(本時)
- ③ 日本の都道府県を知ろう
- ④ いろいろな特色で都道府県を知ろう
- ⑤ 日本はどのような地域に分けられる？
- ⑥ 日本の略地図を書こう。

**(7) 研究主題に関わる本単元、本時のポイント**

- ① 景観写真や地図、グラフや統計資料・分布図等の資料の読み取りを行い、読解力を身に付けさせる。
- ② 様々な資料を活用し、日本の領域の特色や領域をめぐる問題を考察することにより、思考力を高める。
- ③ 日本の領域の特色や47都道府県の名称と位置・県庁所在地名・8地方区分等の基礎的内容の定着を図る。
- ④ 基礎的な技能として、緯線・経線に留意して日本の略地図を作図できるようにする。

**(8) 本時の目標**

- ・様々な資料を活用し、日本の領域の特色や領域をめぐる問題を理解する。

(9) 本時の学習活動

	学習内容・活動	研究主題に関わる留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>○日本の範囲はどこまでか考える。</li> <li>・海は日本のものか？</li> <li>・海水浴にパスポートは必要か？</li> <li>・太平洋を横断すると、どこからアメリカなのか？</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の範囲について、自分なりの根拠に基づき、思考・判断する。 (思考力・判断力)</li> </ul>
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>○日本の東西南北の端を理解する。</li> <li>・教科書の景観写真と地図帳を活用し、日本の東西南北の端を理解する。(読み取り、作図)</li> <li>○沖ノ鳥島を通して、排他的経済水域について理解する。</li> <li>・沖ノ鳥島に 300 億円投じられていることから、排他的経済水域の意義を理解する。</li> <li>○領域について理解する。</li> <li>○日本がたくさんの島々からなり、経済水域に恵まれていることを理解する。</li> <li>・オーストラリアとブラジルを比較し、排他的経済水域が 2 倍以上差があることの理由を考える。</li> <li>・日本と他の国々と領海や経済水域を含めた面積で比較する。</li> <li>・モンゴルのような内陸国は？</li> <li>○北方領土を中心に日本の領域問題を考える。</li> <li>・本州・北海道・九州・四国の主要四島を除く、面積の大きな島を確認。</li> <li>・北方領土について歴史的経緯を確認。</li> <li>・掛け図や地図帳から領土が不確定のところがあることを確認。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・景観写真や地図、統計資料等様々な資料を読み取ったり作業を行い、読解力を高める。(読解力)</li> <li>・無人の沖ノ鳥島になぜ 300 億円も使われているのか、考察する。 (思考力・判断力)</li> <li>・地図や資料、図等を活用し、考察する。 (読解力・思考力・判断力・表現力)</li> <li>・地図や資料、図等を活用し、考察する。 (読解力・思考力・判断力・表現力)</li> <li>・統計資料の読み取り。(読解力)</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ワークシートの作業を行い、本時のまとめを行う。</li> <li>・領域に関する模式図を完成させ、ワークシートを提出。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まとめの作業を行い、基礎・基本の定着を図る。 (基礎・基本の定着)</li> </ul>

(10) 評価

- ① 作業等に意欲的に取り組んでいるか。(社会的事象への関心・意欲・態度)
- ② 日本の領域の特色や問題点について多面的・多角的に考えることができたか。(社会的な思考・判断)

- ③ 写真や地図・統計資料等の資料を適切に読み取ったり、それらの資料を活用することができたか。(資料活用の技能・表現)
- ④ 領土、領海、領空について理解するとともに、日本の領域の特色や領域をめぐる問題を理解することができたか。(社会的事象についての知識・理解)

#### (11) 成果と課題

- ① 授業の導入から「日本 - 太平洋 - アメリカ」にかけての断面図を板書し、どこまでが日本でどこからがアメリカなのかという生徒への投げかけをもとに、課題解決型の授業展開ができ、生徒が思考・追求・判断する場面が多くとれた。
- ② 複数の資料の読み取りや地図の読図、領海や排他的経済水域を含めた面積の比較等の作業をもとに課題解決をおこなったことにより、資料の読解と思考の場면을多く取ることができた。
- ③ 新学習指導要領(平成20年3月告示、平成24年度完全実施)では、地図の読図や作図など地理的スキルを充実させることは、今回の改訂で強く求められている思考力・判断力・表現力等の基盤となる言語力を育成するための言語活動の充実に相当するとして、地図の読図や作図など地理的スキルを一層重視することが求められている。その点で、今回の授業は地理的スキルを活用する場面が多く取れ、新学習指導要領のねらいに迫ることができた。
- ④ 学習内容の量からも2時間扱いにするなどにして、さらに調べ学習や生徒の活動場면을多くすることにより、学習過程での理解度やつまづきを細かく見たり、発表や意見交流の場면을さらに多くするなど工夫していきたい。

◆ワークシート◆

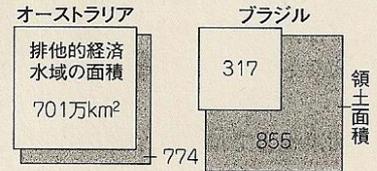
社会科 地理 ワークシート (日本の範囲はどこまで?) ( 月 日)

1年 組 番 氏名

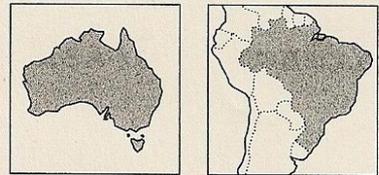
- 教科書 p.28を見て、<sup>せきひ</sup>石碑に書かれている文字を読み取ろう。
- なぜ、1人も住んでいない島を300億円もかけて守っているのだろうか。

- オーストラリアとブラジルを<sup>ひかく</sup>比較して、なぜオーストラリアの方が2倍も<sup>はいたてきけいざいすいいき</sup>排他的経済水域の面積が広いのだろうか。

(資料1) 領土と排他的経済水域の面積



(資料2) オーストラリアとブラジル



- 領土<sup>りょうど</sup>に比べて<sup>はいたてきけいざいすいいき</sup>排他的経済水域が広い国にはどのような共通点があるだろうか。

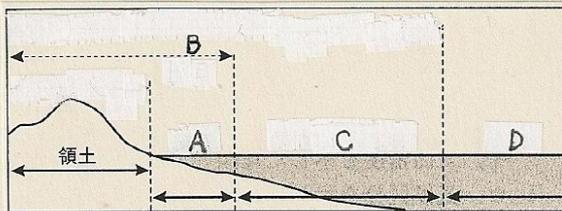
- 地図帳 p.127を見て、日本の島のうち、本州・北海道・九州・四国以外の島を面積の大きい順に並べてみよう。

第1位	_____	3,183 km <sup>2</sup>	第4位	<sup>さどしま(さどがしま)</sup> 佐渡島	854 km <sup>2</sup>
第2位	_____	1,499 km <sup>2</sup>	第5位	<sup>おおしまあまみおおしま</sup> 大島(奄美大島)	712 km <sup>2</sup>
第3位	沖縄島	1,202 km <sup>2</sup>			

◆日本の領土問題◆ 次のそれぞれの場所を地図帳で確認しよう。

- [ <sup>たけしま</sup>竹島 ] … 〈対 \_\_\_\_\_〉 : <sup>えとろふとう</sup>択捉島、<sup>くなしりとう</sup>国後島、<sup>しこたんとう</sup>色丹島、<sup>はぼまいぐんとう</sup>歯舞群島
- <sup>たけしま</sup>竹島 … 〈対 韓国〉
- <sup>せんかくしよとう</sup>尖閣諸島 … 〈対 中国、台湾〉

- 領域に関する次の<sup>もしきず</sup>模式図を完成させてみよう。



領土・領海・排他的経済水域の模式図

A : \_\_\_\_\_  
 B : \_\_\_\_\_  
 C : \_\_\_\_\_  
 D : \_\_\_\_\_

## 1 理科の研究主題

- ・実験・観察に取り組む過程を通しての思考力・判断力の育成を図る。
- ・基礎基本の定着を目指した演習を通しての読解力の育成を図る。

## 2 昨年度の成果と本年度の課題

### (1) 昨年度の成果

#### ① ワークシートの工夫

ワークシートを利用して授業を行う際は、できるだけ「仮説や考える過程」が記述できるようなものにしていこうと考えた。実験・観察等の内容により、記述の形式を工夫し、記録を残していくことによって、生徒の思考を継続・深化する手助けになった。

#### ② ワーク・小テスト等による繰り返し学習

授業の終わりのまとめに今日の学習の内容についての簡単な小テストを行うことや、学習内容の区切りがついた時に時間を取って課題プリントを行うこと、解説を行った。また、各スパンごとに1～2回の家庭学習用の課題を設定し、復習または予習ができるようにすることで基礎・基本の定着を図った。

#### ③ コンピュータ及び視聴覚教材を利用した授業の展開

独立行政法人「科学技術振興機構」ではインターネット上に「理科ねっとわーく」というWEBサイトをもっている。その中に授業で利用できる様々な動画を含むコンテンツは、インターネット上あるいはCD・DVDのコンテンツとして利用することができる。そこで、学校としてすべてのコンテンツをスタンドアロンのパソコンでも利用できるようにCD・DVDの状態に取り寄せ、理科の教員で内容の検討を行った。また、市販のソフトも利用していった。普通教室などでも電子黒板を利用していくことで、視覚的にとらえさせる場面を増やすことは、生徒の学習意欲を高めるために効果が見られた。

#### ④ 発表の機会の充実

3年生の理科の授業は1分野「終章・科学技術の進歩と人間生活」、2分野「終章・自然と人間生活」どちらかを選択するという学習内容がある。そこで、それらの内容に関することを事前にインターネットから各自が調べ、発表用にパワーポイントを作成し、全員が授業で発表する授業を行った。発表に際しては聞いている生徒全員が発表の評価を行い、発表者に還元するようにした。最初は週1回コンピュータ室を利用して発表用資料の作成を行い、その後、教室で電子黒板を利用して発表を行った。生徒のパワーポイントの使い方習得は早く、5時間ほどで、発表できるようにまでになった生徒も出てきた。

### (2) 本年度の課題

基本的に本年度の取り組みは昨年度の内容の継続並びに深化を図るものとした。ワークシートの工夫については、新たな単元で取り組んだ。また、新たに大型ディスプレイが学校に9台配置され、プロジェクタタイプの電子黒板だけでなく、ビデオ等とも共有しやす

くなったことで、新たな授業の展開に資するものとなった。

### 3 本年度の取り組み

#### (1) 本年度の取り組み

本年度は、昨年度の研究実践を基本的には踏襲していくことにした。特に授業実践を重視し、研究授業だけでなく日頃の授業の中でも読解力を高める場面をできるだけ多く取り組むように努めた。

#### (2) 第1学年理科学習指導案（指導者 荒巻 千尋）

##### ① 単元名

2分野「植物の世界」 第4章 植物のなかま（東京書籍）

##### ② 単元の目標

身近な植物についての観察・実験を通して、生物の調べ方の基礎を身につけるとともに、植物のからだのつくりとはたらきを理解し、植物の種類やその生活についての認識を深め、生命を尊重し、自然環境を保全しようとする意欲と態度を育てる。

##### ③ 学習指導計画（全18時間）

第1章	花のつくりとはたらき	4時間
第2章	葉のつくりとはたらき	6時間
第3章	根と茎のつくりとはたらき	4時間
第4章	植物のなかま	3時間
		本時1時間目
第5章	種子をつくらない植物のなかま	1時間

##### ④ 指導計画（第4章）

	ねらい	学習活動	評価	その他の留意点
第1時 本時	植物の特徴や違いをとらえ、なかま分けを行う。	植物の特徴や違いをもとに各自なかま分けを行い、その結果を一人ずつ班で発表し、発表原稿をまとめる。	・植物の特徴をとらえ、なかま分けをすることができる。 ・意欲的になかま分けを行い、自分の意見を発表することができる。	なかま分けができない生徒には机間指導を行い、対応する。
第2時	前時の結果を班ごとに発表し、各班の意見の違いをとらえさせ	・前時にまとめたなかま分けを班ごとに発表する。 ・他の班の発表を評価する。	・発表の構成を考え、分かりやすく伝えることができる。 ・他の班の発表を聞き、自	発表後に簡単に補足を行い、違いをとらえやすくする。

	る。		分の班との違いをとらえることができる。	
第3時	正しいなかま分けの結果を理解する。	正しいなかま分けの結果について説明を聞き、ノートをまとめる。	正しいなかま分けを理解し、説明することができる。	間違いが多かったところは詳しく説明する。

### ⑤ 本校研究との関連

これまでに習った植物についての知識をもとに植物のなかま分けを行い、発表をするという過程を通して植物に対する理解を深めるとともに、科学的思考力・判断力の育成を目指す。

### ⑥ 本時の学習（15／18）

ア 本時の目標

- ・植物の特徴をとらえ、違いを説明することができる。
- ・植物の特徴や違いをもとになかま分けを行い、まとめることができる。

イ 本時の展開

	学習活動	指導上の◇留意点と◎支援
導入 (10分)	1 パソコンで提示された12種類の植物の名前を答える。  また、これまでに習った植物の特徴にはどのようなものがあったか発表する。	◇既習事項の確認を行い、なかま分けをするうえでのポイントをおさえる。  [評価] 葉脈の通り方、根の張り方、維管束の並びが、植物のなかま分けの基準となることを説明できる。(知識・理解)
展開 (35分)	2 ノートにそれぞれの植物の特徴を書き込む。  班ごとに12種類の植物の写真やノートにまとめた特徴をもとに、なかま分けを行う。一人ずつノートにまとめた自分の意見を発表し、班の意見をまとめる。  3 発表の原稿をまとめ、発表者と発表補助者を決める。早く終わった班は発表の練習をする。	◎書けない生徒に対しては、もう一度パソコンで写真を見せながら、どんな特徴があるのかを考えさせる。  [評価] 意欲的になかま分けを行い、自分の意見を発表することができる。(関心・意欲・態度)  植物の特徴をとらえ、なかま分けをすることができる。(科学的な思考)  ◇他の人の発表を聞く態度についても指導を行い、意見を尊重する態度を育てる。  ◇分かりやすく伝えるにはどうしたら良いか考えさせ、構成の工夫をさせる。
まとめ (5分)	4 次回に行うなかま分けの結果発表について説明を聞く。	◇他の班の発表を聞く際のポイントを押さえておく。

⑦ 評価

・意欲的になかま分けを行い、自分の意見を発表することができる。

(関心・意欲・態度)

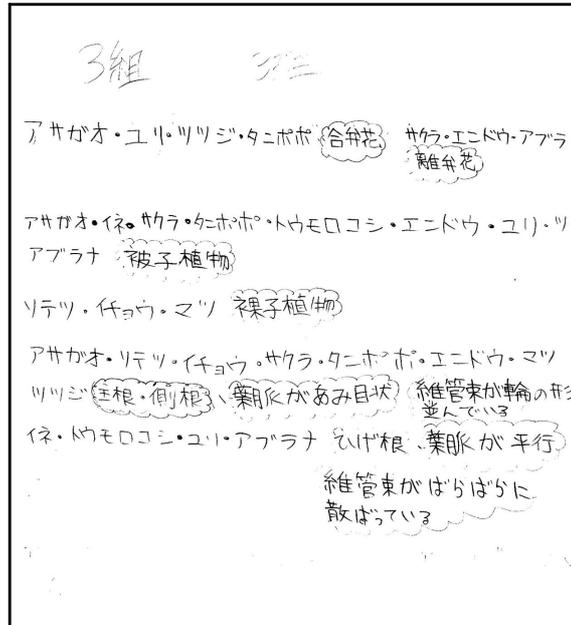
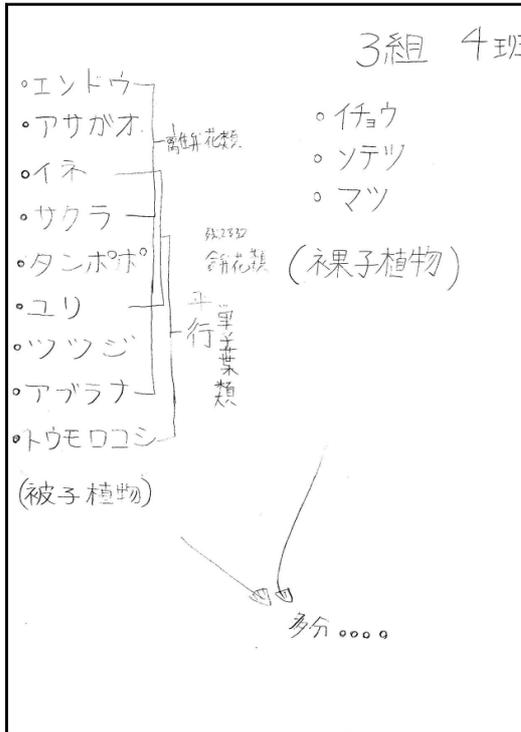
・葉脈の通り方、根の張り方、維管束の並びが、植物のなかま分け基準となることを説明できる。

(知識・理解)

・植物の特徴をとらえ、なかま分けをすることができる。

(科学的な思考)

⑧ 発表用資料



(3) 第3学年理科学習指導案 (指導者 田中 広行)

① 単元名 「エネルギー」 第1章 いろいろなエネルギー (東京書籍)

② 単元の目標

エネルギーに関する観察・実験を通して、エネルギーの基礎について理解するとともに、これらの事象を日常生活と関連付けて科学的な見方や考え方を養い、エネルギーに対する興味・関心を高める。

③ 学習指導計画 (全28時間)

第1章 いろいろなエネルギー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10時間

本時第3時

第2章 化学変化とエネルギー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18時間

④ 指導計画（第1章）

- 第1時・第2時 エネルギーをもっているとはどんなことか
- 第3時～第6時 仕事とは何か
- 第7時 ジェットコースターはどのようにして動いているか（本時）
- 第8時～第10時 いろいろなエネルギーとその移り変わりを調べよう

⑤ 本校研究との関連

振り子の運動が、位置エネルギーと運動エネルギーの両方が移り変わっていくことを実際の運動の様子から考えさせる。

⑥ 本時のねらい（7月14日実施）

力学的エネルギーに関する実験を行い、運動エネルギーと位置エネルギーが相互に移り変わることを見だし、力学的エネルギーの総量が保存されることを理解する。

⑦ 本時の展開

	学習内容及び学習活動	指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・位置エネルギーと運動エネルギーのそれぞれの特徴について復習をする。</li> <li>・振り子の運動を実際に見せ、振り子の運動の特徴を思い出させる。</li> </ul>	長さと振動の速さの関係
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>振り子の運動を実際に見せ、どのようなエネルギーが働いているか考えさせる。</u></li> </ul>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・振り子のおもりの位置ごとの運動エネルギーと位置エネルギーについてまとめる。</li> <li>・振り子の運動と位置エネルギーと運動エネルギー</li> </ul>	特大振り子を利用する。  摩擦力により少しずつエネルギーが減少していくことに触れる。

	<p>一の関係の映像を見せる。</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>振り子の運動の途中で長さが変化した場合どのようなようになるか考えさせる。</u></li> <li>・ 力学的エネルギーの保存についてまとめる。</li> <li>・ ジェットコースターの映像を見せ、実際の運動と関連付ける。</li> </ul>	<p>例示し、全員どれかを選ばせる。(思考力)</p> <p>力学的エネルギーの保存の法則を確認しながら行う。</p>
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 力学的エネルギー以外、いろいろなエネルギーが移り変わっていくことを見せ、2学期の授業の予告とする。</li> </ul>	

#### ⑧ 評価

- ・ 力学的エネルギーが保存されることを説明することができる。(科学的な思考)
- ・ 振り子の運動について、自分の考えをあげることができる。(関心・意欲・態度)

#### 4 本年度の成果と課題

本年度は、主に実践を中心に行ってきた。考えさせる時間を多くとることで、生徒が話し合いをする習慣が付き、意見の発表などが活発に行われるようになってきた。その反面、教員側が授業を的確にコントロールしていかなければ、話し合いの方向性が定まらず、内容が深まらない場合も見られた。発表に際しても、1枚の紙に班でまとめる方法や、パワーポイントを利用して個人でまとめた物を発表するなど、さまざまな技法を教えていったことで、生徒の表現力も向上したと思われる。

ここ数年で、学校に電子黒板、大型テレビの導入など、視聴覚機材が大幅に増加し、今までの授業展開にとどまらず興味・関心をいかに高めていくかの工夫が求められている。また指導要領の改訂に伴い、理科は教科としても実験に際してその取り組みの過程から、結果をまとめていくことを重視する方向に向かっている。新しくイオンなどの内容も追加され、授業時数も大幅に増加することになる。教科として、今後も読解力・思考力・判断力・表現力を高めていくことは、新学習指導要領の趣旨も踏まえ、更に重要になっていくと考えられる。

## 音楽科

### 1 音楽科の研究主題

「豊かな感性を養う指導のあり方」

**判断力**：表現に必要な要素を楽譜や鑑賞から思考判断を行う力を養う。

**表現力**：様々な角度から習得した表現活動を実際に行う力を養う。

**読解力**：楽譜や歌詞、作曲者の言葉や資料から表現に必要な要素を見いだす。

また、言語活動の充実を図り、自己表現につなげる活動を行う。

**基礎基本の定着**：ワークシートの活用により、習得と確認作業の充実を図る。

### 2 昨年度の成果と本年度の課題

判断力・表現力を中心に取り組んだ研究主題であるが、読解（読譜）力を盛り込んだ指導を行った。近年、生徒たちの実態として「耳に頼る傾向」があることは無視できない実態であると考えられる。中学校に入学してきた時点で楽譜の読めない生徒は半数近くいることも事実である。他教科を見ても、教科書を読むことは当たり前の作業であるが、音楽の教科書を読む＝楽譜を読むことは、意外と軽く扱われているように感じる。

また、判断力と表現力については、考える要素を与えることで高めることができていると感じている。授業では、課題を与え、パートごとの練習を通して、考え歌うことを繰り返させることで、自分たちの歌唱表現に変化を感じ、次のステップへ進める流れができていく。このような展開を定着させるには、指導者側の助言が必要不可欠であり、的確な言葉選びと時間配分は指導者側に最も必要とされる力であることを感じた。個別・パート・全体という授業形態も的確に判断しながら行うことが必要であるとも感じている。また、楽譜への書き込みを積極的に行わせる指導を繰り返し行い、書かせることで意識を高めることが可能であることも分かった。

こうした積み重ねにより、新学習指導要領にある「音や音楽への興味・関心を高め、音楽によって生活を明るく豊かなものにし、生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる。」ことにつながると考えている。

本年度は、より高度な合唱曲に挑戦し、パートリーダーの育成に力を注ぎ、楽譜から得られる要素を的確に判断しながら表現する活動をするとともに、歌唱指導だけに限らず、器楽・鑑賞・創作による楽曲への興味・関心を高める指導を心がけ、判断・表現・読解力（読譜力）の向上を目指したい。

音楽科では4つの要素「歌唱・器楽・鑑賞・創作」から共通して学べる内容を意識した授業を展開している。新学習指導要領を考慮し、4要素の連携から学ぶ読解力（読譜力）・判断力・表現力に取り組ませる授業が課題だと考えている。

### 3 本年度の取り組み

実践例 「鑑賞」

- (1) 題材 和声と創意の試み第一集「春」
- (2) 指導計画 第1学年 全2時間扱い
- (3) 設定理由

音楽教育には、歌唱・器楽・創作・鑑賞とあるが、いずれの分野においても共通した学習をすることができると思う。歌唱指導が多くなりやすい学校現場において、鑑賞授業では、音

楽のもつ様々な要素に気付かせるだけでなく、今現在生徒たちが聴いている楽曲につながる要素には歴史があることを理解させ、様々な要素を関連させながら鑑賞し、「聴く力」を養うことで、表現活動の幅が広がることにつながると考えている。

#### (4) 指導目標

- ・ソネットと音楽のつながりを考え、様々な表現を味わわせる。
- ・言語活動の取り組みとして、楽器演奏から得られる表現を言葉に表す。
- ・楽曲構成を理解し、意欲的に鑑賞する姿勢を高める。

#### (5) 展開

	指導内容	研究主題にかかわる指導上の留意点
導 入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鑑賞する姿勢を整える</li> <li>・ワークシートの配布</li> </ul>	○ワークシートの使い方を理解させる。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鑑賞 1               <ol style="list-style-type: none"> <li>①音楽のみ鑑賞させる。</li> <li>②聴こえてくる楽器を考えさせる。</li> </ol> </li> <li>・ソネットの説明               <ol style="list-style-type: none"> <li>①ソネットをワークシートに写させる。</li> <li>②言葉からイメージをもたせる。</li> </ol> </li> <li>・鑑賞 2               <ol style="list-style-type: none"> <li>①ソネットを読みながら鑑賞させる。</li> <li>②ソネットと音楽から得られる表現のつながりを一言感想で記入させる。</li> </ol> </li> <li>・発表               <ol style="list-style-type: none"> <li>①自分の意見を発表させる。</li> </ol> </li> </ul>	<p>○音楽のみで鑑賞することで、楽曲への興味関心を高める。</p> <p>○ソネットにより「春」がどのように表現されているかイメージをもたせる。 【読解力】</p> <p>○ソネットがどのように音楽表現されているかを考え一言感想を記入させる。 【判断力・読解力】</p> <p>○意見交換を行うことで、多くの表現活動に気付かせ共通理解を高める。 【判断力・読解力】</p>
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鑑賞 3</li> <li>・次回の予告</li> </ul>	○まとめた意見を参考に表現の確認を行わせる。

## (6) ワークシート

音楽ワークシート その1

# 鑑賞「春」

～「和声と創意の試み」第一集「四季」から～

♪ 作曲者 \_\_\_\_\_

♪ 活躍した時代 \_\_\_\_\_

♪ ソネットから情景を想像しよう  
～どんな音が聞こえたかな？どんなイメージがわいたかな？～

A \_\_\_\_\_  
一言感想 \_\_\_\_\_

B \_\_\_\_\_  
一言感想 \_\_\_\_\_

C \_\_\_\_\_  
一言感想 \_\_\_\_\_

D \_\_\_\_\_  
一言感想 \_\_\_\_\_

E \_\_\_\_\_  
一言感想 \_\_\_\_\_

年 組 番 氏名 \_\_\_\_\_

音楽ワークシート その2

# 鑑賞「春」

～「和声と創意の試み」第一集「四季」から～

♪ 楽曲について  
この曲は、季節の様子を表現した（ ）と呼ばれる詩に基づいて書かれています。  
演奏形態は、独奏（ ）を中心にして、弦楽器や（ ）を使って演奏されている。自然の様々な音をどのように表現しているかが聴きどころでもある。

♪ 作曲者について  
ヴィヴァルディは、イタリアの（ ）に生まれた。彼が活躍した時代は（ ）時代と呼ばれ、様々な音楽形式が生まれた時代である。ヴィヴァルディは、15歳で修道院に入り、25歳で司祭となった。当時の彼には、あだ名がつけられていて、（ ）の司祭と呼ばれていた。

♪ あなたが一番気に入った場面はどこですか？ソネットを抜き出し、その理由を教えてください。  
ソネットA～Eを記入  
↓  
\_\_\_\_\_

【理由】  
\_\_\_\_\_

♪ 感想 ～作曲家や音楽全体について、感じたことや考えたことを書きましょう～  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

年 組 番 氏名 \_\_\_\_\_

## (7) 考察

### ① ワークシートの活用

- ア 1時間で使用できるよう作成するが継続性をもたせたシートを作成した。
- イ 言語活動を行うにあたり、書かせる幅を段階に応じて増やしていくことで空欄部分が減り、最後には自分の意見を文章化できる生徒が増えた。
- ウ ワークシートの活用により、鑑賞授業に抵抗を感じていた生徒が「考えながら聴く」という姿勢を習得し、「ただ聴く」だけの鑑賞姿勢の生徒が減少した。

### ② 鑑賞手段と言語活動の結びつき

- ア 見せる鑑賞は目的とせず、「聴く」「考える」活動に重点をおいて指導を行った。その結果、①～ウのような状況が生まれただけでなく、映像がなくてもイメージをもったり、表現を演奏から感じ取り、それを言語活動につなげて授業を進めることができた。
- イ 一言感想を書かせる活動では、各ソネットの演奏時間が短いため、連続して鑑賞することがあったが、生徒たちから「もう一度〇〇が聴きたい！」などの声があがるようになり、関心の高さが感じられた。

### ③ 言語活動と表現活動のつながり

- ア 鑑賞で感じ取った表現を言葉で表すことで、漠然としていた表現方法が具体化され表現活動につながる語いが増えた。
- イ 同じ楽器でも、表現の変化を感じ取らせることで、様々なものに変化させることができるということを言葉で確認することができた。

#### 4 今年度の成果と課題

今年度は、実践例として「鑑賞」を取り上げた。音楽活動に必要な表現への取り組みには様々なアプローチが考えられる。実際に歌唱や演奏をしながら学ぶだけの学習では得られない表現活動が創作・鑑賞には多く含まれていると考えている。

今回、ソネット（短い詩）と音楽が一体となった楽曲を題材にし、言語活動への取り組みを含むワークシートを作成した。生徒たちの言語表現は非常に語いが乏しく、文章化するまでに時間がかかる傾向を感じている。今回は、5つのソネットと音楽に含まれた表現を簡単な言葉にすることから始め、その意見をまとめることで自分では見付けられなかった、または気付かなかった表現を言葉で理解することに重点を置いた。一言感想では箇条書きになっても、音楽から得た感想を何とか言葉にしようという積極的な姿勢が高まり、鑑賞する姿勢にも意欲を感じられるようになった。自分の意見をもてたことで発言者も増え、音楽から得られた表現活動を様々な角度から考えることができた。さらに、一言感想から自分の意見をまとめる段階においては、今までなかなか作業に取りかからなかった生徒でも気に入ったソネットに対しての意見を述べられるようになったり、総合的に感想文が書けたりする生徒が増えたことは大きな成果だと感じている。

今後の展開としては、鑑賞から得られた表現活動の学習を自分たちの表現活動に生かす工夫を考えることが課題である。例えば、今まで「クレシェンド」は単純に「だんだん強く」とイメージしていたことが、この鑑賞を通し「だんだん強くしながらはつきりと表現する」や「だんだん強く、特に最後の部分は激しくする」などの表現が増えた。また、音楽用語で示されている表現においては、「クレシェンド」と記載されていても様々な表現を行うことができることを同時に学習することができた。音楽における読解（読譜）力は、一つの用語から複数のイメージを膨らませたり、楽譜から楽曲に見合った表現を用語から思考・判断する力も必要となる。

豊かな感性を養うために必要な学習は、歌唱・器楽・創作・鑑賞から得られるものであり、これらの学習をどのような音楽（表現）活動につなげていくかが大きな課題であり、4つの授業要素を連携させて行う指導の課題でもあると考えている。

## 美術科

### 1 美術科の研究主題

豊かな表現力を導き出す指導法の工夫

- (1) 知識技能の確かな定着を図り、活用し豊かな表現力へと結び付ける。
- (2) 鑑賞活動を充実させることで、読解力の育成を目指す。

### 2 研究の概要

#### (1) 主題設定のねらい

美術という教科の立場から「思考力、判断力、表現力、読解力」を、「自らの思いやイメージを造形作品として形や色に置き換え他の者に伝え、訴えるのに必要なすべての力」ととらえた。それらの力の育成のためには、基礎的な知識、技法を確実に習得させること、それらを活用し自分の力で工夫を加え創造の幅を広げていくことのできる単元、教材を生徒に与えること、創造の過程で自らがじっくりと考えたり見つけ観察したりする時間や振り返る時間や先を見通したりする時間を生徒に与えることなどが必要である。

また、新学習指導要領の改訂では、鑑賞指導の内容やそれに伴う言語活動の充実を求められている。さらに従来の表現、鑑賞という領域に加え、「共通事項」が新設された。

以上のことを踏まえ、どの学年も共通して個々の技能面での個人差が非常に大きい状況の中でいかにして、個に応じた幅広い指導を行い、豊かな表現力、読解力、判断力、思考力の育成にかかわっていけるかを探るために、この研究主題を設定した。

#### (2) 概要

##### ① 知識、技能の定着と活用する力を養う。

新学習指導要領の改訂により、新たに設定された「共通事項」にある指導内容が、美術においての基礎基本ととらえることができる。それは色や形、光、材料などに関する知識や理解でありすべての表現、鑑賞活動の土台として小学校の図画工作から連続して養われていくべきものである。研究主題である基礎基本の定着をこの共通事項の計画的な指導により図っていく。

##### ② 鑑賞指導の工夫を図る。

新学習指導要領のもう一つの大きな改善点に、鑑賞活動の重視がある。

「我が国の美術についての学習を重視し美術文化に関する学習の充実が図られるようにすること。また自分なりの意味や価値を作り出していく学習を重視し、第1学年に作品などに対する思いや考えを説明し合う学習を取り入れ、3年間で説明し合ったり批評し合ったりするなどの言語活動の充実が図られるようにする。」とある。これを踏まえ鑑賞指導の工夫を図ることで、読解力、表現力、思考力の育成を目指したい。

##### ③ 生徒の実態に合わせた表現活動の充実を図る。

美術の表現活動は、視覚化されたものを生み出す活動である。その制作活動の始まりから作品としての完成、その後の鑑賞に至るまでの中のさまざまな段階で、表現力、読解力判断力、思考力を駆使する場面があり最終的にそれらが作品という形になって表現される。生徒の個々の実態に合った指導法の工夫をすることで、それらの力を発揮でき充実した創作活動ができることを目指したい。

#### ④ 評価の工夫

創作活動の中でいかに知識や技能を習得したか、それを生かしアイデアや構想を練ったか、どのような材料や技法を使うかを判断したか、自分の思い、感情、意図を作品に置き換えることができているか、計画的に仕事を進められたか、など作品自体の質、優秀さ、出来、不出来を評価するのではなく、制作の過程を細かく、どのような視点で評価するのかが非常に重要となる。評価のポイント、観点をその都度、生徒に明確に提示し、それを目標として、生徒が努力できるような評価を行うように工夫する。

### 3 20、21年度の取り組みからの考察、課題

- (1) 学年によりクラスの生徒数に差があり、個別指導に当てる時間の格差が大きかった。
- (2) 工芸作品のように基礎的な技能の習得がはっきり確認できる題材では各自が自分の技能レベルに応じた達成目標をたて見通しをもってよく取り組むことができた。
- (3) 各単元、各授業時間毎に、研究主題を踏まえた課題や目標を設定することで、4つの観点に関してより細かい採点、評価へと結びつけることができた。
- (4) より魅力的で応用範囲の広い教材の工夫をする必要がある。
- (5) スパンの指導計画と実際の指導時間にかなりのズレが生じてしまった。鑑賞指導を丁寧に行っているとどうしても時間がかかってしまう。制作する作品の数は少なくなってしまうが、密度の濃いていねいな指導を試みたい。

### 4 22年度の取り組み

- (1) 授業ごとに、その授業での達成目標や課題を必ず提示し、各自のレベルに合わせて取り組ませる。目標や課題は基礎レベルのもの、応用発展させたものを示し、選択できるようにする。
- (2) 基礎コースに該当する生徒への個別指導の時間を多くとるようにする。
- (3) 言葉から形や色のイメージを引き出したり、逆に形や色を言葉で表現したりするなど、言語表現と造形作品とのかかわり合いを密にし鑑賞活動の充実を図る。
- (4) 鑑賞と表現が密接に結び付き互いに影響し合い、表現力や読解力が高められるような題材の工夫をする。
- (5) 他人や自分の作品をよく観察しその特徴や、良い部分を見つけ文章で表現したり、意見を述べあったりできるようにする。

### 5 具体的な実践例

- (1) 題材名   ボックスアートを作りながら日本美術に親しむ   第3学年
- (2) 題材設定の理由

本校の中学生にとって集中的に多くの日本の文化に触れる機会が京都、奈良への修学旅行である。歴史、建築、庭園、仏像、美術工芸品などさまざまなものに接することになる。事前・事後の学習も含めると多くの時間を日本文化の理解に費やしている。この体験をもとに美術の授業では作品制作の過程で日本美術と親しみ遊び、自身の旅の思い出も含めたテーマで作品制作することを考えた。自己の体験と鑑賞と表現を結び付けることで思考力、読解力、表現力、判断力を育成する場面が多く設定できるかと考えた。

- (3) 指導のねらい

- ① 日本美術の大和絵や水墨画が現代のデザインやアニメーションなどにも大きな影響を与えて

いることや日本美術に見られる大胆な色や形を知ること、日本美術に対して新たな視点で興味をもたせる。作品を鑑賞し観察し分析することを通して読解力、思考力を養う。

- ② ボックスアートの構想を練る段階で自分のイメージをいかに視覚化し絵画や立体という多種類の複合造形として表現するかという作業を通して、思考力、判断力、表現力を養う。
- ③ 完成作品を皆で鑑賞し合うことで、自分自身をアピールさせるとともに、他人に対する理解や共感、新たな一面の発見など相互理解を深める機会を作る。

#### (4) 題材の評価基準

##### I 美術への関心・意欲・態度

- ① 日本美術の個性や特徴に関心を持ち、意欲的に自己の作品制作に取り組むことができる。
- ② 自分らしさを表すために独自の表現を工夫しようとすることができる。

##### II 発想や構想の能力

- ① 自分の個性や主張を最もよく引き出し、色や形を通して、生き生きと表現することができる。

##### III 創造的な技能

- ① 基礎的な水彩技法や粘土を使用した彫刻制作の技法が身に付いており、それを活用し自己の制作に生かすことができる。
- ② 鑑賞作品を模写する中で新しい技法や表現手段を習得することができる。

##### IV 鑑賞の能力

- ① 絵巻物、水墨画、障壁画、屏風絵などの日本美術に興味をもち、さらにその創造精神やアイデアが現代のさまざまな分野の芸術に受け継がれていることを理解する。その時代に生きた人々の心情に絵を通して触れる。
- ② いろいろな作品のよさや楽しさを理解し、どのような工夫で自分自身の姿や内面を伝えようとしたのかを味わい感じることができる。
- ③ 自分の作品についての制作意図や主題について説明したり、友達の作品についての洞察、感想を述べることができる。

#### (5) 学習指導計画 10時間

- ① 平安～江戸時代の代表的な日本美術を鑑賞し学ぶ。(1時間)
- ② 自分が作品に活用したい作品の模写を行う。(1時間)
- ③ 作品のテーマ、構成する要素を考え、さまざまなスケッチを積み重ねながら、構想を練り作品の全体像を組み立てる。(2時間)
- ④ 効果的な表現方法を工夫し取り入れて、絵や彫刻など作品を構成する個々の部品を制作する。その後制作した部品を箱の中にまとめ配置して、ボックスアートとして作品を完成させる。(5時間)
- ⑤ 完成した作品を互いに鑑賞し作者の思いや工夫を感じ取ったり、自分の作品についての制作意図や感想を述べる。(1時間)

(6) 学習の展開例 (10時間中の第5～9時間目)

	学習活動	研究主題との関連	評価
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前回までのワークシートや資料と、制作に必要な紙や粘土を準備する。</li> <li>・ 前回までの作業の内容を復習する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 作品の構想がまとまっているか。</li> </ul> <p>(思考力、読解力)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前回までの作業を遅れる事なく終了しているか。</li> </ul> <p>(意欲、関心、態度)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 知識、技術、技法が身に付いているか。</li> </ul> <p>(創造的な技能)</p>
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本時の作業内容を聞く。</li> <li>* 構想図をもとにボックスアートを構成する個々の作品を制作する。</li> <li>・ 箱の側面に京都や奈良をテーマにした絵を描く。</li> <li>・ 粘土を使って自分の像を2体と模写から立体に変化させたものを1体、制作する。</li> <li>* 個々の作品を構想図を参考に箱の中に配置し作品をまとめる。</li> <li>・ 箱の底面に模写した絵を貼る。</li> <li>・ 立体像を配置し固定する。</li> <li>・ 全体のバランスを考え、色や明暗、立体の付け足しや修整を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 積み重ねてきた作業を組み合わせ、自分の作品としてまとめる。</li> </ul> <p>(表現力、思考力、判断力)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の主張、自分と日本美術との関わりを作品の中に転換できたか。</li> </ul> <p>(表現力、読解力)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 進んで作業に取り組む。</li> </ul> <p>(意欲、関心、態度)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 鏡をみてよく観察し、個性的な表情を描くことができる。伸び伸びとした表情豊かな線を描くことができる。アイデアにあふれた背景画を描くことができる。</li> </ul> <p>(発想や構想の能力、創造的な技能)</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 作品を少し離れた場所から眺め、全体の印象をとらえてみる。</li> <li>* 次回の鑑賞についての予告を聞く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作品を見て作業を振り返り、考えを述べることができる。</li> </ul> <p>(思考力・判断力)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 作業の終わりに、自分の作品を鑑賞し顧みることができる。</li> </ul> <p>(鑑賞の能力)</p>

(7) 成果と課題

- ① 鳥獣人物戯画、信貴山縁起、俵屋宗達の風神、雷神図、伴大納言絵巻など生き生きとした人物や動物の躍動的な描線を、見て感じ取り、ペンや筆を使い模写することは、細部までよく観察して見ること、考え読みとることにつながり、作品に対する親近感、時代を越えて人間の感情の共通部分を感じさせることができた。
- ② 模写作品の中に自分自身を描いたり、立体で作ったりすることで、箱の中に個性的な世界を創作させたかったが、作品の全体像を組み立て、構想する力の不足や、立体をイメージして彫刻を作る表現力、技能の不足により作品全体がまとまらず、バランスのとれないものになっていった。この題材のような総合造形作品では確かな見通しをもち構成する力、制作過程での変容、変更に対応できる柔軟な判断力、根気強くじっくりと制作に取り組む態度がより重要である。
- ③ 自分や友達の作品を鑑賞するというこで、素直な感想や意見を多く述べる事ができた。

模写という共通の作品が基であるため互いに意見を述べやすかった。

## 6 研究のまとめと来年度への課題

- (1) 研究主題を意識することで、授業の中で考えさせる機会や、工夫させる機会を増やすことができた。美術の作品制作において完成した作品は授業の結晶として重要なものである。作品の出来映えそのもの自体を評価することも大切であるが、それのみでは、そこに至った過程をも評価することはできない。何を目的として、どういうことを、どんな手順で考えさせたのか、そのために必要な知識、技術をどれだけ習得できたのか、細かい制作の過程で、きちんと観点を定めて評価していく必要がこれまで以上に重要である。評価のバランスを慎重に考慮せねばならない。
- (2) 表現力や読解力が育成されればされるほど、美術では、指導する側の意図したことの範囲内に収まらないさまざまな生徒側の答え（作品という形での）が出てくるであろう。そのような結果を受け止め、さらに新たな課題として生徒に投げ返すことができるような指導ができれば、理想的であると考え。一方的に、何か目新しいことをさせたり、自分だけの価値観で固まった枠の中で生徒を見たりしていたのでは、柔軟な表現力や思考力、読解力を育成することはできない。
- (3) どの力も育成には時間がかかる。じっくりと向き合うには時間的なゆとりや心のゆとりも必要である。しかし現実には美術の授業時間は年間35時間である。文化祭や展覧会などで作品を展示し発表することも大切である。今年度は身に付けさせたい最小限の基礎基本を確実に定着させ、それを活用し个性的に発展させる作品制作に重点を置いた。指導者や制作する生徒の自己満足のみではない作品を制作し、鑑賞する他者をも心豊かにさせ、読解力を刺激し発展させる作品制作を心がけたい。

## 保健体育科

### 1 保健体育科の研究主題

- (1) 身体活動の基礎となる体力の向上及び基礎的技術を育成する。(体育的表現力の育成)
- (2) 資料(映像・文献・記録)などから自己の運動技能の状態を読み取り、自己の課題の解決を図る。(読解力・思考力の育成)
- (3) 技能及び知識を集約し発表する。(表現力、プレゼンテーション能力の育成)

### 2 研究の概要

#### (1) 主題設定のねらい

##### ① 体育分野

###### ア 表現力について

体育実技の授業では、単元として取り上げられている各種目ごとに身に付けるべき技能、動作が設定されている。すなわち、体育実技で求められる要素は、自分の意志により、身体各部を調整して、目的としている動作を成す。そのために身体を動かすということである。自分の身体を使い、目的としている動作をするということは、一つの表現力ととらえることができ、これを体育的表現力と考えた。体育的表現力は、各個人の体力の状況に起因し、体力の優劣により、身体活動に差が生じる。つまり、体力の様々な要因が高められることにより、身体活動がより円滑に行われ、表現力が高まると考える。

###### イ 思考力、読解力について

身体活動を実施する上で、目的とする技能の動きの特性や実践方法、習得のための練習方法などを理解することが大切であるのは言うまでもない。そして、目的とする技能習得のためこれらを知識として習得することは必要なことである。知識として得るためには、学習資料(文献や映像、模範演技)などから必要な点を読みとり、自己に必要な形に変換させ、用いることとなる。また、自己の状態を適切に分析し、自己の課題を見いだして、その課題解決に向けた必要な知識、情報を得る必要がある。そこから、適切な練習方法などを設定し運動を実践していくこととなる。それゆえ、読解力とそれらを分析する思考力などが必要となると考えた。

##### ② 保健分野

保健という教科は多岐にわたっている。それは、他の教科との関連多く見られるからである。理科的な面、社会科的な面、技術家庭科で取り上げられる分野などが総合された一種の総合的教科としてとらえることができる。よって学習の場においては、多岐にわたる分野の中から、必要な情報や知識を的確に習得する必要がある。したがって、多様な資料を分析し、まとめる力が必要となる。そこから読解力及び思考力が必要であると考えた。

また、得られた知識を活用しなければ、知識を習得した意味を失ってしまう。そこで、各自で得られた知識の活用を図るために発表を取り入れることとした。発表は一種の表現力である。よって、その力の育成を図ることとした。

## (2) 概要

### ① 新学習指導要領を踏まえた教科の基礎学力観と生徒の実態と課題

スポーツテストの結果より、近年、中央区生徒の体力レベルが低下が懸念されている。本校の場合も同様である。体力は生きていく上での基盤となるものであり、生涯を通して、培っていかねばならない。とくに青年前期である中学生期は、体力を著しく向上させることができる時期である。生徒一人一人が様々な運動を経験し、自己の状態を知り、自己の体力を高める効果的な方法を身に付けさせることが必要であり、それが体育としての基礎学力となると考える。

### ② 読解力育成の視点と取り組み

技術動作の図解、ビデオなどの映像資料、練習に使用可能な資料などから自己の状態に応じて必要な以下の点を読みとる。それにより読解力の育成を図る。

ア 自己の運動技能の状態を正しく認識し、自己の課題を見いだす。

イ 基礎技術動作における、図解、ビデオなどの映像資料、基礎技術の習得に利用可能な資料を提示し、その中から自己状態の改善、課題の解決に役立つものを取り上げる。

### ③ 思考力・判断力・表現力の育成の視点と取り組み

思考力・判断力・表現力の育成を目指して、学習ノートや授業レポートの活用を図った。学習ノートには実技内容の練習資料などを記載し、全員が同じものを参考できるようにするとともに記録用紙としても活用した。また、自己の映像、模範映像や文献や資料などを用いて、調査・分析活動を通して、自己の課題を見いだす学習を行った。さらに、振り返り学習を通し、自己評価を行うことで、自己の体力の向上に対しての良好な方法など考える、探究する取り組みを行った。これらにより、思考力・判断力の育成を図るとともに、それらと合わせ、体力の向上を図ることで、課題とする技術の習得が容易となり、表現力（体育的表現力）の向上が図られると考えた。

### ④ 評価の工夫

ア 自己評価、他評価を利用する。（評価対象者へのフィードバック）。

イ 発達度（達成度評価）：目標を設定しその達成度を評価する。

### ⑤ 指導法の工夫・改善点（指導形態、指導方法、開発、工夫教材など）。

ア 学習ノート・レポートの活用（振り返り学習、自己の課題発見）

イ 同一技術程度のグループによる学習→同一課題の設定、解決

ウ インターネット利用による、情報収集。必要な情報の分析・まとめ

### ⑥ 新学習指導要領を踏まえた取り組み

体力の向上を重視し、継続的な体づくり運動（トレーニング）を実施

## 3 19、20、21年度の取り組みからの考察、課題

### (1) 取り組み

#### ① 体育分野

ア 基礎技術の測定及び記録を行い、それを分析し、自己の課題（目標設定）を行う。

イ 授業開始時に体力トレーニングと、各自の課題に合わせた基礎技術練習を実施する。

実施に当たっては、場や時間の設定などに工夫が必要となる。

ウ 一定の期間で効果測定を実施、自己の変容を確認し、事後の活動に生かす。また、家

庭で簡単にできる体力トレーニングを考え、実践を進めていく。それにより体力、技術などの向上を図る。

## ② 保健分野

ア グループごとの項目学習および発表の形態を実施する。

イ 映像資料などを用いて、必要な内容を読み取る。理解する。

ウ 分析力、読解力、まとめる力の向上を図る。また、発表を行うことで、プレゼンテーション能力の向上を図る。それぞれが自己の課題に対して取り組むことにより、より深い保健に関する知識などの習得につなげる。

## (2) 考察

前述の取り組みにより思考力・読解力の向上が図られると考えた。体育分野では、自己の状態の把握ができるので、改善方法を見いだすことができ、技術の向上に効果があると考えた。場の設定や、実施時間などに工夫が必要となる。保健分野では、資料映像やインターネットなどを活用し、各自まとめ学習を実施した。これにより、目的としている、分析力、読解力などの向上が図られたと考える。しかし、今後は、調べた内容のまとめ方法などに統一性をもたせ、後の資料として活用が図れるようにしていきたい。

## (3) 課題

自己の課題の改善方法についての練習方法などの知識面の不足、時間的制約、施設用具不足などの問題点が課題としてあげられた。以下に課題をまとめる。

ア 施設、用具の不足などから種目による同様な形式での実施の困難差がある。

イ 生徒数の多さに対して指導者が少ない。それにより個別対応に困難な点が見られる。

ウ 時間的配分が難しい。天候などにより、予定時間が確保できない面があった。

エ 指導形態の工夫（習熟度別グループ編成。グループによる課題学習）

オ 練習場の工夫（指定練習場の設定、時間での実施内容変更）

## 4 平成22年度の取り組み

体育分野では、自己の状態を把握し、個々に改善方法を見だし、実施することができた。個々の練習方法などの知識面の不足、時間的制約、施設用具不足などの問題点は課題として残っているのが現状である。施設用具に関しては、数年をかけ、用具を整備していく。また、グループによる練習など場の設定などで対応していくこととした。

保健分野では、インターネットなどを活用し、各自のまとめ学習を実施した。これにより、目的としている、分析力、読解力などの向上が図られたと考える。また、調べた内容のまとめ方法などに統一性をもたせ、その後の資料として活用が図られるようにもした。さらに、全員への知識の統一を図るため、生徒の発表に合わせて、まとめとしての授業を実施した。

### (1) 体育分野の実践

① 継続的な体力トレーニングの実施による基礎体力の向上を図る。

② 各個人に応じた、練習場、用具を確保する。

③ 授業レポート、学習ノートを活用による振り返り学習を実施する。それにより、自己分析、自己の課題を設定する。

④ 課題解決の為に必要な資料提供を行う。（模範動作映像の提示など）

⑤ 学習ノートを用いて個別ガイダンスを実施し、課題解決のための指導・助言に当てる。

## (2) 保健分野の実践

- ① 調べ学習の成果（獲得知識）を全員に配布し情報の共有を図る。
- ② 時間配分の検討。発表時間、まとめ方を指導する。
- ③ 調査方法の多様化（インターネットの利用など）、幅広い調査方法を実施する。

以上の取り組みにより思考力・読解力の向上が図られると考え、実践を行った。

## 5 具体的な実践例

### (1) 体育分野

#### ① 領域・単元名 体育分野 陸上競技（走り高跳び）

#### ② 単元の指導目標

ア リズミカルな助走から力強く踏み切り、より高いバーを越えたり、競争したりできるようにする。

イ はさみ跳びとベリーロールの跳び方を理解し、自分にあった跳び方はどちらであるかを見付け出し、技能の向上に積極的に取り組む。

ウ ルールやマナーを守り、健康・安全に気を配り、分担した役割を果たそうとする。

エ 特性や成り立ち、技術の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。

#### ③ 研究主題にかかわるポイント（指導上の工夫、授業の特色）

身体活動の基礎となる体力向上及び基礎技術の習得として毎時筋力トレーニングを取り入れながら、資料を活用し基礎基本の理解（読解力）と自己の技能を高める練習の仕方を思考し（思考力）、自己課題解決の取り組み方の工夫（判断力）を身に付けさせていく。

また、自己の運動に対する意識を高め、ポイントを押さえた繰り返し練習や教え合い練習を重ね、不足している力を授業内のトレーニングだけでなく日常生活（家庭）の中に自主練習として取り入れるとより技や技能が向上する（表現力の向上）があることも理解させていく。

#### ④ 単元（題材）観

ア 単元観：陸上競技は、「走る」「跳ぶ」「投げる」などの運動で構成され、記録に挑戦したり相手と競争したりする楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。その中で、走り高跳びは「走る」と「跳ぶ」の融合種目であり、スピードや高さだけを求められるものではない種目であり、より高い技術力を必要とする。特に助走スピードを効率よく上昇する力に変える部分の技術が難しくつまずきになりやすい。また、より高く跳ぶためには踏み切りのタイミング及び方向性が重要になるので資料からのポイントの読み取り及び実践と様々な跳躍練習が必要になる。（新学習指導要領に関連）

イ 生徒観：単級クラスで、常に18人で授業を行っているので教え合いながら協力して目標を達成していく力は高い。お互いに声をかけあい全体で努力し前向きに取り組んでいける。比較的個人運動能力が高い生徒が多いので、苦手な生徒も教えてもらいながら伸びていくことができる。今までに、走り高跳びの授業で、より高く跳ぶための練習は行ってきていないので、基礎動作を中心に技術力を高めさせていく。

ウ 教材観：跳び方のポイントの確認は、教員からの指導とともに資料の実技の本から読み取らせて実践させ、生徒同士でもお互い見て教え合いながら確認していくことで理解

が深まっていく。足を高く振り上げられることは、重要であるので手軽に計測できるように、置いてあるハンドボールゴールの高さを目安に練習できるようにしている。また、学習ノートで授業内の理解確認及び練習内容の確認と反省をさせて、今後の課題設定に役立たせる。

## ⑤ 学習計画

### ア 年間指導計画における位置付け

1学期で、個人練習の仕方や仲間との協力と練習の重要性を理解させていく。2学期に比較的苦手意識の高い長距離走を行い、自己の運動理解と目標達成のための分析力を身に付けさせて、マット運動ではその力と共に自主練習と教え合いの練習の必要性を理解させ実践し目標を達成させていった。この走り高跳びでは昨年度充実した練習を行っていないので、基礎基本動作の理解が重要であるがその他の練習方法などは今までの総合的な内容で実践していけることをねらいとしている。

### イ 単元の指導計画と評価計画

	学習内容・学習活動	学習活動に即した具体的な評価（評価方法）
第1～ 2時 (第2 本時)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・走り高跳びについてのオリエンテーション。</li> <li>・はさみ跳びについての理解。</li> <li>・資料の活用、跳躍力の強化トレーニング、基礎動作の確認。</li> <li>・自主練習や教え合い練習の実践。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習の取り組み方を理解したか。（関）</li> <li>・基本動作を理解し、学習課題の取り組み方を工夫できたか。（思）</li> </ul>
第3～ 4時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ベリーロールについての理解。</li> <li>・資料の活用、跳躍力の強化トレーニング、基礎動作の確認。</li> <li>・自主練習や教え合い練習の実践。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習の取り組み方を理解したか。（関）</li> <li>・基本動作を理解し、学習課題の取り組み方を工夫できたか。（思）</li> </ul>
第5～ 8時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分にあった跳び方を見つけ出す。</li> <li>・自分にあった跳び方でより高いバーを越えられるように練習する。</li> <li>・学習ノートに活動反省や課題を記入する。</li> <li>・記録会を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・練習の仕方やルールを理解している。（知）</li> <li>・基本動作を理解し、学習課題の取り組み方を工夫できたか。（思）</li> <li>・提出し、自分にあった反省や課題が書ける。（関・思）</li> <li>・リズムカルな助走から力強く踏み切り、より高いバーを越えることができる。（技）</li> </ul>

## ⑥ 単元の評価基準

### ア 運動や健康・安全への関心・意欲・態度

目標記録を設定し記録の向上を目指す。練習規則を守り、お互いに協力して練習参加できる。

### イ 運動や健康・安全についての思考・判断

基礎的な知識や技能を活用して、学習課題への取り組み方を工夫できる。

### エ 運動の技能

リズムカルな助走から力強く踏み切り、より高いバーを越えることができる。

### オ 運動や健康・安全についての知識・理解

動作や技術の名称を理解し、練習の仕方やルールを理解している。

⑦ 本時（全8時間中の第2時間目）

ア 本時のねらい

- (ア) 身体活動の基礎となる体力向上及び基礎技術の習得として毎時筋力トレーニングを取り入れ、必要な跳躍力の練習ができる。
- (イ) 資料を活用し、基礎基本動作の理解と自己の技能を高める練習の取り組みの工夫ができる。
- (ウ) 自分に適した自主練習及び教え合い練習ができる。

イ. 本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準（評価方法）
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・号令、出席確認</li> <li>・本時の活動内容を確認する</li> <li>・ランニング、体操、筋力トレーニング</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・顔色等、健康状態を把握する。</li> <li>・本時の課題を把握させ、活動内容を確認させる。</li> <li>・練習規則を守って行えているか確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・練習規則を守って体力向上トレーニングができる。（体育的表現力）</li> </ul>
展開 30分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支柱やマットの準備を安全に行う。</li> <li>・自分に必要な跳躍力練習の自主練習（5分間）</li> <li>・はさみ跳びの練習を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安全に気を配り、分担した役割を行わせる。</li> <li>・四種類の練習方法から、どの練習が自分に必要なのかを考えて練習の時間配分を考える。</li> <li>・三種類の高さを設定し自分に適した高さで練習する。</li> <li>・一番低い高さでも上手く跳べない場合には、予備のバーで低い高さを設定し自主練習を行わせる。</li> <li>・それぞれに気付いた点をアドバイスし合い、練習をおこなう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・四種類の練習方法から、どの練習が自分に必要なのか考える。（思）</li> <li>・自分にあつた高さを理解し、練習方法を見付け出すことができる。（思・判）</li> <li>・友達の跳び方をみて、アドバイスを出することができる。（読・思）</li> </ul>
まとめ 10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・片付け</li> <li>・練習の反省・確認</li> <li>・あいさつ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安全に気を配り、分担した役割を行わせる</li> <li>・はさみ跳びでバーを落としてしまひやすい原因（振り上げ足・踏切足）や対処法（目標物に対してより高く足を上げる練習）を考えさせ確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・練習の仕方や失敗の原因を理解しているか。（知・判）</li> </ul>

ウ 考察

- (ア) 身体活動の基礎となる体力向上及び基礎技術（体育的表現力の育成）について毎授業時に筋力トレーニングを取り入れ行っている。そして、このトレーニングを授業だけでなく家庭生活や日常生活に取り入れていくと基礎技術の上達がより早まることを実践している生徒を見ることにより、その努力をする生徒が増えていき、応用した動きにも積極的に練習するようになっていく。
- (イ) 資料（映像・文献・記録）などから自己の状態を読みとり、自己の課題の解決を図

る（読解力・思考力の育成）ことについて

資料の実技の本から基礎基本動作の理解と自己の技能を高める練習の取り組み方を、読み取らせて実践させ、生徒同士でもお互いに見て教え合いながら確認していくことで理解が深まっていく。

### (3) 保健分野

#### ① 領域・単元名 保健分野 「健康と環境」

#### ② 単元の指導目標

ア 体には環境に対して、ある程度まで適応能力があること及び快適で能率のよい生活を送るためには、温度、湿度、明るさを一定の範囲にする必要があることを理解する。

イ 飲料水や空気は、健康と密接な関係があることから、衛生的な基準に適合するよう管理する必要があることを理解する。

エ 人間の活動によって生じた廃棄物は、衛生的に、また、環境の保全に十分配慮し、環境を汚染しないように処理する必要があることを理解する。

#### ③ 研究主題に関わるのポイント（本授業の研究に関する取り組み・目的）

ア 各個人による項目学習および発表の形態を実施する。

イ 分析力、読解力、まとめる力の向上を図る。

ウ 発表をおこなうことで、プレゼンテーション能力（表現力）の向上を図る。

エ それぞれが自己の課題に対して取り組むことにより、より深く保健に関する知識などの習得につなげる。

#### ④ 単元（題材）観

人間は環境に取り囲まれて生活している。その環境を構成する要因は、生物学的要因、社会的環境要因、物理・科学的環境要因など多岐にわたっているが、人間が健康に生活する上で様々な環境に対し適応していかなければならない。そのためにある程度の能力が備わっているということを理解するとともに、環境をより良い状態に保つための方策を考え、自ら率先して取り組んでいけるように指導していく。

#### ⑤ 学習計画（学習過程と学習内容）

##### ア 学習準備、調査活動（1・2時間目）

###### (ア) 導入及び準備

(i) 「健康と環境」の学習項目から一つを選択し、事前学習（調べ学習）を実施し、まとめる。（学習内容は共有する。）

(ii) 提出レポートは拡大し、発表時の掲示物として使用する。

(iii) 教科書、資料、インターネットを使用する。

(iv) 学習ノート活用し、学習内容、習得必要知識の共通化を図る。

##### イ 授業展開、教師による一斉指導授業形式による実施（3時間目）

本時間の指導内容は、健康と環境の単元の導入部分にあたる。次時以降に実施する内容を織り込み、きっかけとする。また、人は環境に適応して生きているということ及びその生活する環境を整えることの意義の理解を図るために一斉指導形式で実施する。

時間	学習項目	学習内容
3時	環境の変化に体はどう対応するか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・環境の要因の解説とその保持の大切さ。</li> <li>・体には、環境の変化に応じて、諸器官を働かせてその変化に対応する能力があること。(恒常性の維持、内分泌系の働き) 例示・明るさ、温度の条件</li> <li>・適応能力には限界があり、その限界を超えると健康に重大な影響が表れること。(熱中症、凍傷)</li> </ul>

#### ウ 授業展開、生徒の発表を取り入れた学習(4時間目以降)

- (ア) 担当者の課題に対する発表をする。(表現力の育成)
- (イ) 関係資料(動画、文章資料)を提示する。それらの資料から必要事項を読み取る。(思考力・読解力の育成)
- (ウ) 発表を聞き、関係資料を見聞し、学習ノートに記入する。(読解力の養成)
- (エ) 今回の学習項目についてまとめをする。
- (オ) 学習ノートの補足資料などを用いて、記載内容を解説する。
- (カ) 発展学習として、各項目に関連する内容を指導する。(補足・発展指導)

時間	学習項目	学習内容
4 ~ 9	快適な環境の条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・暑さ、寒さの感じ方には、主に気温、湿度、気流が関係しており、気温には人間の活動にとって至適範囲があること。</li> <li>・学習や作業をするときには、その種類に応じた適切な明るさが必要であること。</li> </ul>
	部屋の空気をきれいに	<ul style="list-style-type: none"> <li>・二酸化炭素は人体の呼吸や物質の燃焼によって発生すること、二酸化炭素濃度が一定以上になった場合には換気をする必要があること。</li> <li>・一酸化炭素は物質の不完全燃焼によって発生し、吸入すると一酸化炭素中毒を起こすこと、そのために許容濃度が決められていること。</li> </ul>
	水と私たちの生活	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水は人間の生命維持や健康、生活上で重要な役割を果たしていること。</li> <li>・飲料水の水質には、一定の基準が設けられており、水道施設を設けて衛生的な水を確保しているが、近年では水源の汚染や水の使用量の増加などによって水の確保に問題が生じていること。</li> </ul>
	し尿・生活排水の処理	人間の生活に伴って生じる尿や生活排水は、衛生的にかつ自然環境を汚染しないように処理されなければならない。処理を巡っては様々な問題があること。
	ごみの処理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人間の生活に伴って生じるごみは、衛生的にかつ自然環境を汚染しないように処理されなければならない。しかし、処理を巡っては様々な問題があること。</li> <li>・ごみ問題を解決のために、リサイクルに協力するなど、個人行動も重要であること。</li> </ul>
	環境の汚染と保全	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本では、急激な産業の発展の中で、大量の汚染物質が出された結果、公害による被害が全国各地で問題になったこと。また、現在ではさまざまな環境問題が起こっており、生活や健康に悪影響をもたらすことが予想されること。</li> <li>・化学物質の中に健康に悪影響を及ぼす物があり、社会問題も起こっていること。</li> </ul>

	・現在では環境保全のためのさまざまな取り組みが行われているが、個人が環境を重視した行動を実践していくことも重要であること。
--	---------------------------------------------------------------

## ⑥ 単元の評価基準

### ア 運動や健康・安全への関心・意欲・態度

健康と環境とのかかわりについて、的確にとらえようとし、自分や仲間の生活を振り返りながら、積極的に課題解決のために調査や発表を行うことができる。

### イ 運動や健康・安全についての思考・判断

健康と環境について、自分や仲間の生活などを振り返り、積極的に問題点を見付け、自分なりの解決方法を考え出すことができる。

### エ 運動や健康・安全についての知識・理解

(ア) 環境の変化に対する身体の適応能力について理解している。

(イ) 健康に密接にかかわる空気や飲料水の条件、生活に伴って生じる廃棄物の適切な処理などについての的確に把握し、具体的に説明できる。

(エ) 環境汚染の現状と保全の重要性を理解し、環境を守る活動を実践することができる。

### オ 研究に関連して

(ア) 資料(映像・文献・記録)などから自己の状態を読み取り、必要な知識をまとめる。

(読解力・思考力の育成)

(イ) 調べた事項を用いてレポートにまとめることができる。(思考力、知識の習得)

(ウ) 内容を構成し発表する。(表現力、プレゼンテーション能力の育成)

## ⑦ 本時、全9時間中 6時間目 **ごみの処理**

### ア **本時のねらい**

人間の生活に伴って生じるごみは、衛生的にかつ自然環境を汚染しないように処理されなければならない。しかし、処理を巡っては様々な問題があることを把握し、ごみ問題の解決のために、リサイクルに協力するなど、個人行動も重要であることを理解する。

### イ **指導観**

#### (ア) 生徒観

明るく元気ある生徒が多い、それゆえ発言も多いなど活発な活動が見られる。学級の雰囲気は明るく、和気藹々としている。保健の学習内容に興味・関心が高い生徒が多いが、苦手な感じをもつ生徒もいる。自分の身体や生活に密着した学習内容が多いので、自己の健康の保持、増進を考えていく上でも、確かな知識を身に付けさせたい。

#### (イ) 教材観

(i) 現在の生活は、大量生産、大量消費の生活である。それ故、多くの物がゴミとして捨てられているという現状を理解する。

(ii) 個人課題として、調べ学習を行った生徒の作成資料を全員で共有するとともに、「クイズで学ぶごみ怪獣から町を救え」東京23区清掃一部事務組合HPを用いて、ゴミ処理の内容の理解を図るとともに、ゴミ処理の現状を把握する。

(iii) ポスターを見て、現在のゴミ問題を考える。また、ゴミには多くの資源が使われていることを理解し、その再利用を考える。

(iv) リサイクルマークを見て、どのような物がリサイクルとして扱われているかを理

解し、個人のレベルからの3R運動の推進を行えるように考える。

### ウ 本時の学習活動

	学習内容	学習活動・教師の働きかけ	研究主題に関わる留意点
導入 5分	本時の学習について知る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習項目の提示。教科書を開く。</li> <li>・ごみについての興味を促す。</li> <li>・収集されるゴミの画像を提示する。</li> <li>・ごみに関する学習を行うことを示す。</li> <li>・ごみの学習ノートを配布する。</li> </ul>	
展開 37分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習ノート</li> <li>・パワーポイントを見ながら、必要な点を記入する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごみとは何か、ごみの種類、ごみの量など現状に関する学習をおこなう。</li> <li>・<u>担当生徒①</u>、教科書を読む</li> </ul> <p>「ごみの処理」の項目の調べ学習の発表及び感想を述べる。</p>	→課題に対する発表を実施する。(表現力の育成)
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表・感想を聞く。</li> </ul>		→発表者の話を聞き、必要な情報を得る(読解力、分析力の育成)
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごみの処理に関する問題(映像)を見て、学習する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「クイズで学ぶごみ怪獣から町を救え」(東京23区清掃一部事務組合HP)を使用し、可燃ごみ、不燃ごみ、粗大ごみの処理について学習する。</li> <li>・クイズ1問に対して1人が答える。</li> <li>・解答の確認、解説映像を見て必要内容をメモする。</li> <li>・分かったことを記入(まとめ)</li> <li>・出題されなかった問題の解答を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>→問題を考える(思考力)</li> <li>→問題の映像などを見て、解答を考えることで、読解力、分析力の育成を図る。また、ごみの処理方法の知識理解を深める。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表・感想を聞く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>担当生徒②</u>、教科書を読む</li> </ul> <p>「ごみの減量とリサイクル」の項目の調べ学習の発表及び感想を述べる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>→課題に対する発表を行う。(表現力の育成)</li> <li>→発表者の話を聞き、必要な情報を得る。(読解力、分析力の育成)</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごみ問題ポスターを見て考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表者の内容を踏まえてごみ問題に係るポスター画像を見る。</li> <li>・このポスターにはどのような意味があるかを考え、現在のごみの問題を把握する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>→問題を考える。(思考力)</li> <li>→問題の把握を確認。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習ノート</li> <li>・リサイクルマークの映像</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・数人に発表させる。</li> <li>・学習ノートの参考文章からごみに関する問題を把握する。</li> <li>・学習ノートを用いリサイクルについての学習を深める。</li> <li>・リサイクルマークを提示し、多くの物にリサイクルが行われていることを理解する。</li> </ul>	→補足説明を実施しながら学習ノートに記入していく。
まとめ 3分	まとめ	・授業で分かったこと、自分の感想を記入する。	・理解したこと、自分の思い、考えを記入させる。

### ⑧ 本時の評価

- ア 課題の内容を把握し、発表ができ、まとめが行えたか。[運動や健康・安全への関心・意欲・態度（表現力）]
- イ 発表や問題、画像などを用いて、要点を整理することができたか。[運動や健康・安全についての思考・判断（読解力、思考力、分析力、まとめる力）]
- ウ 本時のねらいを理解することができたか。[運動や健康・安全についての知識・理解（学習ノートの記入）]

## 6 研究のまとめと今後の課題

### (1) 体育分野

- ア 映像などを用い、自分自身の体力や技術の現状を実際に見ることで、自己の課題が明確にすることができた。運動に関するの興味関心が高まり、それにより練習などに対する取り組みが意欲的となる変化が見られた。
- イ 自己の運動技能状態等を検討し、学習レポートを制作することで課題を見いだすことができ、読解力、思考力の向上につながった。
- ウ 継続した体力作りを実施することで、基礎体力の向上につながり、各種の運動技能の向上に役立った。（体育的表現力の向上）
- エ 各実施種目に対する、有効な練習方法などを調査し、提示できるよう、指導者側が学習をしていく必要がある。
- オ 生徒の個々現状を記録し、処方資料とする運動カルテを作成し活用を図る。

### (2) 保健分野

- ア 生徒自身が自ら発表し、発問する場があるので、より保健分野の内容に関して、興味関心の度合いが深まった。
- イ 課題に対しての調査やまとめをおこなうことで、より課題に精通することができた。また、まとめ・発表することにより表現力の向上に役立った。
- エ 全体での統一した知識としての習得を図るため、単元ごとのまとめ学習の必要性がある。

## 技術・家庭（家庭分野）科

### 1 技術・家庭（家庭分野）科の研究主題

「自立した生活者の育成」～消費者教育・体験的学習に視点を当てた授業を中心に～

- (1) 自分なりの考えをもち、合理的、論理的な思考ができる。
- (2) さまざまな情報の内容を読解し処理する。これらをもとに判断、決定し、主体的に行動できる実践力を育てる。
- (3) 体験的な活動を通し、考えを整理し主体的に行動できる実践力を育てる。

### 2 昨年度の成果と本年度の課題

#### (1) 昨年度の成果

##### ① 昨年度の研究内容

各学年各領域で「消費者教育」として指導できる内容があるが、生活の自立と衣食住の中の「食品の表示」と家族と家庭生活の「商品の選択」「消費者の自覚」に内容を絞って次の点について研究を進めた。

- ・指導法の工夫（企業の立場になって考えたオリジナルお菓子のパッケージの製作、KJ法的学习）

##### ② 昨年度の成果

ア オリジナルお菓子のパッケージの製作と表示の読みとり

1年商品の表示の学習で実物のパッケージの表示内容を分析し、実際に企業側（製造者）の立場になって「お菓子のパッケージ」を製作した。企業側の考えや気持ちを理解し、また消費者の気持ちをつかむ商品パッケージの製作を通し、消費者の一人としてとしてどの点を注意したらよいかなどを考えさせた。これらの学習を通して表示の内容や意味を、消費者としての適切な態度などを身近にとらえ、学習を深めることができた。

イ KJ法的学习と学習形態の工夫（実践例2）

生徒からとった「商品購入の失敗経験」についてのアンケートを基に、その内容を①消費者に問題がある②商品に問題がある③販売店や製造者に問題がある、の3つに分類させた。その際付せんを使ってKJ法的学习を試みた。初めに全体で意見を出し合い、それをグループごとに話し合っ分て分類し、全体に発表する。という流れで実施した。22～23の意見を分類したが、生徒が迷うものもあり、時間がかかった。分類したものに見出しを付けるところまでグループで行い、その後ワークシートによる振り返り学習を行った。今回は生活班の6人班で実施したが人数が多すぎて積極的に参加できない生徒もいた。そこでグループの人数を4人とし、司会、記録、その他という役割を決めて活動が活発でスムーズに進行できるようにした。またグループで相談する用紙も生徒が分類しやすいように改良した。

昨年度の授業では、生徒がアンケートをみて気付いたことを発表させたが、様々な意見が多く、上の3つに分類できないような意見もあり、迷う場面（思考する場面）が多くあった。特に「食べ物を買ったら賞味期限切れだった」という意見には、

「賞味期限を見ないで買った消費者が悪い」という意見と「賞味期限切れの商品を販売している店が悪い」という対立した2つの意見が出た。それについて次々に意見が出され、予想以上に議論が活発化し、深まった。これは初めに自由に考え、様々な意見が出された結果、簡単に分類できなかったために、逆に生徒の思考が深まったと考えられる。

## ② 今年度の課題

本研究を通し授業を組み立てる中で、生徒が思考する場面はたくさんあるということに改めて実感した。昨年度は消費者教育を中心に読み取る場面、思考する場面、判断する場面、表現する場面を設定した。本来、実技を伴う教科であるため、様々な作品作り・実習でも意図的にそれぞれの場面を設定することが大切である。今までは、作品を完成させることに終始してしまいがちであった。もちろんこれは大切なことではあるが、作業や実習を通して、思考力・判断力の育成を図る授業を工夫する必要があると感じた。そこで、今年度は昨年度実施した消費者教育の内容をさらに改善すると共に、体験的学習を取り入れた内容についても思考力・判断力そして表現力の育成をはかる授業の工夫を試みることにした。

## 3 本年度の取り組み

### 実践例 1

- (1) 題材 「食品の表示」
- (2) 実施学年 第1学年
- (3) 指導計画 3 / 5 (第4スパン)
- (4) 学習の流れと指導のポイント (実物見本の分析と企業側の立場の理解)

お菓子のパッケージから表示の内容を分析し、その意味を考え、実際に自分が企業側(製造者)の気持ちになってお菓子のパッケージを製作する。

### (5) 本時の目標

- ・実物見本を分析できる。(読解力、思考力)
- ・商品についている表示の内容と意味を理解する。(思考力)

### (6) 展開

	指導内容	研究主題に関わる指導上の留意点
導入	お菓子を選ぶポイントを考え、発表させるできるだけ多くの意見を発表させる。	・様々な意見を聞き自分の考えを深める。(読解力)
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お菓子の実物パッケージを見てどのような表示があるか調べる。</li> <li>①表の表示内容は何か</li> <li>②裏面の表示内容は何か</li> <li>・表に記載されている内容と裏の表示内容の違いに気付かせる。</li> <li>・どの商品も同じ内容ではなく、対象者を意識した表示になっていることに気付かせる。</li> <li>*表：対象者を意識した内容になっている ネーミング、字体文字の大きさ、色遣い、アピールすることなど</li> <li>裏：品質表示、製造者の情報など 必ず表示しなければならない表示と表示した方がよいものがあることに</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実物見本からどのような表示が必要なのか読みとる。(思考力、読解力)</li> <li>・商品によってパッケージのデザインや表示の内容が違う理由を考えさせる。(思考力)</li> </ul>

	気付かせる。	
ま と め	<b>商品についている表示の意味を考えさせる。</b> ・表示は商品の情報であり、その内容は消費者にとっても生産者にとっても必要な内容であることに気付かせる。 次回から自分でオリジナルのパッケージを作ることを意識させ、身の回りのパッケージを調べさせる。	気付いたことを自分の言葉で発表させる。(表現力)

### (7) 評価

- ・実物見本を調べ表示の内容を分析することができたか。(技能)
- ・商品についている表示の内容と意味を理解することができたか。(知識・理解)

### 実践例 2

(1) 題 材 「幼児とのふれあい」

(2) 実施学年 第3学年

(3) 指導計画 1 / 4 (第5スパン)

(4) 学習の流れと指導のポイント (体験的学習を通し思考力を高める学習)

幼児体験 (疑似体験) を通し、幼児の体や行動の特徴を理解し、今後の保育体験学習に生かす。

(5) 本時の目標

- ・幼児の疑似体験をし幼児の体や行動の特徴を理解する。(思考力)
- ・幼児体験を通し、幼児とのかかわる時の配慮や、適した環境などについて考える。(思考力・判断力)
- ・体験を通して分かったこと、考えたことを分かりやすくまとめ、発表する。(表現力)
- ・幼児とのかかわり (保育体験学習) をイメージして具体的に取るべき行動を考える。(思考力)

(6) 展開

	指導内容	研究主題に関わる指導上の留意点
導 入	<b>幼児体験の目的を知る</b> ・3歳くらいの幼児の手先の動きと5歳くらいの視野の体験をすることを確認する。	
展 開	<b>幼児体験 (疑似体験) をさせる</b> ①手先の動き 軍手を利き手の反対の手に2枚重ねてはめ、ワークシートに沿って体験させる。 ②視野の体験 (チャイルドビジョン) 幼児視野体験めがねを使い、子どもの目の高さで、幼児の視野を体験させる。(教室の中を自由に動いて良いことを伝える。)	・幼児の疑似体験をし学習に興味を持ち意欲的に取り組む。 ・幼児の体の特徴を考える。(思考力) ○ 視野が狭い ○ 指先の細かい動きができない など
	<b>ワークシートを記入させる</b> ・それぞれ体験し、感想を記入させる。 ・どのようなことを感じたか発表させる。	・ワークシートに記入したことを簡潔に分かりやすくまとめ発表する。(思考力・表現力)
ま と め	<b>幼児の立場に立った接し方を考えさせる</b> ・幼児と接する時に配慮することや幼児が使いやすい道具などについて体験を基に	・幼児との接し方や適切な用具などについて考える。(思考力) ・ワークシートにまとめる。(表現力)

<p>考えさせ、ワークシートにまとめさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保育体験学習をイメージし具体的な行動を考えさせる。</li> </ul>	<p>後日実施する保育体験学習を想定して具体的に、適切な行動を考えることができる。（思考力・判断力）</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------

#### (7) 評価

- ・幼児の疑似体験をし幼児の体や行動の特徴を理解できたか。（知識・理解）
- ・幼児体験を通し、幼児と関わる時の配慮や、適した環境などについて考えることができたか。（生活の技能）
- ・体験を通して分かったこと、考えたことをわかりやすくまとめ、発表できたか。

### 4 今年度の成果と課題

#### (1) 考察・まとめ

##### ① 実物見本を提示し、表示を読み取る学習。お菓子のパッケージの製作。

この授業では、まず普段見慣れているお菓子の実物見本を多数提示し自由に手にとって確認させた。普段見慣れているものであると同時に、お菓子のパッケージであるためどの生徒も大変意欲的に授業に参加し、活発に意見を発表することができた。表に記載されている表示と裏に記載されている表示の違いや、表の表示は消費者に購入させるための工夫がなされていること、裏の表示はその商品の情報が記載されていることなどを読み取り、その必要性や意味を考えることができた。

次時より実施したパッケージの製作では、企業側の立場に立って商品をいかに消費者に購入してもらうかを考える事から始めた。生徒にとっては、普段は消費者として商品を選ぶ立場であるが、そのときの選択する条件（決め手）を冷静に考えさせ、企業側としてその気持ちを組み込んだ、そして対象者（ターゲット）を意識したパッケージを作ることができた。

##### ② 体験的活動を通し、思考力を高める学習

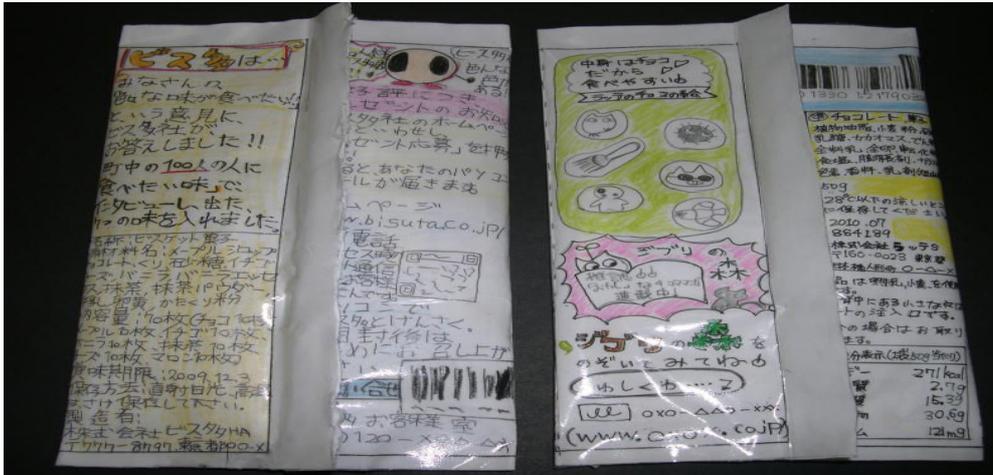
今回の授業のように幼児体験をするという内容は、生徒にとっては大変インパクトのある活動で、大変意欲的に楽しく授業に参加することができた。幼児期は自分が過去に通過した時期であるにもかかわらずほとんどその特徴を理解しておらず、さらに興味をもって学習しようとしめない内容でもある。実際に疑似体験をすることにより、動かしにくい、歩きにくいという幼児の特徴を体感し、配慮すべきことや適切な行動への思考がスムーズにでき、表面的にとらえるのではなくより具体的に思考を深めることができた。

#### (2) 今後の課題

技術・家庭科のねらいは、自分の生活に関心をもち、よりよく生活しようとする能力や態度を育てることである。当然、学習の内容は生活に密着しており、多岐にわたっている。そのような中で教師主導型の授業では生徒になかなか定着しない。小さな、しかも適切なヒントを与え、それを自分で考え解明させ、さらに自分の生活に置き換えて考えさせる課題解決型の授業が、教科の目標を実現するためには重要であると改めて実感した。もちろん知識として指導する必要がある部分もあるが、できるだけ多くの領域で、意図的に思考する・自分なりに判断する、再考するという場面を多く取

り入れた授業展開を実施していきたい。

## 生徒の作品 (思考力・表現力)



### 【生徒のワークシート】

保育ワークシート4

3年 組 ( )

#### 幼児体験をしてみよう

\* 3歳の幼児にになってみよう (左手を2枚の紙と反対の手にはめてみよう)

1. 絵筆で線をひいてみよう、できたら色も塗って仕上げてみよう



2. 筆を使ってみよう

つかんだもの1

花

感想 大き、バツ、フツツして  
とりにくかった。

つかんだもの2

大豆

感想 指がちゃんと動かなくて  
はしがうまくかえな  
か。

つかんだもの3

小豆

感想 はし、が、くっつかなく  
て、小豆の大きさを  
えいげなげなげな  
た。

3. チャイルドビジョン (幼児視覚体験のがね)

どんな感じでしたか (気づいたこと)

視野がせまくて、右左は、頭をラジコがせないと  
見えなかつた。上下

4. 幼児体験で分かったことから、幼児とふれあう時に工夫(援助)できることを考えてみよう

(1) 室内では

1mくらいだ、たら、ちよと顔

どうしてそう考えた?

チャイルドビジョンで

くさの所、机の角がある

肘がまた高さかき

あかぬと思、た。それ、所、

くさした、た

気がつか

(2) 外では

同じの境、環をちゃんと見て

視野がせまいの、

から、ぼせ、る。ホールなど後

横でも後でも見えにく

るから、飛んでく、外、気、つ、

か、た、から、

(3) 用具や遊び道具など

あんまり、ま、か、い、もの、を、渡、

手の動きがうまく行

ない。

か、ない、こと、が、多、か、

に、ま、り、せ、す、い、大、き、さ、の、物、を、渡、

から、

す。

5. 全体を通して感じたこと

子供は大人には見つからない物をよくみつけれ

ると思、う。視野がせまくて、低い、ため、危、険、が、多、い、

6. 今日の授業を振り返って

・幼児体験を積極的に行いましたか

・幼児の特徴が分かりましたか

・幼児の立場に立った話し方を考えた

できた

まあまあ

もう少し

○

○

○

# 第2分科会報告

～学習意欲を引き出す評価の工夫～



## 第2分科会報告

第2分科会では、昨年度に引き続き、主に年間指導計画の検討、成績処理・成績通知・通知表等の評価システムの改善、インフォームドコンセントに基づいた学習面談のための教科情報の集約方法等について検討を行っている。昨年度までに内容の検討はほぼ終わり、継続して実施しているものがほとんどである。昨年度の課題を基に、今年度は工夫や改善を行った。

### 1 昨年度の課題

#### (1) 年間指導計画

学習指導要領の改訂に伴った内容の検討  
学習のシラバスとの関係の重視

#### (2) 通知表

第5スパンの後での通知の仕方  
行動の記録についての検証

#### (3) 学習面談

夏季休業中以外での面談の取り方  
対象生徒の絞り込み方法  
学習相談カルテの効果

### 2 本年度の取り組み

#### (1) 年間指導計画の工夫

年間を6スパンに分けた年間指導計画は、全教科で昨年度の書式を利用して新学習指導要領の移行措置を踏まえた内容に変更した。少人数指導（単純分割・習熟度別）・一斉授業という3つの授業形態それぞれにおいて、基礎コース（評価基準Bを目標とする）と標準・発展コース（評価基準Aを目標とする）の2コースで作成した。また支援を必要とする生徒への手だてと、「読解力・思考力・表現力・判断力」を授業のどの場面で行っていくかについても内容を再検討した。生徒並びに保護者への「学習のシラバス」としては、年間計画の基礎コースを利用し、そこに各観点ごとの学習の取り組み方・評価の仕方を加えた「学習の手引き」（冊子）を配布した。

#### (2) 成績処理・成績通知・通知表等の評価システムの工夫と改善

通知表や指導要録など校務にかかわる事務の簡素化をするための市販ソフト「スクールマスター」を導入してから本年度で7年目ということもあり、職員も操作に習熟してきている。

昨年度から、学期末の通知の際には行動の記録を載せるようにした。内容については、学校全体で取り組んでいることや「きまりを守って生活することができる」、「係・委員会・当番活動しっかりとできる」など、各学年ごとに特に家庭で知っておいてほしいことを中心に現在の状況を知らせることとし、6項目まで設定できるようにした。本年度は各学年ともに4項目の内容について家庭に通知している。夏季休業中の学習面談では、学習面だけでなく行動の記録からも話し合いを深める場合もあった。記入に際しても、例えば

提出物などのチェックやアンケートを実施したり、できるだけ客観性をもたせた記録をつけていったりするような配慮を行った。

昨年度からの課題としてあった第5スパン後の成績通知であるが、本年度も実施しない方向で進めている。スパンの区切りとしては今後も残していくが、定期考査等の評価の場面が少ないことや、第4スパン後の学習面談からの期間が短いこと、面談週間のための時間確保が難しいことなどを考慮してのことである。

### (3) 学習面談の実施と学習相談カルテ

生徒・保護者・担任の三者で、現在の学力・学習状況、家庭学習の状況などを確認し、学力向上に向けてそれぞれの対応が必要なことを確認した上で、今後の学習への取り組みの方法・手立てを確認していく、いわゆるインフォームドコンセントの手法を用いた学習面談を行っている。実施時期・方法としては、1学期中間考査後、2学期中間考査後、冬季・春季休業中は該当者のみの面談、夏季休業中は全員との面談を実施した。昨年度からは、年間計画作成の時点から、行事等との関連を見越した学習面談期間を設定し、定期考査の時間割を変更するなど時数を確保するための工夫を行い、6時間目の授業の時間を学習面談のための時間として確保するようにした。また、定期考査後2週間後から面談を実施するように計画し、それに合わせて計画的に観点別評価、保護者への連絡・調整を行うようにした。行事との関係から、面談日を連続してとることができない場合もあるが、対象生徒の選択等、昨年度よりも円滑に行うことができるようになった。

「学習相談カルテ」については、クラス替えにより、前年度の担任や担当教員が記入したものを資料として、面談を進めることができた。記入については、担任の負担も大きく新たな方法で実施できないか検討を行っている。

平成22年9月から本区では、各学校でのネットワークシステムが再編成され、データを区で一括して管理するようになった。全教員一人一人に端末が配備され、職員室内の校内LANにより、同じデータを共有・供覧できるようになった。個人情報のセキュリティに十分留意しつつ、各生徒についての情報を学習面だけでなく、生活面、その他についても随時入力でき、確認することができる。このことは、学習面談の対象生徒の資料を作成していく点で大きな利便性があると考えており、今後、校内で新しいシステムを構築していくことを考えている。

## 2 今後の取り組み

研究としては、本年度でとりあえず終了することになるが、新学習指導要領の本実施を2年後に控え、現在各教科で移行措置の取り組みが毎年少しずつ行われている。また、各観点の評価についても新たに變更されていくことになる。そのための取り組みは、研究と関係なく今後続けていかなければならない。年間指導計画についてのさらなる變更、年間総授業時数の變更による授業時間の確保のために、学習面談を今後どのように行っていくか。新しいネットワークシステムと、本校で行っている評価システムをどう統合していくか。解決が必要な課題は、今後も増えていくことが予想される。今後も引き続き、検討を行っていく予定である。

# 第3分科会報告

## ～学業指導の充実～

平成22年度

1学期用

生活と学習のサプリノート



中央区立日本橋中学校

年 組 番

名前

## 第3分科会報告

### I 生活と学習のサブリノートの活用

#### 1 生活と学習のサブリノートの取り組みについて

この取り組みを始めるにあたって、以下の二つの点を検討した。

一つ目は、基礎学力の定着には、家庭学習の充実が必要不可欠であるという点である。家庭で行う学習内容としては、復習及び予習ということになるであろうが、学校で学習してきた学習内容を着実に身に付けさせるためには、振り返り学習及び反復学習である復習と、次回学習のために予備知識などを習得し、学習に対する準備性（レディネス）を高めることで、学校での学習活動を円滑にすることができる予習が重要な位置を占める。復習及び予習を行う場の中心となるのは家庭である。また、規則正しい生活習慣を身に付けることは適切な学習時間の確保につながり、そのことが、学力を高めることにつながると考える。

二点目は、生徒理解に関する点である。子どもは成長する過程において、保護者の干渉を嫌い、保護者との距離を置き、会話もなかなかしなくなるような傾向も見られる。そのことによって、保護者はわが子の学校での状況を把握することが難しくなってくる。また、教員も、生徒の家庭での状況は把握しづらい。学校及び保護者の双方で生徒の学習及び生活状況を見合うことができれば、生徒の規則正しい生活作りを助け、学力の向上を図ることができると考える。

以上の二点から、家庭（保護者）と学校、生徒との連携を図り、家庭学習の充実を図るために、本校では、平成19年度から「生活と学習のサブリノート（※以下サブリノートと記す。）」の活用を行うことにした。

#### 2 生活と学習のサブリノートの記載内容と活用方法

##### (1) サブリノートの内容

- ① **学習の記録**：次の時間の学習内容、課題を記録し、学習の準備性の向上と振り返り学習の資料とする。家庭学習状況を記録させ、生徒の学習状況を把握する。
- ② **一日の生活記録**：一日の活動を振り返り、反省や感想を記入させる。また、悩みごとや学校（先生）への質問などを記入させる。その記録を基に、教員・保護者が生徒の一日の様子を確認する。また、教員と生徒・保護者間でコメントをやり取りすることで生徒理解を図る。
- ③ **週末の記録**：学校外での生徒の生活の様子を確認する。
- ④ **保護者のコメント欄**：保護者からの意見、感想などを記入してもらう。学校との連絡にも利用できる。
- ⑤ **長期休業中の生活記録**：夏季、冬季、春季休業中の生活記録、学習記録を行う。
- ⑥ **読書の記録**：朝読書の時間及び日常での読書記録に利用する。

##### (2) 活用の仕方

毎日の終学活の時間に、次の日の予定（時間割等）、課題、学習内容を記入させる。帰宅後、家庭において、家庭での学習内容、今日一日の様子を記入させ、翌日の朝学活時に提出させる。教員（担任）が確認、コメント等を記入して返却するという方法をとる。

保護者の欄は一週間に一度、週末等に記入してもらうという方法をとった。

※サプリノートの記入欄の実物は、図-1をご参照いただきたい。

図-1 生活と学習のサプリノート

( 29 ) 週 今週の計画と記録

今週の目標

11月30日(月)	時	教科	教科の持ち物・宿題	家庭学習	時間	教科と内容
2	国語		のり、はさみ、整灯	~		
3	理科		コンパス、色ペン	~		
4	数学			~		
5	美術		▽習字セット			
6	総合					
生活の記録	理科と国語の点数が下がったので、復習しました。バカなミスもいくつかあったので残念です。入試当日はひかいたミスもなるべくには練習していきたいです。あと、少し数学の進度が遅い気がしたので、来週入試模試で、全範囲の問題に出るの少し大丈夫です。					

一度やるといって余りがあるのやめようとおもっています。

12月1日(火)	時	教科	教科の持ち物・宿題	家庭学習	時間	教科と内容
2	英語		Speaking test!	~		
3	技家		とらてきまて!	~		
4	体育		テスト	~		
5	学活		▽			
6						
生活の記録	今日は寒かったけれど、部活が遅くなったので、変更してました。明日もレッスンがあるので頑張りたいです。					

とらてきまて!

今、一番の人は誰か

しんじつにがんばります

## 2 生活と学習のサプリノートの記載内容と活用方法

### (1) 提出状況における、過去の調査との比較

サプリノート利用状況を調べるために、提出状況を調査した。その方法として過去に行った調査と今年度の調査の結果を比較検討する。

表1-1「提出状況について①」は、平成20年10月に実施した調査結果である。

表1-2「提出状況について②」は、平成21年10月に実施した調査結果である。

表1-3「提出状況について③」は、平成22年7月に実施した調査結果である。

表1-1 「提出状況について②」(平成20年度)

学 年	良 い	良くない	調査対象数
3 年 生	65.9%	34.1%	82人
2 年 生	40.8%	59.2%	103人
1 年 生	71.4%	28.6%	105人
全 体	59.0%	41.0%	290人

表1-2 「提出状況について③」(平成21年度)

学 年	良 い	良くない	調査対象数
3 年 生	66.1%	33.9%	112人
2 年 生	84.5%	15.5%	97人
1 年 生	87.2%	13.8%	94人
全 体	78.5%	21.5%	303人

表1-3 「提出状況について④」(平成22年度)

学 年	良 い	良くない	調査対象数
3 年 生	89.4%	10.6%	104人
2 年 生	94.2%	5.8%	104人
1 年 生	88.6%	11.4%	140人
全 体	90.5%	9.5%	348

全体の提出状況の年度ごとの変化でみていくと、平成20年度は59.0%、21年度は78.5%、本年度の調査では90.5%の提出率である。年を重ねるごとに提出率の向上がみられる。

学年ごとの変化では、2年生から3年生に学年が上がる時に、大きく変化をしていることが分かる。平成20年度は65.9%であったが、21年度は66.1%、本年度は89.4%と伸びてきている。このことから、サプリノートの活用が4年目を迎え、その取り組みが全体に浸透し、教員個々の理解なども深まることによって、現在、本校の教育活動における基幹となるものになったと考えられる。

また、今年度の調査結果で「提出状況が良くない」としている生徒も、提出ができない理由として「生活記録の欄の記入を忘れたため」、「提出することを忘れた」などをあげている。つまり、利用しているが、提出することを忘れてしまうという理由が多くみられるということである。さらに、付け加えるならば今回、平成22年度の調査は7月に実施し

た調査である。「提出状況が良くない」としている理由として、「部活や塾などの活動が忙しい」「時間がなくて記入できない」などをあげている。この時期、部活動によっては、試合を控え活動が多く行われている場合もあり、それぞれの生活環境の差が結果に表れていると推測できる。

しかし、理由の中には前回の調査同様、「必要性を感じない」「めんどくさい」などの理由から利用をしていない生徒もいることは事実である。それらの生徒に対して、サブノートの有効性を示し、活用を指導していくことが今後とも必要である。

以下の項目に関しては、平成21年度と平成22年度との調査結果を比較する。

## (2) 生徒の利用内容

表2-1 「サブノートの利用状況」(平成21年度)

項目	3年	2年	1年	全体
持ち物チェック	74.1%	47.4%	53.2%	59.1%
予定の記入・確認	40.2%	25.8%	31.9%	33.0%
宿題・課題などの確認	50.0%	37.1%	41.5%	43.2%
次回授業内容の確認	49.1%	25.8%	40.4%	38.9%
学習状況の記録	17.9%	18.6%	10.6%	15.8%
調査対象人数	112人	97人	94人	303人

表2-2 「サブノートの利用状況」(平成22年度)

項目	3年	2年	1年	全体
持ち物チェック	58.7%	50.0%	39.9%	48.5%
予定の記入・確認	34.9%	33.6%	27.7%	31.6%
宿題・課題などの確認	45.9%	24.5%	40.5%	37.3%
次回授業内容の確認	28.4%	27.3%	33.1%	30.0%
学習状況の記録	29.4%	11.8%	18.2%	19.6%
調査対象人数	104人	104人	140人	348

生徒がどのようにこのサブノートを利用しているかの調査を実施した。回答は、複数回答となっている。結果は、以下の表2に示してある。

表2-1は平成21年度の結果で、表2-2は平成22年度の結果である。

このノートの中心となっている、生活の記録に係る事項は除き、他の利用状況について回答が得られたものを示すことにする。

結果から分かるように、「持ち物チェック」が平成21年度59.1%。平成22年度48.5%と多数を占めている。

その他として、「予定の記入・確認」、「宿題・課題などの確認」、「次回授業内容の確認」など、学習に関する確認や予定の確認など学習及び学校生活に対しての準備に関して用いられることが多いことが分かる。

また、「(家庭での)学習状況の記録」が平成21年度15.8%、平成22年度が19.6%と伸びた点が注目される。

サブノートの活用が多様化してきており、学習の準備に関する内容から、学習内容を

記録し、以後の学習に生かしていくという利用方法が行れるようになったことが分かる。

### (3) 保護者の利用について

生徒の主な生活の場は家庭である。生徒の生活状況、学習状況を良い方向にもっていくためには、家庭との連携なくしてはあり得ない。その改善を目指して活用を始めたサプリノートの実践は、保護者の協力も求めることをねらいとしている。

このノートを通し、保護者が生徒の学校での様子、学習状況を把握することにより、生徒に対する認識を深め、子どもに対する働きかけがより良いものとなることができると考えられる。また、学校側も保護者との連携をより図ることができ、学校では分からない生徒の様子の変化や、保護者の考えなどを理解することができる。

#### ① 保護者の確認状況

表3-1は「保護者のサプリノートを確認（点検）状況」及び表3-2、は「生徒がサプリノートを記入をしているのを認識している保護者の割合」の結果である。

表 3 - 1 「保護者のサプリノートを確認（点検）状況」

学 年		確認している	確認していない	調査対象数
3 年 生	平成 2 1 年度	5 4 . 3 %	4 5 . 7 %	8 0 人
	平成 2 2 年度	9 0 . 0 %	1 0 . 0 %	5 0 人
2 年 生	平成 2 1 年度	8 4 . 6 %	1 5 . 4 %	5 2 人
	平成 2 2 年度	7 9 . 5 %	2 0 . 5 %	4 4 人
1 年 生	平成 2 1 年度	7 7 . 3 %	2 2 . 7 %	6 4 人
	平成 2 2 年度	8 5 . 3 %	1 4 . 7 %	7 5 人
全 体	平成 2 1 年度	6 9 . 8 %	3 0 . 2 %	1 9 6 人
	平成 2 2 年度	8 5 . 2 %	1 4 . 8 %	1 6 9 人

表 3 - 2 「生徒がサプリノートを記入をしているのを認識している保護者の割合」

学 年		確認している	確認していない	わからない	調査対象数
3 年 生	平成 2 1 年度	5 8 . 5 %	2 5 . 0 %	1 6 . 5 %	8 2 人
	平成 2 2 年度	7 4 . 0 %	2 2 . 4 %	4 . 1 %	5 0 人
2 年 生	平成 2 1 年度	8 2 . 7 %	3 . 8 %	1 3 . 5 %	5 2 人
	平成 2 2 年度	9 3 . 2 %	0 . 0 %	6 . 8 %	4 4 人
1 年 生	平成 2 1 年度	8 4 . 4 %	4 . 7 %	1 0 . 9 %	6 4 人
	平成 2 2 年度	8 8 . 0 %	9 . 3 %	2 . 7 %	7 5 人
全 体	平成 2 1 年度	7 3 . 5 %	1 2 . 8 %	1 3 . 7 %	1 9 6 人
	平成 2 2 年度	8 5 . 2 %	1 0 . 7 %	4 . 1 %	1 6 3 人

平成21年度より平成22年度の方が割合が増加し、サプリノートを保護者が確認していると回答した生徒は、平成21年度は69.8%であったが、平成22年度は85.2%となった。

また、生徒がサプリノートを記入していると認識している保護者は平成21年度73.5%であったが、平成22年度は85.2%と高い割合が得られ、生徒の認識と同じ割合が得られた。

本校では、保護者に対して、4月の入学当初のガイダンス時にサプリノートを提示し、

その取り組みに関して協力を依頼している。年数を経過したことで、サブリノートの取り組みは、保護者の理解を得て確実に根付いてきていると考えられる。

## ② 保護者に見せない生徒の割合

表4は、「自分の子供はサブリノートを見せているか」及び表5は、「サブリノートを保護者に見せているか」の調査結果である。

**表4 「自分の子供はサブリノートを見せているか」(保護者回答)**

学 年		見せる	見せない	調査対象数
3年生	平成21年度	54.3%	45.7%	81人
	平成22年度	86.0%	14.0%	50人
2年生	平成21年度	84.5%	15.5%	52人
	平成22年度	71.7%	28.3%	46人
1年生	平成21年度	79.6%	20.4%	64人
	平成22年度	71.1%	28.9%	76人
全 体	平成21年度	59.1%	40.9%	197人
	平成22年度	75.6%	24.4%	172人

**表5 「サブリノートを保護者に見せているか」(生徒回答)**

学 年		見せる	見せていない	調査対象数
3年生	平成21年度	48.2%	51.8%	112人
	平成22年度	54.8%	45.2%	104人
2年生	平成21年度	76.2%	23.8%	97人
	平成22年度	48.1%	51.9%	104人
1年生	平成21年度	56.3%	43.7%	94人
	平成22年度	56.8%	43.2%	139人
全 体	平成21年度	59.7%	40.3%	303人
	平成22年度	53.6%	46.4%	348人

上記の結果から、生徒が「サブリノートを見せない」と回答している保護者の割合は平成21年度は40.9%。平成22年度24.4%となった。

「保護者にサブリノートを見せていない」生徒の割合は平成21年度で40.3%、平成22年度は46.4%となり、生徒、保護者とも昨年度・本年度も同様な回答得られた。生徒が保護者に見せない理由としてあげられるのは、「面倒くさい」、「見せるのを忘れる」、「親が忙しい、時間がない」という意見や、「保護者に見られたくない」、「見せる必要がない」などである。学年が上がり、生活環境が変化するに従いこの状態は増えていく傾向がある。

「サブリノートを保護者に見せていない」と回答している3年生は、平成21年度は半数以上の51.8%、平成22年度は45.2%の生徒と割合が減少した。しかし、平成22年度は1・2年生の割合が増えている。だが、2年生は昨年度とほぼ同じ割合を示しており、新入学時より、保護者に自分の書いた物などを見せることに抵抗のある生徒が増加している傾向

があると言える。これは、心の成長という側面である青年前期の特徴の一つであることは否めない。また生活面での安定というものも寄与しているのではないかと考えられる。さらに、女子生徒よりも男子生徒がこの傾向が強い。

### ③ 保護者記入欄について

サプリノートには、一週間に一度、保護者にコメントを記入してもらう欄を設けている。その利用状況が、表6「保護者の記入欄を利用状況」である。

これにより、平成21年度は全体の62.2%、平成22年度は75.0%の保護者がその欄に記入をしていることが分かる。年度が上がるごとにその割合が増加しており、その対象は、学校及び生徒本人に対してがもっとも多く、内容も「子供の家庭での様子（週末のこと）」「学校への依頼（先生への連絡・質問）」「子供へのメッセージ（励まし）」が多かった。このように幅広い利用がおこなわれている。

表6 「保護者の記入欄の利用状況」

学 年		利用している	利用していない	調査対象数
3年生	平成21年度	47.5%	52.5%	60人
	平成22年度	82.0%	18.0%	50人
2年生	平成21年度	78.8%	21.2%	52人
	平成22年度	69.6%	30.4%	46人
1年生	平成21年度	67.2%	32.8%	64人
	平成22年度	73.7%	26.3%	76人
全 体	平成21年度	62.2%	37.2%	197人
	平成22年度	75.0%	25.0%	172人

### 3 利用による効果（※提出を利用していると判断する）

#### (1) 学習関係提出物の状況

表7 「学習関係提出物の状況」

学習関係提出物		提出が良い	提出が良くない	調査対象数
サプリノート利用				
サプリノート提出（利用） 状況が良い	平成21年度	66.0%	12.5%	232人
	平成22年度	77.0%	12.6%	312人
サプリノート提出（利用） 状況が良くない	平成21年度	10.6%	10.9%	57人
	平成22年度	5.2%	5.2%	36人
全 体	平成21年度	76.6%	23.4%	303人
	平成22年度	82.2%	17.8%	348人

表7は、「学習関係提出物の状況」である。

表7から、学習関係提出物が良い者の全体の割合（サプリノートの提出（利用）状況関係を加味しない場合）は、平成21年度は76.6%、平成22年度は82.2%であった。また、

学習関係提出物が良くない生徒は平成21年度は23.4%であり、平成22年度は17.8%という結果が得られた。

この学習関係提出物の状況が良い生徒の平成21年度76.6%の内、10.6%はサプリノートの提出状況（利用）が良くない生徒であり、平成22年度では、82.2%の内、5.2%がサプリノート提出（利用）状況が良くない生徒であった。ちなみにサプリノートの提出（利用）状況が良い生徒は77.0%である。

さらに、学習関係提出物が良くない生徒の平成21年度23.4%の内、12.5%は、サプリノートの提出（利用）状況が良い生徒であり、良くない生徒は10.9%で、平成22年度では17.8%の内、12.5%は、サプリノートの提出（利用）状況が良い生徒であり、サプリノートの提出（利用）状況が良くない生徒は5.2%であった。

このことから、学習関係提出物の状況が良い生徒のほとんどにサプリノートの利用があり、良くない生徒の半数にサプリノートの利用がなかった点に注目できる。また、年度変化において学習提出物の状況に良い変化がみられている。

## (2) 学習関係以外の提出物の状況

表8は、「学習関係以外の提出物の状況」である。

表8より、全体（サプリノートの提出（利用）状況を関係を加味しない場合）の割合では、学習関係以外の提出物が良い生徒は、平成21年度が78.6%、平成22年度が85.4%であり、良くない生徒は平成21年度が21.4%、平成22年度が14.6%である。

学習関係以外の提出物の状況が良い生徒の平成21年度78.6%の内、10.9%はサプリノートの提出（利用）状況が良くない生徒であり、平成22年度85.4%の内、4.0%はサプリノートの提出（利用）状況が良くない生徒である。

この結果は、学習関係提出物の状況と同様な割合であり、良い場合のほとんどの生徒にサプリノートの利用が認められ、良くない生徒の半数にサプリノートの利用がないことが分かった。また、年度の変化も同様であった。

表8 「学習関係以外の提出物の状況」

学習関係以外提出物		提出が良い	提出が良くない	調査対象数
サプリノート提出				
サプリノート提出（利用） 状況が良い	平成21年度	67.7%	11.5%	246人
	平成22年度	81.4%	8.3%	312人
サプリノート提出（利用） 状況が良くない	平成21年度	10.9%	9.9%	57人
	平成22年度	4.0%	6.3%	36人
全 体	平成21年度	78.6%	21.4%	303人
	平成22年度	85.4%	14.6%	348人

## (3) 学習状況について（授業への取り組み姿勢）

表9「学習状況について（授業への取り組み姿勢）」から、全体（サプリノートの提出（利用）状況を関係なくみた場合）では、学習状況が良い生徒は、平成21年度81.2%であり、良くない生徒は18.2%であった。平成22年度は、良い生徒が86.5%であり、良くない生徒は13.5%であった。学習状況が良い生徒の平成21年度81.2%の内、13.6%は、サプ

リノートの提出（利用）状況が良くない生徒であり、学習状況が良い生徒は、67.7%である。また、学習状況が良くない生徒18.8%の内、サプリノートの提出（利用）状況が良い生徒は10.9%であり、その差は7.9%であった。平成22年度は、学習状況が良い生徒の86.5%の内、5.7%は、サプリノートの提出（利用）状況が良くない生徒であり、良い生徒は、80.8%である。また、学習状況が良くない生徒13.5%の内、サプリノートの提出（利用）状況が良い生徒は8.9%であり、その差は4.6%であった。この結果、授業への取り組みの姿勢においても、提出物の状況と同様な割合が得られた。

平成21・22年度とも、学習状況がよくなった理由としては「計画的に集中できるようになった」、「気持ちの変化」、「テストにからみ学習するようになった」、「受験対策のため」、「危機感がでてきた」、「成績を意識」などがあげられた。また、「サプリノートで学習時間を確認できる様になった」という意見もあがっている。

また、学習状況が悪くなった理由として、「他の活動で時間がない」、「疲れからめんどろくさくなった」が多くあがっている。年度変化を見ると全体的学習状況が良いという生徒の割合が増え、学習状況が悪くなったと回答した生徒のサプリノートの利用の割合も増加している。

表9 「学習状況について（授業への取り組み姿勢）」

学習状況		学習状況が 良い	学習状況が 良くない	調査対象数
サプリノート利用				
サプリノート提出（利用） 状況が良い	平成21年度	67.7%	10.9%	246人
	平成22年度	80.8%	8.9%	312人
サプリノート提出（利用） 状況が良くない	平成21年度	13.5%	7.9%	57人
	平成22年度	5.7%	4.6%	36人
全 体	平成21年度	81.2%	18.8%	303人
	平成22年度	86.5%	13.5%	348人

#### (4) 生活状況について（規則正しい生活）

表10「生活状況について」より、全体（サプリノートの提出（利用）状況を関係なくみた場合）では、学習状況が良い生徒は平成21年度72.3%、平成22年度は76.3%であり、良くない生徒は平成21年度27.7%、平成22年度23.5%であった。

平成21年度の生活状況が良い生徒の72.3%の内、14.8%は、サプリノートの提出（利用）状況が良くない生徒であり、良い生徒は57.5%である。

平成22年度は、生活状況が良い生徒76.3%の内、5.1%は、サプリノートの提出（利用）状況が良くない生徒であり、良い生徒は71.3%になった。この割合は、昨年度よりも増加している。

生活状況が良くない生徒の平成21年度27.7%の内、21.5%はサプリノートの提出（利用）状況が良い生徒であり、サプリノートの提出（利用）状況が良くない生徒は6.2%であった。

平成22年度は、23.5%の内、18.4%はサプリノートの提出（利用）状況が良い生徒であ

り、サプリノートの提出（利用）状況が良くない生徒は5.1%であった。よって、サプリノートの利用状況が良い生徒は、生活状況も良好であるということが分かる。さらに平成22年度の方が割合が減少していることが分かった。

平成21・22年度とも、サプリノートの利用状況が良く、生活状況が良くないと回答した生徒の理由として、「学習のため」、「睡眠時間にばらつきがある」などがあげられた。

表10 「生活状況について（規則正しい生活をとれているか）」

学習状況		学習状況が 良い	学習状況が 良くない	調査対象数
サプリノート利用				
サプリノート提出（利用） 状況が良い	平成21年度	57.4%	21.1%	246人
	平成22年度	71.3%	18.4%	312人
サプリノート提出（利用） 状況が良くない	平成21年度	14.9%	6.6%	57人
	平成22年度	5.1%	5.1%	36人
全 体	平成21年度	72.3%	27.7%	303人
	平成22年度	76.3%	23.5%	348人

(5) 保護者からみた効果

表11 「サプリノートの利用による効果」（保護者）

学 年		効果があった	とくになし	調査対象数
3年生	平成21年度	50.0%	50.0%	80人
	平成22年度	78.0%	22.0%	50人
2年生	平成21年度	78.8%	21.2%	52人
	平成22年度	80.4%	19.6%	46人
1年生	平成21年度	79.7%	20.3%	64人
	平成22年度	86.8%	13.2%	76人
全 体	平成21年度	67.3%	32.7%	196人
	平成22年度	82.6%	17.4%	172人

表11「サプリノートの利用による効果」から、サプリノートの利用により、子どもに対して何らかの効果があつたとしている保護者は、平成21年67.3%、平成22年度は82.6%に上っている。

その内容として、「子どもの様子（学校の様子）が分かる」、「先生の考え方が分かる」、「先生とのコミュニケーションがとれる」、「子どもへの助言が良い」、「子どもの考えが分かる」、「親子の話し合いのきっかけとなっている」、「習慣化することで規則正しい生活に寄与した」などの回答が得られた。

平成21・22年度とも、この中でも多かったのは、「子どもの様子（学校の様子）がわかる」であり、平成21年度では全回答の49.7%、平成22年度42.6%になっている。また、「先生の考え方が分かる。先生と（子供・保護者）コミュニケーションとれる」が平成21年度29.8%、平成22年度21.6%であり、コミュニケーションの増大による良好な関係作りという点で効果としてあげられる。また、平成22年度は「子どもの考えが分かる」が10.0%と

割合が伸びている。

#### (6) 教員側からみた効果

「忘れ物の状況」「提出物の状況」「学習状況」「生活状況」において、教員から見た生徒の状況を調査した。内容は生徒の状況の観察調査であるが、サプリノートの提出の割合が低い生徒は、四項目ともあまり良い状況といえない結果が得られている。

表 1 2 「教員からみた生徒の状況」

サプリノート提出	忘れ物	提出物	学習	生活
サプリノート提出（利用） 状況が良い	○	○	○	○
サプリノート提出（利用） 状況が良くない	×	×	△	△

※○・・・良好である。 △・・・良い面・悪い面あり。 ×・・・状況が良くない。

サプリノートの提出状況（利用）が良い生徒は学力的に高い傾向が見られる。サプリノートの提出（利用）状況が良くない生徒の中にも、成績良好な生徒も見られるが、少数であり、伸び悩みの教科などがある、作文などの文章を書くのが苦手な生徒も見られるという結果が得られた。また、提出の忘れなども多く見られる。生活状況に関しては一概に良くないとは断定できないが、比較的遅刻などが多い結果が得られている。また、4項目で良好な状態にある生徒はサプリノートの保護者欄の利用の割合が比較的多いことが分かった。

#### 4 生活の記録欄の利用

##### (1) 効果について

##### ① 生徒の場合

表 1 3 「生活記録欄の利用による効果（生徒）」全体割合

項 目	2 1 年 度	2 2 年 度
その日を振り返ることができる。	8 1 . 9 %	7 6 . 0 %
先生とのコミュニケーションがとれる。	5 . 3 %	7 . 9 %
質問（悩み）などを記入することができて便利	4 . 3 %	3 . 3 %
文章作成の力の向上につながる。国語力がつく。	4 . 1 %	6 . 3 %
継続をすることで力がつく（習慣作り）	1 . 8 %	4 . 9 %
その他	2 . 6 %	1 . 6 %
調査対象人数（有効回答）	1 7 1	2 9 1

生活の記録欄の利用による効果を考えた場合の結果が表13である。

平成21年度は、一番多い回答は、「その日を振り返ることができる」で全体の81.9%で、次に「先生とのコミュニケーションがとれる」5.3%であった。それ以外の回答としては、「継続をすることで力がつく」「文章作成の力の向上につながる」「質問（悩み）などを記入することができて便利」などがあつた。

平成22年度は、「その日を振り返ることができる」が76.0%と減少したが、他の項目の「先生とのコミュニケーションがとれる」7.9%、「継続をすることで力がつく」4.9%「文章作成の力の向上につながる。国語力がつく」6.3%とそれぞれの項目で割合が増加している。生活記録の欄が日記という役割から、さまざまな役割へと変化していることが分かった。

効果の一つであげられた「先生とのコミュニケーションがとれる」という点は、生活記録欄の利用の効果のという調査では、回答数はすくなくかったが、サプリノートの利用で先生との関係に言及し調査をした。その結果が表14である。

表14 「サプリノートの利用による先生との関係」

学 年		良くなった	変化なし	悪くなった	調査対象数
3年生	平成21年度	50.0%	50.0%	50.0%	80人
	平成22年度	46.2%	53.8%	0.0%	104人
2年生	平成21年度	78.8%	21.2%	21.2%	52人
	平成22年度	23.1%	76.9%	0.0%	104人
1年生	平成21年度	79.7%	20.3%	20.3%	64人
	平成22年度	47.9%	51.1%	0.1%	140人
全 体	平成21年度	32.7%	66.0%	1.3%	196人
	平成22年度	39.9%	59.8%	0.3%	348人

## ② 保護者の場合

先生との関係に「変化なし」という回答をする生徒が平成21年度は66.0%、平成22年度は59.8%と多数を占めている。「変化なし」と回答した生徒でも、現在の教員との関係が良好と回答した生徒が多くいることは確かである。この傾向は学年が上がるほど多くなっている。

注目する点は、先生との関係が「よくなった」と回答した生徒が、平成21年度は全体の割合で32.7%、平成22年度は39.9%と増えたことである。両年とも理由は同じものが上がっており、「日記に関してきちんとコメントをくれた」、「先生からのコメントが楽しみ」、「サプリノートから話題が出る様になり、話が続く」、「会話が增えた」、「家で自分のことを知ってもらえる」などコミュニケーションの増加により相互の関係改善が図れたという理由が述べられている。

サプリノートを用い、文字を通してであるが、会話の機会が増え、人と人とのつながりがより強く結ばれ、関係が良くなったことは大きな成果であり、教員と生徒の良好な関係が学校での生活、学習活動に良い効果を醸し出していると考えられる。

## ② 保護者の場合

前述のサプリノートの利用の効果に記したが、保護者の多くは、教員側と生徒の生活記録欄でのコメントのやりとりによる良好なコミュニケーションについて効果があるという回答が得ている。そのやりとりから、学校側の対応や教員の指導姿勢などが分かる、また、生徒自身の考え方、学校の様子が把握することができるとしている。

この結果は、平成22年度も同様であり、サプリノートを見ていると回答した保護者から

このような意見が多くあげられている。

### ③ 教員の場合

サプリノートの活用の利点として、教員側からの意見は以下のようなものである。「生徒の気持ちが素直に書いてあり、友人関係を知ることができた」、「日頃の生徒の様子分かる」、「保護者を含め理解が深まる」、「生徒の気持ちを把握することができる」、「コメントに関して返事をくれる、コミュニケーションがとれるようになった」、「学校外での様子分かる」などがあげられた。

生活記録欄の利用により、生徒とのコミュニケーションの幅が増大し、良い関係作りができ、生徒理解が深まったと回答している教員が多い。

普段の生活において、クラス全員の生徒と会話をする機会は、時間的制約などもありほとんどないといえるのが現状である。このサプリノートを介することによって、一日一回ではあるが、会話をすることができるためこの様な回答が得られたと考える。

### (2) 課題について

平成21年度は、生活記録の欄を一日一回、記入し提出をするという事に大変だという意見が多く見られたが、平成22年度は、提出（利用）率の増加により減少した。

サプリノートの利用始めは大変なものがあるが、毎日定期的実施することで習慣化し、大変さがなくなっていったものと思われる。また、教員側から上がっている、点検をすることの大変さは昨年度と同じであるが、日々のコミュニケーションをとるという観点から考えるとこの作業は重要なことで、なくてはならないものとなる。点検する者を担任教諭だけでなく、副担任、学年所属の教員で分担するなど、さまざまな方法を検討していかなければならない。

また、表4「自分の子供はサプリノートを見せているか」及び表5「サプリノートを保護者にみせているか」の結果から分かるように、生徒の中には保護者に点検を受ける事をいやがる者がいることも事実である。その割合は、平成21年度、3年生は51.8%、平成22年度は45.2%の割合であった。また、平成22年度は2年生でも割合が増えている。

保護者の協力が必要大であり、このような点も課題として上げられる。

## 5 家庭学習について

### (1) 家庭学習の状況

表15「家庭学習の状況」から、全体（サプリノートの提出（利用）状況を関係なくみた場合）では、家庭学習を実施している生徒は、平成21年度は91.8%であり、実施していない生徒は8.2%であった。この91.8%の内、18.2%は、サプリノートの提出（利用状況が良くない生徒であり、提出（利用）が良い生徒は、73.6%である。

家庭学習を実施している生徒は、平成22年度73.3%であり、実施していない生徒は26.8%であった。今回の調査は、7月期の調査であり、時期的な要因もあり、この割合になったと考えられる。

実施している生徒73.3%の内、5.7%は、サプリノートの提出（利用）状況が良くない生徒であり、その差は67.6%である。

今回の結果から、年度ごとの結果を比較した場合、家庭学習を実施している生徒の割合は低下したが、家庭学習を実施している生徒でサプリノートの提出（利用）状況が良い生徒の割合が増加しているという結果が得られた。

また、家庭学習を実施していない生徒は、平成21年度8.2%の内、3.2%はサブノート  
を提出（利用）していない生徒であった。また、平成22年度26.8%の内4.6%がサブノ  
ートを提出（利用）していない生徒であった。

家庭学習を実施しない理由としてあがった意見としては、平成21年度、平成22年度も同  
様であり、「めんどくさい」、「やる気がおきない」、「部活動や塾の学習で時間がない」、  
「他の活動で疲れてしまう」、「やり方がわからない」などがあがっている。

表 1 5 「家庭学習の状況」

家庭学習の実施		生 徒			保護者か ら見た
		全 体	提出が良い	提出が良くない	
している	平成21年度	91.8%	73.6%	18.2%	40.8%
	平成22年度	73.3%	67.6%	5.7%	77.9%
していない	平成21年度	8.2%	5.0%	3.2%	20.4%
	平成22年度	26.8%	22.1%	4.6%	22.1%
調査人数	平成21年度	303人	238人	65人	196人
	平成22年度	348人	312人	36人	172人

※提出はサブノートの提出（利用）状況をさす。

※全体は、サブノートの提出（利用）状況を関係なく見た場合。

## (2) 保護者から見た状況

表15「家庭学習の状況」から、保護者から見て子どもが家庭学習を実施していると回答  
した保護者（「毎日している」「不定期にしている」を含める）は、平成21年度40.8%、  
平成22年度78.5%で、実施していないと回答している保護者は平成21年度20.4%、平成22  
年度21.5%であった。

生徒側の回答は先に述べたように家庭学習を実施している生徒は平成21年度91.8%、平  
成22年度73.2%。実施していない生徒は、平成21年度8.2%、平成22年度26.8%という回  
答であった。平成21年度では、保護者と生徒の間では時間的なものや学習のやり方など  
に対しての認識にずれが見られていたが、平成22年度では同じ割合である。保護者の生徒の  
学習に対する関心が高まってきていると考えられる。生徒の学習の割合が低下した理由と  
して、今回の調査時期が7月期であり、前回の調査よりも早い時期となったことが影響し  
ているのではないかと考えられる。

## (3) 家庭学習の変化とサブノート利用との関係

1年次よりサブノートの活用を開始し、家庭学習に関して変化の状況を調査した結  
果を表16に示す。

なお、今回提示している結果についてであるが、②3年生の変化（平成20年度入学生）  
の小学6年～中学1年、中学1年～中学2年及び③2年生の変化（平成21年度入学生）小  
学6年～中学1年結果は、今回（平成22年7月調査）に実施した結果を提示している。よ  
って、昨年度の中間発表時の結果と異なった値となっている。

### ① 3年生の変化（平成19年度入学生）

表16-1「3年生（平成19年度入学生）の家庭学習の変化」である。

この学年は、サプリノートを1年次よりサプリノートの活用を始め、3年間経過し、初めての学年である。

小学校時代と中学校1年時の家庭学習の状況において、「良くなった」と回答した生徒は、3年生全体の22.3%であった。その良くなったと回答した生徒の内、サプリノートを提出（利用）している割合は17.0%で、8割近い者がサプリノートを提出（利用）していた。家庭学習の状況が「良くなかった」生徒は全体の13.4%で、家庭学習の状況に「変化なし」と回答した生徒が64.3%である。

中学校1年から中学校2年の変化は、「良くなった」と回答した生徒は、3年生全体の15.2%であった。その良くなったと回答した生徒の内、サプリノートを提出（利用）している者は13.4%であった。家庭学習の状況が「良くなかった」生徒は、全体の13.4%で「変化なし」が71.4%であるので、前年度と比較すると、「良くなった」生徒には変化がなく、「変化なし」の生徒が増加した。

最後に中学校2年から中学校3年の変化である。「良くなった」と回答した生徒は、3年生全体の58.0%であった。受験期を迎え、増加の傾向にあるのは言うまでもない。だが、「よくなった」と回答した生徒の内、サプリノートを提出（利用）している者の割合は42.9%という結果が得られた。家庭学習の状況が「良くなかった」と回答した生徒は全体の6.3%で「変化なし」と回答した生徒が35.7%であるので、前年度と比較すると、「良くなった」、「変化なし」の生徒がそれぞれが減少している。よって、昨年度に比べ家庭学習の状況は良くなってきている。加えて、サプリノートの提出（利用）の割合が増加しているので、利用により家庭学習の改善にサプリノートの活用が効果を上げているものと考えられる。

表16-1 「3年生（平成19年度入学生）の家庭学習の変化」

家庭学習の状況	全 体			サプリノートの提出が良い			サプリノートの提出が良くない		
	○	△	×	○	△	×	○	△	×
小学6年～中学1年	22.3%	64.3%	13.4%	17.3%	41.1%	8.0%	5.0%	23.2%	5.4%
中学1年～中学2年	15.2%	71.4%	13.4%	13.4%	47.3%	5.3%	1.8%	24.1%	8.1%
中学2年～中学3年	58.0%	35.7%	6.3%	42.9%	19.6%	3.6%	15.1%	16.1%	2.7%
((調査人数121))	100%			100%					

※家庭学習の状況の○は「良くなった」、△は「変化なし」、×は「良くなかった」を表す。

## ② 3年生の変化（平成20年度入学生）

表16-2「3年生（平成20年度入学生）の家庭学習の変化」である。

小学校時代と中学校1年時の家庭学習の状況において、「良くなった」と回答した生徒は、3年生全体の33.5%であった。その良くなったと回答した生徒の内、サプリノートを提出（利用）している生徒の割合は、31.7%で9割の者がサプリノートを提出（利用）していた。家庭学習の状況が「良くなかった」生徒は全体の7.7%で家庭学習の状況に「変化なし」が58.8%である。

中学校1年から中学校2年の変化は、「良くなった」と回答した生徒は、3年生全体の28.8%であった。その良くなったと回答した生徒の内、サプリノートを提出（利用）して

いる生徒は27.9%であった。家庭学習の状況が「良くなかった」生徒は、全体の15.4%で「変化なし」が55.8%であるので、前年度と比較すると、「良くなった」生徒が増加し、「変化なし」の生徒が多少減少している。だが、サプリーノートの提出（利用）状況がよい生徒でも12.5%が家庭学習の状況が「良くなかった」と回答している。これは考慮すべき点である。

最後に中学校2年から中学校3年の変化である。「良くなった」と回答した生徒は、3年生全体の68.3%であった。受験期を迎え、増加の傾向にあるのは言うまでもない。だが、「良くなった」と回答した生徒の内、サプリーノートを提出（利用）している割合は63.5%という結果だった。家庭学習の状況が「良くなかった」と回答した生徒は全体の6.7%で「変化なし」と回答した生徒は25.0%であるので、前年度と比較すると、「良くなった」生徒が大幅に増加している。

よって、平成20年度入学生も昨年度に比べ家庭学習の状況はよくなってきている。加えて、サプリーノートの提出（利用）の割合が増加しているので、この学年もサプリーノートの利用により家庭学習の改善にサプリーノートの活用が寄与しているものと考えられる。

表16-2 「3年生（平成20年度入学生）の家庭学習の変化」

家庭学習の状況	全 体			サプリーノートの提出が良い			サプリーノートの提出が良くない		
	○	△	×	○	△	×	○	△	×
小学6年～中学1年	33.5%	58.8%	7.7%	31.7%	53.8%	4.8%	1.9%	4.8%	2.9%
中学1年～中学2年	28.8%	55.8%	15.4%	27.9%	50.0%	12.5%	1.8%	5.8%	2.9%
中学2年～中学3年	68.3%	25.0%	6.7%	63.5%	23.1%	3.8%	4.8%	1.9%	2.9%
((調査人数104))	100%			100%					

※家庭学習の状況の○は「良くなった」、△は「変化なし」、×は「良くなかった」を表す。

### ③ 2年生の変化（平成21年度入学生）

表16-3「2年生（平成21年度入学生）の家庭学習の変化」である。

小学校時代と中学校1年時の家庭学習の状況については、「良くなった」と回答した生徒は2年生全体の30.8%であった。その良くなったと回答した生徒の内、サプリーノートを提出（利用）している生徒の割合が27.9%で、9割近い生徒がサプリーノートを提出（利用）していた。また、家庭学習の状況が「良くなかった」生徒は全体の8.7%であり、家庭学習の状況に「変化なし」が60.6%である。

中学校1年から中学校2年の変化は、「良くなった」と回答した生徒は、2年生全体の41.3%であった。その「良くなった」と回答した生徒の内、サプリーノートを提出（利用）している生徒は、39.4%であり、9割近くの生徒がサプリーノートを提出（利用）している。

家庭学習の状況が「良くなかった」生徒は全体の2.9%であり、55.8%の生徒が「変化なし」と回答している。前年度と比較すると、「良くなかった」、「変化なし」も減少した。そして、「良くなった」生徒の全体の割合が増加している。

このことから、中学1年次の「変化なし」と回答した生徒の減少分が「良くなった」に変わったと考えられる。また、サプリーノートの提出（利用）状況は前年度に比べ増加したので、家庭学習状況改善にサプリーノートの利用が関係していると思われる。

表 16-3 「2年生（平成21年度入学生）の家庭学習の変化」

家庭学習の状況	全 体			サブノート提出がよい			サブノート提出がよくない		
	○	△	×	○	△	×	○	△	×
小学6年～中学1年	30.8%	60.5%	8.7%	27.9%	57.7%	8.7%	2.9%	2.8%	0.0%
中学1年～中学2年	41.3%	55.8%	2.9%	39.4%	48.1%	2.9%	1.9%	3.8%	0.0%
(調査人数 104)	100%			100%					

※家庭学習の状況の○は「よくなった」、△は「変化なし」、×は「よくなかった」を表す。

④ 1年生の状況（平成22年度入学生）

表16-4「1年生（平成22年度入学生）の家庭学習の変化」である。

小学校時代と中学校1年時の家庭学習の状況について、「良くなった」と回答した生徒は、1年生全体の42.1%であった。そのよくなったと回答した生徒の内、サブノートを提出（利用）している生徒は、40.9%で「良くなった」と回答したほぼ全員の生徒がサブノートを提出（利用）していた。家庭学習の状況が「良くなかった」生徒は全体の8.6%で家庭学習の状況に「変化なし」が48.9%である。だが、サブノートの提出（利用）状況がよい生徒でも6.6%が家庭学習の状況が「良くなかった」と回答している。これは考慮すべき点である。

表 16-4 「1年生（平成22年度入学生）の家庭学習の変化」

家庭学習の状況	全 体			サブノート提出がよい			サブノート提出がよくない		
	○	△	×	○	△	×	○	△	×
小学6年～中学1年	42.1%	49.3%	8.6%	40.9%	40.1%	6.6%	2.2%	8.8%	2.2%
(調査人数 138)	100%			100%					

※家庭学習の状況の○は「よくなった」、△は「変化なし」、×は「よくなかった」を表す。

⑤ 学習時間について

表17「家庭学習時間」を参照していただきたい。この表は、平成20年度と平成21年度、平成22年度の年度各学年ごとの家庭学習時間である。

2・3年生は、学年が上がるごとに学習時間が延びている傾向がある。

3年生では、家庭学習に2時間以上の時間を充てている生徒は、平成22年度34.2%、平成21年度30.9%で平成20年度19.3%と、年々増加している。

全校的に多い時間帯は、この2時間以上3時間未満であり、平成22年度では34.3%となった。昨年度（平成21年度）は1時間以上2時間未満の者の割合が36.9%で一番大きな割合を示していたが、このことから、学習時間が増加したという結果が得られた。

その反面、家庭学習をまったくしていないという割合は昨年度とほぼ同じ割合であったが、学年ごとにみても、今回の調査では増加した。前述の家庭学習の状況の調査でも述べたが、今回の調査は、7月期の調査であり、この調査時期の差が結果に表れたのではないかと考えられる。

表 1 7 「家庭学習時間」

	3 時間以上	2 時間以上	1 時間以上	30分～1 時間	3 0 分未満	していない
1 年（平成22年度）	9. 5%	30. 2%	30. 2%	14. 3%	6. 3%	9. 5%
1 年（平成21年度）	3. 1%	15. 4%	33. 8%	24. 6%	15. 4%	7. 7%
1 年（平成20年度）						
2 年（平成22年度）	8. 7%	26. 1%	37. 0%	8. 7%	4. 3%	15. 2%
2 年（平成21年度）	3. 8%	17. 3%	44. 2%	11. 5%	9. 6%	13. 5%
2 年（平成20年度）	11. 3%	13. 2%	31. 2%	17. 0%	16. 0%	11. 3%
3 年（平成22年度）	10. 7%	34. 2%	27. 8%	15. 2%	3. 8%	8. 2%
3 年（平成21年度）	13. 6%	30. 9%	34. 6%	16. 0%	0. 0%	4. 9%
3 年（平成20年度）	12. 3%	19. 3%	20. 2%	16. 7%	17. 5%	14. 0%
<b>全校（平成22年度）</b>	<b>10. 7%</b>	<b>34. 3%</b>	<b>27. 8%</b>	<b>15. 2%</b>	<b>3. 8%</b>	<b>8. 2%</b>
<b>全校（平成21年度）</b>	<b>7. 6%</b>	<b>22. 2%</b>	<b>36. 9%</b>	<b>17. 7%</b>	<b>7. 6%</b>	<b>8. 1%</b>
<b>全校（平成20年度）</b>	<b>11. 0%</b>	<b>19. 2%</b>	<b>26. 3%</b>	<b>13. 2%</b>	<b>17. 5%</b>	<b>12. 8%</b>

## 6 学習支援としての利用割合

表18「家庭学習でのサプリノートの利用」の調査結果である。

全体の平成22年度は、89.7%（提出状況に関係なく）、平成21年度78.6%の生徒はサプリノートを学習の際に役立てていることが分かる。サプリノートを学習に役立てている生徒の内、平成22年度は61.8%、平成21年度は51.2%はサプリノートの提出状況がよい生徒であった。提出の有無にかかわらず、サプリノートに家庭学習の記録をしている生徒が増加している傾向が見られた。

表 1 8 「家庭学習でのサプリノートの利用」

学 年		利用している		利用していない		調査 対象数
		提出が良い	提出が良くない	提出が良い	提出が良くない	
3 年生	平成22年度	6 6. 3%	2 3. 1%	1. 9%	8. 7%	1 0 4
	平成21年度	4 3. 8%	2 2. 3%	3. 5%	3 0. 4%	1 1 2
2 年生	平成22年度	5 5. 7%	2 8. 9%	1. 0%	1 4. 4%	1 0 4
	平成21年度	5 5. 7%	2 8. 9%	1. 0%	1 4. 4%	9 7
1 年生	平成22年度	5 5. 4%	3 1. 9%	2. 1%	1 0. 6%	1 4 0
	平成21年度	5 5. 4%	3 1. 9%	2. 1%	1 0. 6%	9 4
<b>全 校</b>	平成22年度	<b>6 1. 8%</b>	<b>2 7. 9%</b>	<b>2. 0%</b>	<b>8. 3%</b>	<b>3 4 8</b>
	平成21年度	<b>5 1. 2%</b>	<b>2 7. 4%</b>	<b>2. 3%</b>	<b>1 9. 1%</b>	<b>3 0 3</b>

## II 成果と課題

### 1 成果

#### (1) 生徒理解の拡充

前回の中間報告、今回の本発表とも同様であるが、サプリーノートの活用の成果として、相互の理解度（生徒と教員との関係、保護者と教員との関係、保護者と生徒との関係）の良好な変化が挙げられる。

これは、教員側、保護者側、生徒側ともに言えることであり、生活記録の欄を介して日記に記入し、コメントをやりとりし、コミュニケーションを活発化することで、相手側の気持ちや考え方を理解することができ、そこから良好な関係作りにつながったといえる。また、保護者の場合は、自分の子どもの考え方を知る手だてとなり、保護者本人と教員との意見交換や教員と生徒とのやり取りを見ることで、教員理解、学校理解が深化できたと考えられる。さらに、教員と生徒との関係が良好な状態にあるということは、学校での生活、諸活動、学習活動が円滑に行われることにつながると考察できる。

生徒自身の情緒的な安定が図られることにより、学習面にも大きな効果が表れる。その一役としてサプリーノートの活用に効果があったことは、今回の研究にあたり、大きな成果であると言える。

#### (2) 家庭学習の改善に関して

サプリーノートの利用の分析結果より、このノートの活用によって、家庭学習時間の増加、学習習慣付けに効果があったと考える。

この2年間の変化を見ると、生活記録だけでなく、学習記録や課題の確認などに活用の仕方が広がってきている。家庭学習の場において、さらに、サプリーノートが様々な形で利用されていることからそのように考察することができる。

#### (3) 学習準備活動の確立に関して

生徒のサプリーノート利用状況調査の結果より、サプリーノートは、「持ち物チェック」「課題の確認」などに利用しているという意見が多く得られている。これは年度が変わっても同様であった。このことから、サプリーノートで次の日の各教科の持ち物や提出物、学習内容を記録し、家庭において確認をするという、学習の準備への足かかりとなり、学習準備性（レディネス）の確立に効果があったと考える。

#### (4) 規則正しい生活の確立に関して

自分の日々の活動を記録していくことで、日記としての利用が図られ、自分の状態の振り返り活動に役立てることができている。

サプリーノート提出（利用）の理由として、平成22年度の意見の中に「習慣化することができた」、「記入しなければならないものだという意識がある」という意見が見られた。また、「自分のその時期、その時の学習状況、生活状況を確認することで、よい点、うまくいかなかった点を検討し、今後の生活に役立てることができる」という意見が生徒の中から出てきている。

一つの物事を習慣化することで、生活のリズムが整い、規則正しい生活が徐々に確立し、規則正しい生活の確立に効果があったと考える。

## 2 課題

### (1) 活用方法及びチェック方法の検討

教員が日々点検することの負担が挙げられている。この点が、サプリノートの実践を継続する上での大きな課題の一つである。教員側としては、クラス全員分のサプリノートを毎日チェックするのは労力と時間がかかることは言うまでもない。生徒側も部活動を終え、帰宅、塾などの時間に大きな時間を割くことから、サプリノートを十分活用できる時間は少ない者が多い。また、保護者側からも、一週間に一度の点検が、仕事の忙しさなどから難しいという意見などがあげられている。これらの点から、記入の際、自由記述の欄の他に、項目を設定し、それにチェックするなど記載方法を簡略化するなど、様々な工夫を検討する必要があると考える。ただし、生徒の意見の中に「コメントがなく残念だった」という意見があることは配慮しなければならない。

何らかの成果を上げるためには、苦労はつきものである。その点を我々教員側は十分理解していかなければならない。現在、教員側の確認方法も複数教員での確認体制などを試みている。これらも含め、今後もチェック方法の検討を重ねていきたい。

### (2) 提出状況の良い者に対する取り組み

サプリノートの利用状況の割合が増加していることは、先に述べた。しかし、提出状況が良い生徒が未だ見られ、活用が図られていない生徒がいることも事実である。提出状況の良い生徒は、学習状況、生活状況が良い状態であるということは、一概には言えない。それは、提出できない理由に関係している面がある。ただし、学習遅延状態になっている者（学習支援面談対象者）及び生活状況に安定が見られない者に提出状況が良い者が多く見られる。この傾向は、とくに下級生に多く見られる。これは昨年度（平成21年度）の結果でも言えることであった。全体の割合は減少傾向にあるが、サプリノート活用の有効性を示し、それらの改善を目指して、今後とも学習活動の充実や規則正しい生活の定着を図っていく必要がある。

### (3) さらなる利用便利性の追究

サプリノートは活用を初めて4年目を迎えているが、同一方法での効果を検証するために、内容に関しての大幅な改変は実施せずに今日まできた。しかし、平成22年度は、学期ごとの分冊とし、利便性を高めた。生徒や保護者、教員も含め良い評価を得られている。

今後は、内容面での改編を検討の視野に入れていきたいと考える。現在、長期休業中の記入の方法、自己評価の欄を設け、生活状況などをチェックする、学習質問の欄を設けるなどの意見が上がっている。

これらの意見を踏まえ、様々な工夫をすることで、より活用の度合いが高まることが考えられる。今後、さらなる利便性を追究していきたいと考える。

### (4) 家庭学習の充実にむけて

学習活動（家庭学習）の充実に図るには、時間的な制約や、その時期の生徒の状況など、様々な要因が課題となって生じてくる。その課題を解決するためには、実態や状況に応じた手だて（支援）を行う必要がある。生徒に何を提供し、支援していくかによって生徒は変容していく。

今回、家庭学習についての質問において、「実施していない」と回答した生徒の理由として「何をしたいのか分からない」という回答がみられた。ただ単に、家庭学習を実施

せよと指導していただくだけでは、効果は上がらない。学習時間の確保を促していくことも大切だが、その時間で実施する内容、方法を指導していくことが必要である。

家庭学習に取り組めない生徒の割合は、2年生から3年生への移行期では減少している。だが、1年生から2年生へ移行期でその割合が減少になる場合は注意が必要である。1年生より、適正な学習習慣を身に付けさせ、学年が上がるとともに、学習内容の充実などが図られることが重要である。家庭学習の習慣化の定着とともに、学習内容に関しての支援活動が必要であると考え。今後もより良い学習支援方法を検討していきたい。

# Ⅲ 研究のまとめ



### Ⅲ 研究のまとめ

#### 1 研究の成果

##### (1) 研究主題、研究の方向性に対する教員の意識の統一・授業改善への取り組み

研究開始当初は研究主題に対する各教員の認識の差が大きく理解も浅かった。各種の調査結果から本校の生徒の学力の実態を明らかにし、本校の生徒にとっての基礎・基本とは何か、各教科における読解力、思考力、判断力、表現力をどのような力と解釈し、定義するかを検討し、実践に努めてきた。そして、昨年度の研究発表会において、その成果と課題をまとめることができた。

本年度（22年度）は職員の異動も少なく、研究主題への継続した取り組みも、意識統一を図り始めることができた。また授業改善についても、昨年度に引き続き、教員全員が研究主題を意識し、教科の特性や多様な授業形態における指導方法を考えながら、きめ細かな年間指導計画の作成、授業での実践と検証、スパンごとの評価、教育相談によるインフォームドコンセント等にかかわることができたことで、授業改善への取り組みもさらに深まった。

##### (2) 年間指導計画の内容、方法の工夫

昨年度、全教科で研究主題を考慮した年間指導計画を、学習のレディネスとの関連、読解力・思考力・判断力・表現力との関係、支援を必要とする生徒への手だて、基礎コース・標準発展コースとの違いなどについて、教科の特性や教科ごとの研究主題を考慮しつつ統一した形式で作成することができた。本年度は、さらに新学習指導要領の内容を踏まえたものに改善することができた。

##### (3) 検証授業、研究授業による実践

各教科において、読解力、判断力、思考力、表現力の育成や、基礎・標準発展コース等を意識した授業改善の試みは、検証授業・公開授業・研究授業などを通して実践されてきた。実践を行っていくことで、さらに教員一人一人の研究に対する意識を深めていくことができた。昨年度の研究発表会の反省を受け、本年度は特に取り組みが他の人にも見える授業をしていくことを心がけ、教員それぞれが、日々の授業において研究実践を踏まえた授業に取り組むようになってきた。

##### (4) 教育相談の活用

昨年度よりインフォームドコンセントの取り組みとして、1学期及び2学期の途中に1回ずつ及び長期休業中に教育相談を設定している。夏季休業中はクラス全員を対象としたものであったが、学期途中の教育相談は、年間行事の中に組み入れたことにより、日数・時間・対象となる生徒の数は絞る必要はあったが、計画的に実施することができた。また、「学習相談カルテ」を昨年度から取り入れたことで、年間を通してだけでなく、学年が変わったことによる担任が変わった際にも利用することにより、面談内容の継続性を図るこ

とができた。

## (5) 生活と学習のサプリノートの充実

レディネス教育の充実、家庭学習の定着、よりよい生活習慣の定着、家庭との連携、生徒理解と教師との交流の手立て等を目的として始めた生活と学習のサプリノートは、アンケートの結果より昨年度は7割強、本年度は約9割の生徒が、概ね毎日の習慣として定着させることができた。毎年提出状況がよくなってきている。生徒理解の資料としてや、家庭での生徒の姿や保護者の考えを知るにはとても役立った。また、昨年度の反省を受け、サプリノートを学期ごとの分冊にすることで、家庭にも持ち帰りやすくなった。

## 2 今後の取り組み

### (1) 年間指導計画の内容、方法の工夫

全教科で研究主題を考慮した年間指導計画を、統一した形式で作成したが、今後学習指導要領の改訂を踏まえた内容にする必要がある。さらに、観点別評価の内容についても教科ごとによって変わっていくことから、それに対応したものにしていく必要がある。

### (2) 研究をふまえた授業実践への取り組み

各教科において、読解力、判断力、思考力、表現力の育成を意識した授業改善の試みは、検証授業、公開授業、研究授業などだけでなく、日々の積み重ねの中でも実践が行われるようになってきた。本年度で研究の区切りとなるが、今までの積み重ねが生きる授業実践を今後も続けていく必要がある。

### (3) 通知表・評価方法の工夫

各スパンごとの評価の内容やポートフォリオ形式での通知表については、ほぼ形式・内容が定着しつつある。学習指導要領の改訂に伴い、観点別の評価も変わっていくことから、通知の仕方、評価方法の工夫、改正が必要になってくる。

### (4) 教育相談・学習相談カルテの活用

昨年度は長期休業中を含め5回の教育相談を設定することが出来たが、5スパンの後については時間設定ができず、人数を絞り込む必要があった。教員にとっては、資料の準備、家庭との時間調整、実際の面談と労力を要する仕事ではあるが、次のスパンでの学習に向かって生徒が意欲的になってくれるように、今後も丁寧なインフォームドコンセントを心がけていく必要がある。また、学習相談カルテは教育相談にとって有効なものであり、今後も活用していく予定であるが、区の新しいネットワークを利用したシステムに移行できないか検討を行っている。

### (5) 学習指導を支える生徒指導全般に対する取り組みの強化

基礎・基本の確かな定着と向上を目指し、充実した学習活動を推進するには、その土台ともなる学校生活の充実が不可欠である。生徒たちに様々な豊かな体験や、活動の場を与

えるためにもより安全で落ち着いた学校の環境づくりに努めていく必要がある。また、教師の共通理解のもと、確かな学級経営、学年経営や充実した道徳指導を目指し、きめ細かな生徒指導に努めて行かなければいけない。

#### **(6) 生活と学習のサプリノートの充実**

生活と学習のサプリノートは、ノート自体の形状など改良や生徒自身の習慣化により、概ね毎日の習慣として定着させることができた。生徒理解の資料としてや、家庭での生徒の姿や保護者の考えを知るにはとても役立った。提出状況も年ごとによくなってきている状況だが、面倒だからという理由で取り組む意欲の低い生徒や、保護者との連絡がうまく機能していない生徒などがあることも事実である。記述の内容や形式、提出方法など、今後も工夫・改良して充実を図っていきたい。

#### **(7) 保護者、地域との連携の強化**

本校生徒の家庭や地域の実態は、教育や学校に対する関心は高い。しかし生徒の約4割は基礎学力不足で学力の二極化傾向が顕著である。これまでの研究実践をさらに推進し学習活動、生徒指導の充実を図ることは、この二極化傾向の改善や学校教育への信頼回復となり家庭や地域への大きなアピールとなる。保護者の研究に対する理解、協力が得られなければ効果を望めない取り組みも多くある。普段の学習活動をはじめ、学校行事、生徒会活動、部活動などさまざまな教育活動を積極的に家庭や地域に発信し紹介することで関心を高め、理解を更に深めたい。「凜として、確かな学びで大きく伸びる日本橋 心かよわせ夢かなう学校」というスローガンのもと、今後の取り組みが目標とする学校の姿としてとらえてもらえるように教育活動を推進していきたい。

研究に携わった教職員（ ）は年度

校 長	田部井 重 雄 (20, 21, 22)	
副 校 長	佐 藤 太 (20)	飯 塚 善 行 (21, 22)
国 語 科	都 甲 麻 衣 (21, 22)	渡 辺 雅 美 (21, 22)
	清 水 如 水 (20)	
社 会 科	櫛 川 誠 也 (20, 21, 22)	近 野 進 (21, 22)
	工 藤 美保子 (20)	
数 学 科	小 川 和 博 (20, 21, 22)	下 川 勝 久 (20, 21, 22)
	今 田 麻里子 (20, 21, 22)	
理 科	田 中 広 行 (20, 21, 22)	荒 卷 千 尋 (20, 22)
	石 井 享 子 (21)	武 井 ユリカ (21)
英 語 科	大 沼 俊太郎 (20, 21, 22)	品 川 智佳子 (21, 22)
	山根木 奈津子 (21, 22)	佐 野 恵 子 (20)
音 楽 科	渡 邊 浩 美 (21, 22)	豊 田 千 絵 (20)
美 術 科	上 村 博 美 (20, 21, 22)	
保 健 体 育 科	平 沢 晃 (20, 21, 22)	白 岩 伸 予 (21, 22)
	田 中 義 一 (22)	畑 野 恵 子 (20)
技 術 家 庭 科	小 野 みどり (20, 21, 22)	東 野 隆 成 (22)
養 護 教 諭	若 林 純 香 (20, 21)	渡 邊 典 子 (22)
事 務 主 事	田 中 美知代 (22)	塚 原 企美子 (22)
	小 林 都 (20, 21)	須 田 芳 夫 (20, 21)
用 務 主 事	中 田 晶 三 (20, 21, 22)	村 杉 薫 (20, 21, 22)
栄 養 士	鈴 木 佐代子 (21, 22)	
区非常勤講師	国語科	樋 口 晃 子 (21, 22) 高 橋 彩 子 (22)
		田 中 邦 子 (21) 石 川 淳 子 (20)
		都 甲 麻 衣 (20)
	数学科	松 田 恵利子 (20, 21, 22) 林 亜 紀 (21)
		井 上 正 登 (20)
	英語科	鈴 木 孝 輔 (20, 21, 22) 堀 越 亜 希 (20, 21, 22)

## ご指導いただいた講師の先生

文部科学省 国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部部長	葉 養 正 明 先生
帝京大学教授	浦 野 東洋一 先生
東京農業大学教授	緑 川 哲 夫 先生
相模女子大学教授	佐 藤 道 幸 先生
帝京大学准教授	石 橋 昭 先生
教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課指導主事	山 村 智 治 先生
新宿区立四谷中学校長	吉 田 和 夫 先生
目黒区立田道小学校副校長	熊 谷 恵 子 先生
中央区教育委員会	和 田 利 次 指導室長
中央区教育委員会	佐 藤 太 統括指導主事
中央区教育委員会	山 崎 隆 統括指導主事
中央区教育委員会	長 町 正 弘 指導主事
中央区教育委員会	滝 上 俊 恵 指導主事
多摩市立北豊ヶ丘小学校長	小 林 佳 世 先生（前中央区教育委員会統括指導主事）
中央区立銀座中学校副校長	宮 崎 宏 明 先生（前中央区教育委員会指導主事）

## おわりに

中央区立日本橋中学校 副校長 飯塚 善行

平成20年度から取り組んできた本校の研究は、平成22年10月15日の研究発表会をもって一つの区切りを付けることになりました。去る平成20年2月5日の本研究の中間報告会には、全国各地から400名を超える先生方がご来校され、様々な観点から多くのご意見や感想をいただきました。

それらの意見や感想等を踏まえ、研究の最終年度の今年度、私たちは、一時間一時間の授業の中に意図的に研究主題が見えるような取り組みを推進していこうとの共通理解を図り、実践してきました。本誌に、その成果を一分でも感じいただければ私たちにとって幸いなことです。

さて、現在、新学習指導要領の完全実施が間近に迫り、そのための準備や対応がいよいよ現実的なものになっていく中、土曜日の授業の実施、新しい学級編制基準、指導要録の改訂と今後の学習評価のあり方など、私たち教員にとってさらに識見を深めていかなければならない状況が生まれています。

しかし、教育環境や制度がどのように変化していったとしても、次代を担う子どもたちに必要な知識を身に付けさせ、豊かな人間性をはぐくみ、たくましく生きる力を育てるという崇高な教育の目的は不変です。そのために、私たちの研究には終わりはありません。

今後とも、本校の教育にご指導・ご鞭撻をいただきますよう、よろしく願いいたします。